
魔法少女リリカルなのはStrikerS 紺碧の姫

non

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紺碧の姫

【Zコード】

Z7590Q

【作者名】

noh

【あらすじ】

ファッションワールからリリカルなのはの世界に迷い込んだアセルス。

半妖となつた自分を見つめ、そしてこれからすべき事を探している、そんな少女の物語。

現実逃避（前書き）

はじめまして。ここと申します。今回が処女作で、いろいろ問題があるかと思いますが、頑張りますのでよろしくお願いします。

現実逃避

「はあはあ……」「

私はただ必死に逃げた。

追っ手はすぐそこまで来ている。

私はただ逃げ続けた。

千載一遇の機会。逃すはずがない。逃したくない。私はここから逃げ出したい。その一心で私は走っているのだ。

「アセルス様！！　追っ手が迫っています。ここは私が食い止めますので」

振り返ると、こちらに笑みを浮かべる顔が視界に飛び込んできた。

「白薔薇！－何言つてるんだ、一緒に逃げないと白薔薇が－－」

「アセルス様、私のことはお構いなく。それよりも早くお逃げ下さい。白薔薇が一緒じゃないと意味がない－－」

私は白薔薇を引っ張るとシップと落ち合ひ予定の崖へと向かった。

「いない！騙されたんだ！」　私は周囲を見渡すが何もなかった。「このままじゃ……」　私はただ焦るばかりだ。そして追い打ちかの『』とく彼が現れた。

「イルドゥン！アセルス様！」こは私が。　「イヤだ！私も戦う。」

イルドゥンに勝てるはずがないと分かっている。でも1人で逃げ出すのは嫌だ。それなら一緒に戦つたほうがいい。そんな気持ちを遮るかの様に彼は言葉を投げかけた。

「おままで」とはそれぐらいにしていただきましょう。さあ、手間をかけさせないでください。」

「責任は私にあります。罰するなら私を、イルドゥン」

「それは主上が御決めになることです」

「あそこに戻るくらいなら、ここから飛び降りてやるー！」

「アセルス様！」

私は崖に向かい走りだした。あそこに戻るくらいなら死んだほうがいい。私を追いかけてくる一人を気にも留めず私は漆黒の闇へと身体を投げた。

「アセルス様！！」

「あの小娘！…」

二人の声が聞こえる・・・でももう関係ない。もうすぐ楽になれる。そうやって意識を手放しかけたその時だった。

「・・・様」「・・・娘」

最後に見えたのは白い薔薇と碧の髪。私は意識を手放したのだった。

海…？ 波の音が聞こえる。どうして？ここは一体どこなんだろう
疑問が次々と頭を駆け巡る。そして眩しい光に包まれた。

「アセルス様…やつとお目覚めになれましたね」 「やつとか、全く
くいつまで寝るつもりだ小娘」

「私は小娘じゃない！アセルスだ！！…って私生きてる…」
死んだと思っていた私にすれば一体どうなっているのか見当もつか
ない。思考を無理やりまとめ問い合わせた。

「そういえば…ここは何処？それに白薔薇はともかく、なんでイル
ドゥンまで…？」 「それは私が答えます、アセルス様」

「アセルス様が崖から身体を投げた直後に、私とイルドゥンは追い
かけました。気を失っていたアセルス様に追いついた時、私達は
黒い霧のようなものに包まれました」

「そして気が付いたらここに居た訳だ。分かったかアセルス」
白薔薇、イルドゥンの説明は終わり、周りを見渡してみた。

「周囲には他に何か？」 「いえ、何もありませんでした。人の気配
は当然ありません」

溜め息混じりに頃垂れた。どうやら無人島のようだ。

それここはファシナトゥールではない。このような場所は無い。
海なんて…それに太陽…。

「シュライクに帰ってきたみたい」

私は薄い期待を込めて呟く。しかし現実はそんなに甘くない。

「ここは我等の知る世界ではないな」「どうこいつと一緒に？」
私には彼の言つてゐる意味が理解できなかつた。

「リージョンの中にこのような世界は知らん。あくまで予想だが、
違つ世界に飛ばされたのではないか？」

「それに黒い霧の件もある
彼の言つてゐることは一理あるはず。でも今はこの状況をなんとか
しないと。」

私は白薔薇に視線を向ける。白薔薇も首を縦に振つた。

「とりあえず、ここから脱出しないとね」

現実逃避（後書き）

文才を磨くため頑張ります。

邂逅

脱出の手段をさがして私達は島を搜索している。自然に溢れたこの島に機械的な物など存在するのだろうか。

「イルドゥン」

「何だ」

「そういえば、イルドゥンって空間を移動することができたんじゃなかつた?」

「残念だが、もう試してみた。何故だか分らんが、力が使えんのだ」

「白薔薇も?」

「残念ながら…アセルス様」

光が見えたと思つた矢先にまた闇に覆われてしまい、自分を慰めるようになごく。

「はあ…イカダでも作つてみる?」「止めておけ」即答で却下された…

「じゃあ、イルドゥンは何か方法はあるの?」怒氣を込めて私は問い合わせる。

「何を怒つているのだお前は?今はそれよりも島の把握だろ?」

「さつきからそれしか言つてないよ。ちゃんと考へてるの？」

焦る私はただ我儘に近い怒りをぶつけるだけだった。

「アセルス様、落ち着いてください。今はイルドゥンのおっしゃる通りです」

白薔薇に説得され渋々納得。不貞腐れでいると不意に白薔薇が隣にやって来た。

「アセルス様… 今夜は…」

思いがけない言葉に私の顔は紅く染まってしまった。

「ななな… 白薔薇、何を言つてーーー

「冗談です… ーーーアセルス様」

唇に指を当て、微笑を浮かべる白薔薇に私は動搖を隠せなかつた。

「おい、何やつてる。早く行くぞ。」

イルドゥンがイラつきを抑えながらこちらに声をかける。

「白薔薇姫様、お戯れは程々にお願いします」「なつな、何を… /

/ /

…しまつた 動搖が抜けていなかつた。一人に揃つて笑われる私はただ自分を恨むだけだった。

島は案外狭く、半日程度で探索することができた。

さて…これからどうするのか。そんな思考に私は耽つていた。

「アセルス！！上だ！！！」

私はその声に反応し、頭上を見上げる。

「キシャーーー！」

奇声と共に何かが落ちてきた。

潰される。思考よりも先に身体は動いていた。座っていた流木は跡形もなく吹き飛び、舞い上がった砂と共に私に吹き付けた。

「…つづ、一体何？」

砂塵が収まるとそこには逃げてきたあの場所にいた生き物だった。

「大きいサソリ！？」「アセルス様、あればテスپーカーです」

「テスپーカー？初めて見たよ」「焦るなアセルス、訓練は十分積んできたはずだ。嫌という程な」

「イルドゥンに散々やられたからね」「今回は1人で戦え」

「えっ、1人で？」「当たり前だ。私はあのとき敵として居たからな。当然だ。それに白薔薇姫様の手を煩わせる訳にもいかんからな」

「イルドゥンが勝手に決めるな。白薔薇、一緒に戦ってくれ

困った顔でお願いするアセルス様を放つておく」とはできません。イルドゥン…ごめんなさい。

「分りました、アセルス様」

「ありがとう！白薔薇！」

満面の笑みを浮かべるアセルス様は素敵でした。

「まったく、白薔薇姫様はアセルスに甘すぎる」

そんなボヤキを背に受け私達は魔物へと対峙する。

「さて、アセルス様。参りましょ」

私はイルドゥンから貰つたボーイーナイフを構えた。白薔薇は後ろでサポートを担当してくれている。

「行くぞ、化け物め

私は正面からデスボーカーへと駆けだした。イルドゥンとの訓練が活きているのだろう。

「見えるー遅いよ」

なぎ払われた尻尾を空中へ回避すると同時に落下を利用して斬りかかる。

「はああー！」

裂帛の気合のもとに斬りつけるが

ギンツ!

まるで金属と金属がぶつかった様な音と同時に、ハサミにナイフが受け止められていた。

「くっ！」いつ…今まで戦つた奴よりかなり固い

ナイフが通用しない相手に格闘なんて通用しない。まして今の私の体術なんかじや とても…

「馬鹿！ 戦闘中に考えに耽る奴がいるか！」

イルカさんの音が空しく、私の眼前には毒針が無数に展開していく。

「しまつた！！！」

かしやーん！！！

何かが割れるような音がした。何だろう？硝子みたいな音だつたけど？

すると目の前で薄い硝子が砕け散り、その破片は魔物へと飛翔していく。硝子片は次々と刺さり、魔物は奇声をあげている。

「間に合って良かったです。アセルス様、お怪我はありませんか?」

陽術 スターライトヒール

「ありがと、こちらでの硝子みたいなのは白薔薇が？」

「あれは硝子の盾です。妖術の一つです。アセルス様もお使いになりますよ」

なんか便利そうだけど、術は苦手なんだよね…ってそれどころじゃない。

「ただ斬るだけじゃあの皮膚は破れない。皮膚が硬いのなら…」

硝子が刺さった為だろう。デスポーカーは激昂している。ハサミや尻尾を振りまわし私に襲いかかる。私は冷静に攻撃を避け、観察していた。

多分、あの皮膚の継ぎ田なら…ナイフでも

私は一気に間合いで詰めた。よし、反応できていない。

「そこだつー！」

私は継ぎ田を狙いナイフを突き刺した。いや、突き刺せなかつた。

「足元が揺れる？」

見ると、尻尾とハサミが地面を激しく打つていた。

グランドヒット

激しい揺れと衝撃に私は昏倒しかけた。視界がぶれる。よほど衝撃だったんだろ？。

「アセルス様！！！」

白薔薇の声が遠くに聞こえる。

「ちい、やはり無理があつたか。そろそろ助けんとまよいな

白薔薇、イルドゥンの心配を背に私は何とか持ちこたえた。

考える。あいつは近づくと今の攻撃で反撃してくる。なら気付かれなければいい。もつと速く速く。

「速く、あいつに突きたてればいい！！」

駆けだした。ダメージは抜けてはいない。でも止まれない、もつと速く、速く駆け抜けたい。

だが空しいかな

こちらに気付いたのか、魔物はハサミを大きく振り上げている。

「くっ、白薔薇姫！！回復はまだですかーー？」「もう少しで……詠唱が終わります。……アセルス様」

気付かれた。でももう止まれない。あの攻撃にはもう耐えられない。だから！――

「速く！！！」

その言葉と同時に私の頭の中に電流が流れるよ、強烈なイメー

ジが沸き起る。

無意識にイメージを行動へと変化をせる。

「はああああ

疾風迅雷とはまさにこのことだろ。振り下ろされたハサミの刃
根を吹き飛ばし反対へ突き抜ける。

「閃いた」

言葉が消えるよりも速く私は動いた。的確に継ぎ刃を狙い、突き刺
していく。

「凄い…アセルス様！あんなに怪我なされているのに」「血から逃
れることはできんのだな」

「あつはつはつは…」

ナイフが刺さることに私は笑っていた。

私は笑っていたのだ。何故？こんなに笑つてるの？

楽しいからだ。楽しい。楽しいんだ。

そつ楽しいから…

血しぶきを浴びながら、また一つ、また一つ、はね飛ばしていく。
もはや原型が分らないほど。私が着ている服もそりて染まってしまった。血の色に。

「どうの

そうこうで首をはね飛ばし、同時にナイフも折れた。この相手に最

後まで耐えたことが不思議だ。

「キイイイイイー」

派手な奇声を最後に血を噴き出し、その場に絶命した。

「アセルス様！！」「アセルス」

二人がこちらに向かってするのが見えた。緊張の糸が切れてしまつたのだろうか、私は意識を失った。

そして謎の昂揚感と共に。

邂逅（後書き）

閃いたのは稻妻突きです。
駄文だ〜。

現実（前書き）

しばらくオリジナルな話が続きます。
キャラ崩壊はなるべく回避したいですが・・・
頑張ります。
あと、短いです。

現実

第1管理世界クラナガン

「古代遺物管理部 機動六課」

疲れを感じさせるが、ジニが満足そうな彼女は居た。

「とつあえず、地盤はできたわけやー」これから頑張るでーーー！なあ
リイン」

「はーですーはやてちやん」

ハ神はやで、そしてユニアゾンデバイスであるリインフォース？。二
人とも笑みを浮かべている。

「騎士カリムの予言を地上本部が信用してへんからな。私達でなん
とか自由に動ける部隊を作りたかったんや。
それに、なのはちゃんとフュイトちやんとの約束もあるしなー」

「はやてちやん… 最後の眼つきがこやらしこですう」

「そんなことなによーリイン。心配しす、わざわざ」

はやての手の動きに心配が隠せないリインだった。

「さて、部隊もできたことやし、あとはFWを何とかせなあかんの

やけど……

手元にある資料を再度見直す。大々的に人材を集めるわけにはいかん。優秀な人材が周りに居てくれて感謝してる。でもFWが足りていらない。

時間は少ないけど、育てるしかない！！

「リイン。この4人の資料を、隊長達に渡しておいてくれるか？」

「了解ですよ。はやでちゃん」

そう言ってリインは飛び出していった。まだまだ幼いが私の大切な相棒だ。

資料を片づけ、席を立とつとした時だった。

EMERGENCY EMERGENCY

緊急事態を告げる警報が鳴り響く。

「グリフィス君！－一体何が？」

八神はやての副官を勤めるグリフィス・ロウランに緊急通信で呼び掛ける。

「部隊長、首都南西の無人島に強力な魔力反応を確認しました。解析では転移魔法の一種までとしか解つてはいません。どうやら魔法のタイプが異なるみたいですね」

異なる？疑問を浮かべるも問題解決の為に指示を飛ばす。

「ヴァイス陸曹にヘリの準備を。あとシグナムに現場に向かってもらひ。すぐにそっちに上がるから、グリフィス君、よろしく

「了解した。主はやで」「いつでも準備できてしまよ。隊長」「了解です」

本当に優秀で助かるわ。思わず笑みがこぼれるが、すぐに気を引き締める。

「機動六課の慣らし運転や！頼むで！みんな」

「「「「了解……」」」

side out

アセルス side

殺せ

「えつ！？何？？？」

殺せ

「一体…何？」

私は恐怖と混乱に支配されている。心と意識に殺意が語りかけてくる。なんで？、そういうえば魔物と戦った時も…

「私は殺すことこそ、喜びを感じた事なんかない！！私は人間だ！！！」

叫ぶと同時に私は意識を回復した。

周りは暗い。どうやら気絶していたようだ。

「アセルス様…大丈夫ですか？ ひどくうなされてましたが」 「白薔薇…うん、大丈夫」

額の汗を拭い返事を返す。

「あれっ？ 血が…付いてない」

「お前はもう人間ではないので。人と妖魔の血を持つ者。つまり半妖だ」

「違う…！ 私は人間だ…！」

認めたくない。半妖だなんて。信じたくない。

「いい加減にせぬか。この小娘が…！」

私の胸に何か刺さっている。えつ？？？なんで？

ばたつ…

「イルドゥン…！」 「これくらいで死ぬような身体ではもうない。いつまで寝ているつもりだ」

私は死んではない。それに流れ出す血の色は…

「紫の血なんて…おかしいよ…」

現実から目を背けたくても、事実は変わらない。私は死んではない

い。血は赤ではない、紫だったのだ。

「私、これからどうなるのかな…ねえ白薔薇。どうなつちやうんだろ?」

弱弱しく語るアセルス様に私は悲しみを覚えました。ですが、の方の血を受け継いでしまったからには、この宿命からは逃れることはできません。

それならば、アセルス様を、強く、気高い、慈愛に満ちた姫へと導かなくては。

「アセルス様、白薔薇は一緒にです。今は我慢せず泣いてくださいませ」

私は白薔薇に身体を預け、泣いた。ただ悲しくて、理解できなくて。私は泣くだけだった。

「自分の立場に気付いてもらいたいものだな」

彼はそう呟くと、どこかに行ってしまった。

白薔薇姫様、どうやら何かこちらに向かってきています。私は確認に向かうので、そこでの泣き虫な姫をよろしく頼む

わかりました。アセルス様は任せください。イルドゥンも気をつけ

私とて油断はしない。剣の腕は錆びてはおらん

あの3人の中でも、剣はイルドゥンが一番でしたからね。頼りに

してこまか

やつして「世間の覇者」は闇に消えた。

現実（後書き）

なるべく設定は守りたいです。

戦狂（前書き）

またもやバトルです。
言葉の雰囲気が怪しいかも・・・
バトル・・・難しいです

戦狂

s.i.d.e シグナム

今回が私達、機動六課の実質的な初任務というわけだ。現在、現場に出ることができるのは、高町、テスター・ロッサ、ヴィータと私しかいない。

幸い、現場の確認が主な任務であり実質、私一人というわけだ。

「俺つちのこと忘れないで下さいよ。姉御」

すっかり忘れていたことは気にしないでおこう。しかし、こんな無人島に魔力反応とは…何もなればよいのだが。

「ヴァイス陸曹。私が先行して現場の状況確認を行つ。連絡があるまで手前で待機だ。」

「了解しました！今、ハッチ開けますぜ」

ゆっくりと開くハッチの先には闇が広がっている。
もう日も暮れたのだろう。
さて…仕事だ…！

「ライトニング02 シグナム出る…」

闇夜の空に身体を預け、しばらくの自由落下を楽しむ。そして彼女の持つ紫に輝く魔力に包まれた。

「行くぞ…！レヴァンティン」

「Jawoh」

アームドバイスであり相棒のレヴァンティンに声をかけ、騎士甲冑を纏う。

まさしく騎士そのものともいえるバリアジャケットを。

彼女は島へと飛翔したのだ。

上空から島を見下ろす。島自体は広くはない、むしろ狭い部類に入るだろう。

さて、どうしたものか…

幸い月は出ているものの視界は良いとはいえない。
島に降りて捜索するしかないのか…。

「苦手だが、この際仕方がない」

そういうと、魔力を込め、方陣を展開する。

広域のエリアサーチを行うわけだが、あくまで何があるのか分るわけではない。

魔力の波を打ち、それにより魔力反応を確認しようというのだ。

これは潜水艦でもピンガードといつものがある。

「レヴァンティン」

魔法陣にレヴァンティンを突き刺すと、島を覆つゝに魔力の波が広がつて行く。

水面に波紋が広がるよつ。するとすばやく反応があつた。

「Entdeckung」

びつやら発見したようだ。数は…3か。

状況は把握できた。そして島に降り立つた。

「Gefahr」

唐突に危険が告げられた。

side out

side ilow

「あれは機械か？無粋な物だ」

そんなボヤキを吐きながら、彼は飛来する者に向かつっていた。

今は夜。闇が支配する夜こそ我らの日常的な場といつても過言ではない。

森の中を颶爽と駆け抜け、視界が開けよつとした時だった。彼は急に身体を隠し、気配を殺した。

「なんだ、今のは？」

思わず口に出してしまつた。何か感覚のない何かが身体をすり抜けていつた感覺に危機感を覚える。

これは…。この世界には魔術のようなものが存在しているのか？思考を巡らすなかでも、緊張感と警戒は解かない。気配も完全に消している。

「宵闇の霸者」は伊達ではない。

思考に更けていたその刹那…

来たか…！

彼は気付いた。この疑問をもたらした本人である、シグナムの姿に。

もつその場所には居ない。疾風の如く、彼は駆けた。アセルスなど比ではない。音も立てず、

砂地であろうとも、足跡も付かない。

「宵闇の霸者」たる彼は斬りかかったのだ。

妖艶に輝く「妖魔の剣」を手に。

一撃で決めるつもりだった。いや、決まるはずだった。だが眼前の敵である彼女は生きている。

「ほう……あれを止めるとはな、少しほでかれるようだな

シグナムはレヴァンティンの警告に瞬時に反応し、攻撃を防いでいた。

彼女の騎士としての経験、そして烈火の将としての力だらつ。

「貴様！……いきなり何をする…？」

困惑と怒りに満ちた声だシグナムは問いかける。

「貴様か？不快な魔力を打ち込んだのは？」

「不快とは失礼ではないか？それよりも貴様、いきなり斬りかかるとはどういうことだ？」

やはり魔力……魔術があることを彼は確信した。つまりこの世界も少しばかりは似ているところがあるのかもしれない。ファシナトゥールに戻る方法も探さねばなるまい。

思考をまとめると次の質問に答える。

「敵と判断したからには情けなど一切ない。それに不意打ちなど当然だろ？」

剣と剣が激しくぶつかり合ひ。

ギィイイン

お互いの顔と顔が直ぐそばにある。

「くっ…押されているのか

「どうした、娘。その程度か？」

剣を打ち払うとそのまま斬り払い、彼女の騎士甲冑を切り裂いた。

side out

side シグナム

はつきりとした痛みを感じる。

斬られた胸に手を当てる。生温かく、ぬめつとした感触。

「血か…」

どうやら私を殺す気のようだ。あの剣はデバイスなのか分らんが、どうやら殺傷設定であることは間違いない。

ふつ……どうやら本氣らしい。

「ふふふ…はっはっは…」

高らかに笑い声をあげる。久しぶりに胸が高まる。

死合だ。死合ができる。

私の心は湧き上がる感情を抑えきれなかつた。

「レヴァンティンー！殺傷設定に変更！！ カートリッジロード

「ヒュウヒュー」

私はカーテリッジを装填した。すぐにロードされ薬莢が排出される。
さあ、存分に楽しもうではないか。死命を…

「ヒュウヒュー」

「はあああああ

剣を振るつと鞭の様に剣が伸び、撓る。正しくは連結刃であるが。
縦横無尽に軌道を変え、相対する彼へと押し寄せる。

「やるな、そこの騎士よ。ただの魔術使いではなかつたか」

迫りくる連結刃に彼は動いてはいない。
ただ高速で軌道を変えて襲い来る刃を交わし、打ち払う。

「どうした、こんなものか？これでは掠り傷さえつけられ」とはでき
んぞ」

胸躍らせるようなことを語ってくれる。このような強者に会えたこ
とに感謝せねばな。

戦闘狂の一面を持つ彼女は今をただ楽しんでいるかのようだ。

「ならば、これでどうだ…！」

連結刃を砂地へぶつけると、砂を巻き上げ、視界を奪つた。

「ほひ、少しは考えたな」

イルドゥンもまた同じであつた。アセルスの教官を務めるくらいで、自分以上、または同等の剣を扱う者と戦うことがなかつた。彼も飢えていたのだ。シグナムみたくな強者を。

「だが視界を奪つた程度では何も変わらん！！」

実際に、シグナムの位置は掴めていた。上級妖魔の彼になら容易いだろう。

だが、彼女とて無策ではなかつた。

「Schwertform」

いつのまにか連結刃は元の剣に戻つていた。
そして機械的な音と同時にカートリッジが一発分ロードされた。

「はああー！ 紫 電 一 閃」

シグナムが持つ魔力変換資質 炎

レヴァンティンに烈火の如き炎を纏い、なぎ払つた。

両者の剣が再度交錯する。

だが……拮抗することはなかつた。魔力が上乗せされた攻撃に流石の彼も耐えることはできなかつた。

「ぐはっ……」

口から息を強制的に漏れる。剣で防御したとはいえ、そのまま吹き

飛ばされてしまった。

「はあ…かはつ」

内臓系にダメージを負つたのだろう。口に溜まつた血を吐き出す彼の前に、剣は振り下ろされた。

「終わりだ」

ぶしゅやあああ

まるで噴水のようだ。

彼の首から上がぼとりと砂浜に落ちた。

そして周りには青い血を撒き散らして。

「ふふふ…勝つた…！…勝つたぞ…！…！」

狂氣乱舞。まさしく今の私はそつだ。強者との死命に勝つたこの喜び。

何物にも代えがたい至福。

私は久しぶりにむさぼっていた。

「甘いな…狂気に飲まれし騎士よ」

なにが起きたのか。彼の死体が急に消えた。
そして私の首筋に痛みが走る。

「妖魔の剣よ。力を解放せよ。ブラッジドスレイ！」

脱力感に襲われる。まるで血を吸われているようだ…
「最後まで油断しないことだな。我的罠に貴様はかかっていたのだ
からな」

いつたい何をされたのか見当も付かない。
ただ、この状況はまずい。

血を吸われているのだ。このままでは、意識を…

急に私は自由となつた。

「はあ…はあ…」

息が整わない…相当吸われたようだ。さらに彼をみると傷が癒され
ていく。

「悪いが、回復させてもらつた。しかし、貴様人間ではないな？」

いきなり核心に触れられ畳然とする。何故分かつたのだ？

「貴様の血は人間の血ではなかつた。それに魔力を感じる。あと言

つておくが、私は吸血鬼のような類いではないからな」

こちらの考え方を見透かされたような答えた。思考を読む能力を持つているのかもしれん。

「さて、恨みはないが死んでもらおうか。せめて名前でも聞いておいてやる。名前はなんだ？」

「烈火の将がシグナム」

「では、さらばだシグナム」

剣が首を撥ねようとしたその時だ。

イルドゥン！！アセルス様が！！

イルドゥンの動きが止まった。

私はその隙に距離を取った。

「最後まで油断するなと言ったのはそちらではないのか？」

彼に言い放つも見向きもしない。何かあつたのか？

「シグナムとかいったな、少々まずいことになつた。貴様に協力してもらいたいことがある」

殺されそうになつた相手に協力を申し込まれるとは思つてもいなかつたのだろう。

彼女は前のめりに倒れそつになつっていた。

「なにを急に言い出す。私達は敵同士だぞ」

「だが、そんなことは関係ない事が起きているのだ。人数が足りん。それに貴様の力ならば役に立つ」

上から言われていることに怒りを感じながらも、私は答える。

「そんなこと信じられん」

「早くしないと、この世界が終つてしまふかもしれんぞ？それでもいいのか？」

冷静になれ。私の任務はなんだ…。そうだ。思い出したか？烈火の将 シグナムよ！――

「分かった。協力しよう。ただあとで貴様たちを連行する。いいな？」

「好きにするがいい。我らとて知りたいことがあるからな。それよりも行くぞ」

彼は駆けだした。私も飛翔し、追いかける。

「後で再戦だ！！！次は絶対に勝つ」

くつく… 戰闘狂の騎士め… まあ我も間違いではないがな。

「いいだろう。一度と戦いと思えんまで叩きのめしてやるわ」

戦闘狂の一人は闇夜に溶け込んでいった。

s i d e o u t

ヴァイス
「俺の出番が o r z」

戦狂（後書き）

・・・ orz

次の話もバトルです。
イルドゥンがシグナムに勝つた方法はまた後ほど。

覚醒（前書き）

今回もバトルです。
六課のみなさんはもう少しで登場です。

side アセルス

白薔薇に抱きつき、泣いた。もつ30分くらいは泣いていたのだろう。

認めたくない現実を認めなくてはならない。そんな現実と、まだ覚めない悪夢なのではないか。そんな淡い希望に私の心が揺らいでいた。

「いやだよ……こんなのは」

「アセルス様……」

イルドゥンもどこかへ行ってしまった。私に呆れたのだろう。それに彼は敵だ。

様々な感情に心を揺さぶられ続ける。なんで私が…なんで?

「…これは」

白薔薇が驚いている。何があったのかな?疑問を抱く私にもその答えはやつてきた。

「あ、がああ…がああ。」

びぢゃ
びぢゅびぢゅ

声にならない言葉と共に嘔吐している私。

疑問の「答え」が私を抜けた瞬間から私はこうなのだ。

「アセルス様！！大丈夫ですか！？しつかりなさってください」

かなり焦っている白薔薇の声は届いてはいない。代わりに聞こえるのはこの声だ。

「力が欲しいか？半妖の姫よ」

何を言つてゐる？ 力？ 一体何の力？ それよりも私はこの運命から逃げ出したいのに。

「力があれば、逃げ出すことだってできる。どうだ姫よ。力は欲しくないか？」

心が揺れた。なんとか理性を保とうと必死だった。でも後は簡単だつた。

逃げたい。もういやだ。逃げたい。逃げたい。逃げたい。

そうだ。欲しい。力が。力が。力が。

「力が欲しい！」

「良かるう。だが契約の代償は頂く。それはお前の人間としての寿命を貰う。」

今の私にはそんなことは関係なかつた。そう力を欲する私には。そんなどこと関係なかつた。

「そんな安い代償、貴様にくれてやる。わあ……私と契約だ」

「よかろう、後で後悔しても遅いぞ。なりば呼ぶがいい。我が名を。

「

「我が名は」

幻魔

私は手を伸ばした。紅い光の中に。
そして現れたのだ。

契約した剣：幻魔が。

side out

side 白薔薇

アセルス様に異変が起きてかなり時間が経ちました。今は少し落ち
着いてはいますが、苦しそうです。

今の私には看病することしかできません。アセルス様：

「・・・」

アセルス様が何か呟いたことに気付きました。しかし、私には何を呟いていたのかは聞き取れませんでした。ですが、それは最悪な形となつて分かつたのです。

「があああ、ああああああああ

咆哮と共にアセルス様の容姿に変化がありました。
髪の色は緑から紺碧へと、紅い瞳は紫紺へと。

妖魔化

私は気付きました。アセルス様が妖魔の力を解放したのだと。そしてあの御方の血に目覚めてしまつたということも、異変はもう一つありました。アセルス様が持っているあの紅い剣です。

「もしかして…あれは…！」

すぐにイルドゥンに連絡を取つていました。

イルドゥン！アセルス様が、妖魔の力を

何故だ？アセルスは妖魔の力はまだ使えないはずだが

先ほどの魔力か何かがきつかけでしょう。半妖のお体になられてから月日は浅いです。それに魔力とは無縁の生活をされていらっしゃたので

魔力に妖魔の力が誘発して目覚めてしまったか。わかつたすぐにそちらに戻る

それと、イルドゥン。アセルス様が紅い剣を持つていらっしゃるのですが、もしや…

イルドゥンから緊張感を感じられました。どうやら予想は当たったようです。

白薔薇姫様、もしや幻魔では

やはりそうですか… イルドゥン… そうであれば大変です。アセルス様を止めなければ… !

くつ… 急いで戻ります。白薔薇姫様、決して無理はなさらず

なんとか持ちこたえますから。イルドゥンも早くお願ひします

そういうて会話を終了した。

私だけでどのくらいもつでじょつか…
正直心配です。

思いを語ると同時。

アセルス様は斬りかかってきたのです。

side out

side イルドゥン

この世界に終わりをもたらす存在。可能性が目覚めてしまった。
今はただ止めなければならない。

「遅いぞ、シグナムとやら。時間は待ってはくれん」「貴様に吸わ
れた血と傷で魔力が乱れているせいだ。それにもまだ名前を聞いてい
ない」

そんな彼女に鼻で笑う。なんてくだらない。まあこれも一興だがな。

「イルドゥン」

そう告げただけだ。

「イルドゥン…わかつた。しかしイルドゥン。先ほど言っていた世
界が終るということだが、どういう意味だ？」

彼女の問いかけに笑いながらも冷静に答える。

「誰も逆らえなくなる。ただそれだけだ」

「うーことだとでも言いたそうだ。だが今はそれどころではない。
言葉が現実となってしまう前に。

「Uの先だ！行くぞ」

そういうつて二人は夜の道を抜けるのだった。

「白薔薇姫ーー！」

間に合つたよつだ。なんとか持ちこたえてくれていた。

「イルドゥン！ 来ないかと思いましたよ」

肩で息をする白薔薇姫を見ると、その大変さがよく分る。あの小娘がここまで追い詰めるとば。

「イルドゥン？ 」の方は？』

「今、説明する暇はありませんが、名はシグナム。アセルスを止めるために協力を頼みました。現地の出身だそうです」

「シグナム様、よろしくお願ひいたします」

深く礼をする白薔薇。

「ひづらこそ、よろしく頼む」

なかなか礼儀正しい一人だ。なんて言つてゐる場合ではない。

「シグナムとやら、よく聞け。あいつの眼は見るな。そして氣圧されるな。それだけだ」

「眼を見るな？ どうして？」とだ？ 分かるように説明しない

だがその言葉は空しく響くだけだった。

「がああああ

狂つたよつて叫び、かつ正確に斬りつけてくる。

その場にいた全員は散開した。

「速い！！イルドゥン以上だ」

シグナムの率直な感想に少し怒りを感じていた。

「あれは、あやつの本来の力ではない。あの剣と血のおかげだ」

正直な感想を言えば、シグナムの言つて居ることは正しい。今のがれには追いつけん。

なんとか隙を作らねば…

side out

side シグナム

眼前で鬼神の如く暴走する少女。でたらめな強さだとすら感じる。だが、それでこそ戦う意味があるものだ。

「レヴァンティン」

相棒であるレヴァンティンにカートリッジをロードする。

「さあ、来るがいい。烈火の将がシグナム 推してまいる」

連結刃を持つて私は仕掛けた。無限の軌道は少女を追い詰めていった。

「はあああ、斬り裂け！！」

連結刃は彼女を絡め捕つたかのように見えた。しかし紺碧の姫は眼前に迫っていた。

「なつ！！」

思わず声が出る。

疾風迅雷

「稻妻突き」は躊躇なく放たれた。

〔Schwerterform〕

「まだだ、はあああ」

眼前の切つ先にレヴァンティンの切つ先を当て、軌道を変えた。

頬に傷を負うが、首から上が飛ぶことが避けられただけマシである。

「なんて速さだ、ぐう…華奢な体のどこにこんな力が」

鎧迫り合ひのなか、私は失態を犯したのだ。

「馬鹿者！…眼を見るな！…！」

イルドゥンの言葉を忘れていたわけではない。そこまで私が追い詰められていたのだ。

「か、身体が、動かない…」

眼を見た瞬間、身体の自由が奪われてしまった。それが私が彼に負けた原因でもあつたのだが。

眼前の少女が高く飛びあがり、落下していく。紅い剣・幻魔を振り下ろしながら。

動け！！！動かなければ死しか残されていない。

「舐めるな！！！」

烈帛の気迫と私はレヴァンティンを振り上げる。

ぎいいいん

激しい金属音が静寂を打ち消している。

しかしそれも一瞬だつた。

ザシュツ

レヴァンティンが砂に突き刺さる。

何とか防ぐことができたのだが、力で無理やり持つて行かれたのだ。
そして今の状態と言えば…ガラ空きだ。

少女の攻撃は終わってはいない。振り下ろされた幻魔が横に払われた。

「天地一段」

負けた。一日に一人に負けたのだ。そう烈火の将は思つた。

私は死ぬのだな。

私が生きてきた時間などあつという間だつた。

「櫻き守り手、硝子の盾よ」

生きていた。

何故生きているのか理解できなかつた。

そして次に感じたのは頬への痛みだ。

ぱちいーん

「騎士よ、貴様の務めはなんだ? そんなに容易く諦めてよいものだつたのか?」 「まだ負けてはいない。負けとは死だ」

私は立ち上がり、レヴァンティンを引き抜く。

そうだ負けとはいない。まだ生きている。

「くくっく… そうだな、レヴァンティン!」

最後のカートリッジ2発分をロードする。そして炎がレヴァンティンを包んでいく。

そこにイルドゥンから作戦が説明される。

「我と白薔薇姫様で陽動をかける。シグナムには幻魔を引き飛ばし

てもらう。アセルスから放れれば、暴走も収まるだろ？

「了解した」

私は颯爽と駆け抜ける。

「『ラーシュイド』」

何人ものイルドゥンと白薔薇そしてシグナムが現れた。

実際は混乱しているのだろう。近寄るダミーをただ斬つているだけだ。

そして私はたどり着いた。

「私に合わせろ！…」

叫びと同時に三人の身体が輝いた。

「はあああああ…！」「幻夢陽光一閃」

恐怖と魔力光によるノックアウト。そして炎を纏つた一閃。

「があああああ

まだ幻魔を手放すことはない。だが今はそんなことは心配ではない。

「私の、いや、私達の勝ちだ！！

振り切つた剣は紅き剣を高々と打ち払つたのだ。

side out

覚醒（後書き）

設定を少々変えていきます。
違和感があると思いますが、ご勘弁を

o r z

連携の描写がむずかしいですが、サガ・フロンティアは連携楽しい
です。

閃きもですが。

皆様、生温かく見てください。

s i d e ヴァイス

「姐さん…大丈夫かな」

1人待機命令を出されているヴァイスは咳く。もうすぐ2時間が経過しようとしている。彼女なら心配することはないとは思うが、やはり心配なのだろう。

そんなもの思いに耽るヴァイスに連絡が届いた。

ヴァイス陸曹聞こえるか？こちら、ライトニング02 当初の目的は果たせなかつたが、重要参考人3名を拘束中。指定ポイントに降下を頼む

ポイント座標確認！…「解でさあ…！」

こづして久しぶりの出番に燃えるヴァイスだった。

s i d e o u t

s i d e 白薔薇

私は今、アセルス様とイルドゥンと一緒に「機動六課」という場所に向かっています。どうやらイルドゥンとシグナム様の間で何か交渉があつたのでしょう。

膝枕の状態でアセルス様は眠られています。先ほどの戦いで、幻魔をアセルス様から離すことができ、妖魔化を解除することができま

した。髪の色も緑に、瞳も紅に戻られました。
やはりあの方の力は、アセルス様にはまだ強すぎたようです。いま
だ田を覚ますことはありません。

「アセルス様…」

私は優しく、髪を撫で、頬に手を重ねました。あの透き通るお顔が
…このようになられて…

ぴちゅ…／＼／＼ ぴちゅ…／＼／＼

愛しいアセルス様

頬に付いていた、血が消えていく… 白薔薇によつて。

優しく、だが妖艶もある。何か人ではない氣配、威圧感。圧倒さ
れる。

「アセルス様…本当に…素敵です」

彼女は頬から首筋へと口を動かしていく。途中からだろか、イルド
ウンから念話がくる。

人前では遠慮してください。白薔薇姫様

思わず振り向くも、私は頬笑みを浮かべるだけ。
そのまま、アセルス様と唇を重ねた。

side out

side シグナム

「なつ…何をしている。貴様…！」

寝ている少女にいきなりキスをするとは…

「シグナム様、どうか御気になさらず」

彼女はそういうとまた、唇を重ねていた。

「くつ…不埒な」

「シグナム。注意はしているんだがな。気にしないでくれ」

彼は私にそんな言葉を投げかけてきた。納得できる訳がない。

「そうだ、イルドゥン…聞きたいことがある。私は何故負けたのだ？」

理由が知りたかった。あのとき確かに首をはね飛ばしたのだ。だが生きていたのだ、彼は。

「簡単な事だ。私があの小娘、アセルスと戦う前にしたアドバイスはなんだった?」「眼を見るな、気圧されるな」

「そうだ、眼を見てしまった。貴様は、私と鍔迫り合いになつた時に見てしまった。そして私の詠唱した妖術に捕らわれていた」

何故だ！？彼から眼が離せない、それに彼に…好意を…

「ファッショニショーン」

「これが貴様の敗因だ。幻覚に誘惑。いつかかつたのかもわからない。ただ近い距離で相手の眼を見ねば、効果はないがな」

彼が指を鳴らすと、効果は解除された。気持ちも大丈夫だ、身体も動く。

「ひうりの世界にはそんな魔法は存在せぬ。貴様達はどこから来たのだ？」

「アルハザードとも言つておへか」

私とヴァイス陸曹は声を同時に出す。

「アルハザードだと！？」

「くつくつ…冗談だ。教えてもらったものだ、アルハザードといつ名前は」

「冗談が過ぎるぞ…！…今、三人とも拘束中の身だところとは忘れないでほしいな」

「これは失礼。君の主、八神はやてと話がしたいのでな、つい冗談をヴォルケンリッターの将よ」

驚きのあまり声がない。何故、主はやてを知っている？それに、ヴォルケンリッターまで！？

「なに不思議がっている？すべては貴様が教えてくれたことだ

「なつ！？そんなことは……だいたい貴様には何も話してはいないではないか！！」

焦りと怒りで私の思考は混乱している。一体何故だ？？？

「その答えを教える義理は私はないのでな……それに着いたぞ。『機動六課』に

この男……一体何者なのだろうか。私は武芸においても知略でも負けてしまつた。

なぜこれほどの機密がこつも簡単に…

ともかく今は任務を全うすることが優先だ。

へりから降りる。あの少女は白薔薇が背負つている。

主はやて、重要参考人3名連行しました
了解や、御苦労さま、シグナム

何か怒りを感じる、なぜだ主よ…

レヴァンティンを殺傷設定で使つたやう、シグナム？あとでゆつ
くつお詫しょうか

なんて一日だ。

がっくり肩を落とし、私は三人を部隊長室へ連行したのだった。

会話（後書き）

シグナムが翻弄されてるなんて。
イルドゥンは恐ろしいです。

べつの後ろでは空氣が一極化してましたが。

契約と代償そして力

s i d e ? ? ?

「やつと田覚めたか…次の段階に移らねばな」

「奴を投入しろ」

「了解しました」

炎を纏つた影が映し出された世界に溶け込んでいく。

「さあ…楽しませてほしいものだな」

s i d e o u t

s i d e はやて

さて、いろいろ聞きたいことがありすぎて困るんやけどな…

私はシグナムが連行してきたこの三人から事情を聴いている。ただ今は一人だ。アセルスと呼ばれる彼女は今、メディカルームのポッドの中で治療と検査中。

そのため、イルドゥンと白薔薇姫と呼ばれる一人から経緯を聞かせ

てもらつているわけだ。

「なるほどな。つまり黒い霧に飲まれたら、あの砂浜に居たというわけやな？」

「ああ、そういうことだ」

私達が感知していたのはどうやらその黒い霧のようだ。ただ二人はどうやら違う世界から来たように感じる。もしかして、次元を超えてきたのかもしれない。

そんな疑問を解決するために問い合わせを投げかけた。

「そういえば、三人はどこ出身なん？」

この眼前の男からは予想通りの答えが返つてくる。

「「」の世界、いやこの次元に我らの世界は存在しない。黒い霧に飛ばされたようだ」

やはり……予想通りだ。なら次の疑問は……

「单刀直入に聞くで。二人とも人間か？アセルスって子は人間やろうし、ただ二人は違和感を感じるんや。どこか冷たいといふか……」

質問に対し、二人は少々驚いていた。

「ほう、気付いていたか。組織の頭は伊達ではないわけだ。確かに我也白薔薇姫様も人間ではない。妖魔だ」

妖魔。人間ではないその存在をただ認めるしかなかつた。彼らの血

は「青」だから。

「それと、アセルスは人間ではない」

「！？どういふことや？彼女はどう見ても人間やろ？」

答えの中、部屋の扉が開く。どうやら検査結果を持つてきてくれたようだ。

「失礼します」

そこには白衣を着たシャマルが居た。ただどこか慌てている。

「はやてちゃん、これを

渡された検査結果に目を通してみた。そして…

「なんや…これ…」

あきらかに人の能力を超えている。さらに血液だ。彼女の血は赤でもない。青でもない。「紫」だった。

「紫つてことはつまり、彼女は…」

「その通りです、はやて様。アセルス様は、人間と妖魔の血を持つ半妖なのです。世界に一人しかいない存在なのです」

あかん…話が急すぎて混乱してきた。だいたい妖魔とか半妖とか言われても困るつちゅうね。

「心の声が漏れていますよ。はやて様」

「あつ…、あ…まあとりあえず事情は分かった。なんとか元の世界に戻る方法を探さんとなー」とりあえずものは相談なんやけど」

「機動六課の手伝いをしろとでもいうのか?」

「なんで分かつたんや?まあやつこいつらちやーそのほうが色々調べるにしても便利やうひつ」

それに今は、完全な人不足。優秀な人材は是が非でも欲しいといふだ。

「断る義務はないな。ただ条件がある。我らは我らで行動させてもらひ」

「それなら大丈夫や。よし交渉成立やな。ようしく頼むで。あつ、

それと私のことは、はやてでいいから」

「わかった。はやて」「分りました。はやて様」

私は今日、新たな人材の確保に成功したのだ。まあ色々面倒事が起きたそなのは気にしないでおこいつ。

side out

side イルドゥン

アセルスは別に手伝うことに反対ではないだらう。だが気になる

「」ことがある。

「はやて、その検査結果とやうを真か」

私は強引にはやてから奪つて、ある項目を探していた。そしてある項目に目が止まる。

「やはり、伝承どおりか…」

「なんやイルドゥン」うちの文字わかるんか?」

「ああ、シグナムに教わったからな」

「シグナムにいつ教わったんや? あんな短時間でか?」

「秘密だ」

話を終わらせ、白薔薇姫に念話を送る。

やはり伝承通りです。アセルスは、多分…
アセルス様…

アセルスが目覚める前に色々と準備をする必要があるな…

「はやてよ、聞きたい事がある。この世界には魔術は存在するのだな?」

「魔術っていうか魔法文化は存在している。私も使えるしな

なるほどな。

「武器せざりへじてこる?」

「武器つていうか、デバイスつてのがあるんやけどな」

その後、私ははやてから聞けるだけの情報を聞いた。

「あー、喋り疲れた…。そんなとこでええか?」

「問題ない。感謝する」

デバイスにも種類は色々あるのだな。

「はやて、シャリオ・フィーノの会わせてほしのだが

「なんやまた急にやな、つてなんでシャーリーまで知ってるんや。まあ今はいいか。ええで、ちょっと待つてな。」

「シャーリーか?はやてや。ちょっと部隊長室まで来てくれんか?うん、了解。すぐ来てな」

そうしてシャーリーがやつてきた。

「急ですまんな~シャーリー、ちょっとの一人が話たいことがあるらしくてな」

「は、はい。(なんか怖いんですけど….)」

「あと、はやて。悪い話は聞かないでほしい

そういうつて私の聴力は謎の力によつて封印されてしまった。

頼みは二つ

一つはアセルス用のデバイスの作成。もう一つは…

「本当に言ってるの？そんなことしたらあなたたちが…」

「かまわん、白薔薇姫も納得している。あの小娘は大事な存在だからな」

「…分かりました。協力します。その代わり一人も協力してくださいね？」

「もちろんだ」「もちろんです。シャーリー様」

side out

side アセルス

なんだろ…ここ。なにも見えないや。それに水の中みたい。

「貴様の人間としての寿命を頂く」

いつたいなんのことなんだろ…

そして、深い思考に落ちていく。

「……ん…ん」

眼をあけると薔薇が見えた。白い薔薇が…

「白薔薇…」

「アセルス様…やつとお皿覚めになられたのですね」
白薔薇はとてもひれしあつだ。心配かけたよ'つだ。

「「」あなたよ、白薔薇。私はこままでじつしていた？」

「アセルス様はこのひの世界に飛ばされてから、一か月眠られておりました」

「そんなに…心配かけたね、白薔薇」

私は白薔薇の頬を撫でほほ笑む。そして軽く唇を重ねた。

：／＼／＼

「アセルス、もうこいいか？話しておきたいことがある」

「つのもにかいルドゥンが居た。やっぱり気付けないな。

「それで話たい」とひて？」

「「」の世界の事について、それにお前の武器の「」と「つことだ」

私はイルドゥンと白薔薇から事情を聴いた。

「なるほどね、分かつた。それとの世界の種族は？」

「前の貴様と同じ、人間が主だ」

「えつ、イルドゥン、何言つてゐるの？私が人間なわけないでしょ？私は妖魔だよ？忘れたの？」

やはり、伝承通りだつた。

半妖にしか扱えない「幻魔」

契約の代償として、人間としての寿命を奪う。しかし命ではない。つまりは人間だった記憶。記憶を奪われてしまった。だから自分が人間とも半妖とも思つていらない。

そう、人間の記憶がないのだから。

「ああ、すまない。忘れていた」

やはりこうなつてしまひました、白薔薇姫様

伝承を覆すことはできませんでしたが、まだなにか手段はあると思ひます。それまでアセルス様をお守り致さないと

現在、幻魔には幾多のプロテクトを施している。これ以上、アセルスから人間としてのアセルスを奪わせないために。

「アセルス、これからは先ほど渡した、デバイスを用いて戦え。機能は説明したが、自分で実践しろ」

私の手には一丁の銃型デバイスがある。

「リーサルドラグーン？＆？」

少々大きいが気にはならない。そして待機状態のピアスへと戻した。

「便利だね、そういうえばイルドゥンと白薔薇にはないの？」

「必要ないだろ？ 我にも白薔薇姫にも」

「一人は私よりもじうせ強いですよ…」

そういって私は部屋を出た。

「我らに戦う力はもはや存在せぬからな…アセルス」「アセルス様…一緒にお守り致します」

二人の決意はまだ私は知らない。そして影がここ、機動六課に迫っていた。

side out

契約と代償そして力（後書き）

文才の無さが憎い。

いろいろ設定を改変していますが、お許しください。

従騎士

side はやて

なんか色々あり過ぎで、よう分からんわ…。でもとりあえずみんなに報告と紹介はせんとな。

- - 機動六課全局員に連絡 - -

30分後、ロビーで緊急集会を行います。繰り返します連絡します。緊急集会を行います。

「これで、よし」

椅子にかけておいたコートを羽織り、ロビーへと向かう。
「リイン。行こうか!」「はいです!」

そつとして部隊長室を後にした。

side out

side アセルス

私は放送があつたとおり、ロビーへと集合していた。ビービー、ひやう、こ
の機動六課に協力することになつたらしく。
そんなこんなで、30分が過ぎ、集会が始まる。

「忙しいなか、急に集まつてもらって、みんな」めんな。今回、民間の協力者をしてこちらの三名が力を貸してくれる」とになりました。それでは自己紹介よろしく

「アセルスです。よろしく……」「イルダウンだ」「田舎薔薇と申します。皆様よろしくお願いいたします」

白薔薇は万人が惚れるであろう笑みを浮かべ、深く礼をする。それを見た、男性局員からは、歓声が沸き起る。

卷之三

白薔薇は手を振つて答えていた。なんだかいつ…すゞくムカムカする。

私は叫ぶ集団を睨んでいた。しかし、力に目覚めたことは知らない。

あの魅惑の君と呼ばれる君の血から――

「なんだ……身体が動かないぞ！――！」

騒がしい集団はその場に倒れこんでいる。さらに…その横では顔を
紅く染める女性局員が居た。

(彼女に見られると、なんだか…じきじきする)

そんな局員の様子を不思議がるアセルスだつた。

そんなハプニングもあつたが無事に紹介は終わり、隊長陣と話をしていた。

「よろしくね。三人とも」「よろしく 分からないことがあれば遠慮なく聞いてね」

「高町なのは一等空尉」「フェイド・T・ハラオウン 執務管」「スターズ分隊、ライトニング分隊の隊長達。なんどろ[つ]の一人…凄い力を感じる。

それに、綺麗だな…

そのなこと思つている矢先だ。

「ど」見てんだ?スターズ分隊副隊長、ヴィータ三等空尉だ。よろしくな

ものす[ご]」勢いで握手をされてしまった…。なんか子供もだな。

「ガキ扱いすんなよ!…!…」

心を読むとは…やるね。

そんな少し抜けたことを考へていたりする私だつた。

「あとは、謹慎中のシグナムやな

「主、謹慎を解いてくれ!…!…!…」

臥室謹慎中のシグナムから悲痛の叫びが聞こえる。

「駄目や。殺傷設定を使うなんて冷静さが足りてないでシグナム。

罰として甘ったるい脛ドラでも見とせや

「それだけは勘弁……」

あれっ？

そういつて、シグナムに甘甘な脣ドラを見せ続ける。この隊長…鬼畜。

そんなはやでから私にこんな話が舞い込んだ。

「あんなアセルス、実はアセルスに訓練を受けて欲しいいんよ。アセルスのデバイスとセンスがあれば、どのポジションもこなせるオールラウンダーになれると思うんよー。」

「隊長みんながマンツーマンで指導してあげるから」

なんかす」に条件を出されたが、私も自分の力を磨きたい。だから私は首を縦に振る。

「イルドゥンも白薔薇も教えてよー！」

二人はそんあ私の声に笑みを浮かべ、答えていた。

ちなみに、私のことはアセルスと呼んでもうつことにした。そのほうが楽だから。

「じゃあ、いきなりで悪いんやけど、色々データを集めたいから、訓練スペースに行つといてくれるか？」

「分かりました」

ぎりひない敬語で答える私。なんか苦手だな…

ひとり訓練スペースへと向かう私。その途中途中で周りを見渡す。

(あつちとは全然違うな…)

思考に耽ながらも、訓練スペースに到着した。

「勝手に入つても大丈夫だよね…」

ドアが開き、中に足を踏み入れる。

とくに何かあるわけでもなく、ただ広い空間がある。

「広いけど、なんか殺風景といつか…」

- - C a u t i o n . E m e r g e n c y - -

急にデバイスから警告が発せられる。

その瞬間、なにか重苦しい空間がこの部屋に充満するのを感じた。

「なに…これ。とにかく出なきや…って開かない！？」

どうやらこの空間の影響だらう。とにかく情報が足りない。私は部屋の真ん中へと足を進めた。

「アセルス様」

「うわあー!?」

急に白薔薇に呼ばれ、思わず尻もちをつく。…恥ずかしい。

「急に声出でないでよ、白薔薇ーーそれよりも白薔薇はどうやって？」

？」

「これは妖魔にしか作ることができない結界です。機械などに影響は及びませんが、人間はこの結界に関与できません」

「じゃあ出る」ともできるの?」「入る」とは簡単なのですが、出るとなると、結界を張っている張本人を倒すしかありません

白薔薇との会話により状況は把握できてきた。つまりは妖魔が犯人であると。

「白薔薇姫様、針の城に御戻り下さい。あの御方に逆らつおつもりですか?」

私は思考を止めた。どうやら現れたようだ。

「そんな、逆らつだなんて、誤解です」

「言い訳は、御帰りになつてからにしていただきましょ」

そんな会話が繰り広げられ、その妖魔は白薔薇を連れて行こうとする。

「ダメだ、白薔薇！白薔薇に触れるな！」

我慢できない。汚い手で白薔薇に触るな……白薔薇は私の…

「邪魔する者は殺して良いと言わされております」

その言葉と共に、紅蓮の炎を纏つた「炎の従騎士」が姿を現した。

「アセルス様！戦つしかありません。バリアジャケットを…」

「分かってるよ、白薔薇！！説明は聞いてるから…」

〔Standby ready〕「セットアップ」

声と共に真紅のバリアジャケットが展開される。

(これって…あっさりで作つてもらつた服とそつくりだな)

待機状態のリーサルドラグーンを起動し戦闘体制へと移行する。

「こきなりだけ…やるしかない！」

「白薔薇！援護お願いね」

そついつて間合いを取り始める。

銃型デバイスでありながら複数の形態を備えているこのデバイス。

(きりんと扱えるかな…)

駆けだすと同時に引き金を引く。打ち出されるのは、実弾ではなく、魔力弾である。

ぱーん

甲高い音と共に放たれる弾丸。炎を纏う妖魔は簡単に避ける。そして魔力弾は壁に到達する。

そして…壁に亀裂が走る。

(威力強すぎない?これ?)

戸惑いつつも、私は一発打ち込む。がそれも避けると、距離を詰め斬りかかる。

「ヒートスマッシュ」

しまった。一瞬の出来事で回避できていない。ドラグーンで防ぐ、こうとしたが間に合ってやうもない。

だが…

「傭き守り手、硝子の盾よ」

景色が碎けた。そして崩れた景色は騎士へと飛翔した。

「助かったよ、白薔薇」「私は何も…」

その声は私には聞こえてはいない。

「さて、白薔薇姫様、覚悟を決めてください」

「黙れ……貴様に白薔薇は連れては行かせない」

「うわかしい娘だ。黙つていてもいおつか」

騎士を中心に熱風が発生する

「ユーティリティ」

熱風をもろに受けてしまった。硝子の盾もこれは防げない。そしてそのまま壁に吹き飛ばされる。

「かはあつ……」

あまりの衝撃に肺から息が強制的に吐き出される。そして紫の血と共に。

ぴちや…ぴちや…

血が止まらない…どうかやられたかな…

「これでわかったか、小娘……わあ白薔薇姫、行きましょう」

白薔薇を連れて行くとするあの炎の騎士。そして抵抗しない白薔

薇…

何故？白薔薇？抵抗しないの？何故？？？

いやだ…行つちやいやだ…白薔薇…

「白薔薇を絶対に渡さない……もつ一度言つて私の白薔薇に触れるな！……！」

その瞬間、私の姿は変わっていた。

紫紺の瞳そして…紺碧の髪

そう紺碧の姫としてのある姿に

「セーフティーリリース。リーサルドラグーン、モードバスター」

?と?を連結させる。するとロングバレルを開いた長銃へと形態を変えていた。

「貴様は許さない！絶対に……この世に存在のひとからも残さない！」

「ロードフルカートリッジ

「Load Cartridge】

二丁分の薬莢、10発が排出される。

砲身には小さい魔力弾頭が形成されている。しかしそこに凝縮され

ている魔力量は半端ではない。

「A firing lock is canceled」

そして引き金を引く。慈悲などない。

「消える」

炎を纏う騎士は言葉を発することなく消えていた。
彼が行動を起こすことに合わせて撃つたのだ。

反応射撃

行動を封じるかの如く放たれた弾丸は、体内に留まると同時に爆発。
無慈悲にも消しあつた。存在すら簡単に。

ブシュー

大量の魔力を排出し、モードを解除する。
そして、私は息を切らしていた。

「はあ、はあ、」

私は知らないことだが、どうやら妖魔化の反動、そしてバスターモードを使ったことだらうか？

周りを見ると、結界は解除されている。それに…

「白薔薇…よかつたあ」

私は白薔薇に駆けよつて行く。しかし

ばわつ…

「白薔薇…？」

彼女は…白薔薇は倒れた。

「白薔薇――――――――――」

私の声だけが無常にも響きわたる。そしてそれに答えるように、バイスが光るだけであった。

side out

従騎士（後書き）

なんかぐだぐだで申し訳ないです。

口調とか変な感じがするかもですが許してください。

バスターのイメージはストームレイダーをもう少し大きくした感じです。

誤字、脱字、指摘とうありましたら、よろしくお願ひします。

秘密（前書き）

遅くなりました。
もし、ご覧になられていなつかたがいらっしゃれば、すみませんでし
た。

s.i.d.e なのは

「はあはあはあ…」

書類をまとめてこる最中にものすごい爆発音と揺れを私のバイクス「レイジングハート」が感知したわけで、こつして訓練スペースへと向かっているところなの。

廊下は走っちゃ駄目だけど、緊急時は仕方ないよね。

「マスター、何を言ひてるんですか？」

「あ…なんでもないよ。ははは…」

なんてやり取りをしていのつかし、現場にたどり着いたわけだ…

「…やははは…」

ただ乾いた笑いしかない。壁とか床とか…亀裂は入ってるし、所々、クレーターみたいなのがちぐら…

「一体なにがあったんだろ?」

状況を把握する為、部屋に入ることにした。幸いドアは無事のようだ。

「マスター、どうやら質量兵器ではありません。汚染物質も確認されませんので、どうやら魔力による物と推測されます」

「分析ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートが輝きそれに答えた。それにもしても、視界が良くないね…電気系統は完全にいつちやてるみたいだし。そんななか、私は駆けだした。部屋の隅で倒れている一つの影を私の視線は捉えていた。

「アセルス！！白薔薇姫！！」

倒れている一人に近づき声をかける。しかし一人からは反応がない。

「レイジングハート、二人はどう？」

「大丈夫です。しかし白薔薇姫は少し変です」

「変つてどうこう」と

「それはあとで話します。それより一人の搬送を」

確かにその通りだ。今は一人の手当でが先決みたい。

はやてちゃん、フロイトちゃん、聞こえる？

聞こえてるで、なのはちゃん

「うちも聞こえてるよ、なのは

はやてちゃんは、シャマル先生に連絡お願い、フロイトちゃんは運搬を手伝つてほしいの

了解や、任せときーー！

今、ちょうど向かってるから、待つてーー。

すぐにつェイトちゃんがやつてきて二人を医務室まで運んだ。訓練やつたおかげかな。
なんなく運べちゃつた。

シャマル先生はすぐに治療を行つた。一人とも消耗が激しかつたみたい。

二人は治療用のポッドの中。

ふと、レイジングハートの言葉を思い出し、聞いてみることにした。

「ねえ、レイジングハート。さつき言つてたことなんだけど。変つて何が変なの？」

「そのことなんですが、三人がこちいらに来られた時の身体データがあるのですが」

そういうつてレイジングハートはデータを展開する。

「なのは、やっぱリのデータ凄いよ。アセルスは魔力量は少ないけど、二人はかなりの量を持つてるよ」

フェイトちゃんが感想を述べているなかレイジングハートは続ける。

「では、先ほゞスキャンしたデータを」覗くだぞ。」

そうして、先ほゞのデータを重ねて表示した。示されたデータに私達は驚きを隠せなかつた。

「これって…どうなつてゐるの…」

「それは、私と彼が説明するします。」

振り返ると、そこにはイルドゥンと、シャーリーが居た。

「レイジングハート、データそのままにしてね」

「了解しました」

大きめに展開されたデータの前に彼女は立つた。

「このデータのことなんだけど…あまり知られたくはなかつたの。あまりいいものではないから…」

シャーリーの顔が暗い。まるで後悔しているかのよつな。そんな感じがする。

「そんなに気にすることなのか?なら私が代わりに説明しよう。君達にある魔力の元、つまりリンクカーコアと呼ばれるものか?あれをデバイスに移植しただけだ」

全くついていけない…どうこう」と…

私とフェイトちゃんは、ポカーンとしている。さらに説明は続く。

「検査の結果、我ら妖魔はリンクアーコアがなくても生きていけることが分かった。まあ貴様らには無理らしいがな。アセルスは半妖ゆえに、魔力が少ない。

だから、妖魔たる我らのリンクアーコアをアセルスが持つデバイス「リーサルドラグーン」へと移植したのだ」

なんとか情報を整理できた。つまり、レイジングハートが出していたデータで、イルドゥンと白薔薇姫の魔力値がほとんどなかつたのは、そのためである。

でも、どうやってそんなことを…
その答えもすぐに解決した。

「Jの移植の提案を受けた時、もちろん断つたは。できるはずないし、なにより死んでしまうかもしだくなかった。でもこの一人の知識に、蒐集にシャマル先生の能力があればそれは可能だつたの」

「それに、一人のどうしてもつていう意志に負けたの」

振り返るとデバイス調整槽にリーサルドラグーンが浮かんでいる。

「だからこの子たちに託したのよ、二人の魔力を」

しかし、シャーリーの顔はまだ暗い。

「シャーリー、まだ何かあるんだよね、多分…リスクを背負つてゐるでしょ？」

「どうか隠すこと止めたよ」シャーリーは答える。

「流石です、なのはさん。実は、デバイスに負荷がかかると、お一人に反映してしまつんですね。」

「だから、こんなデータが出るわけやな」

「いつのまにか、はやてちゃんが居た。…いつの間にいたんだろ？」

「さつきの戦闘のデータが回収できたらんや。ついでに解析してみたんやけど見てみい、この映像」

そうじつて先ほど行われていた戦闘の映像が映し出される。

「このシーンよく見てや、アセルスのデバイスから、薬莢が十発分排出されどる。つまりカートリッジシステムを扱ったことない素人がいきなりもこんな量のカートリッジ使こうたら、どないなことになる？」

「慣れないうちにこんなにカートリッジを使つなんて… 暴発しちゃうよ…」

「でも、アセルスは魔力量も少ないので、暴発せんかった。センスはまだもんやない。けどセンスでは片付かへん。多分、デバイスに相当な負担がかかってる。さらに暴発せんために、デバイスの… 一人の移植した魔力を使って制御したわけや」

「そのとおりです、はやて部隊長。アセルスさんはセーフティーを解除してバスター モードを使った。それに、カートリッジ十発使用。その膨大な魔力のコントロールと負荷を、白薔薇姫が受けてしま

つたわけです

私は、黙つて聞いていた。フェイトちゃんも何も言えなかつた。

「今日は、白薔薇姫様の『アを移植したドラグーン』をメインに使つたから、白薔薇姫様に反映されているが、？ならば、私もしかりだ」

「？」までして、彼女のために尽くす必要があるんですか！？」

フェイトちゃん…

彼女は沈黙を破り言葉を発した。自分の身を犠牲にする理由が分からなかつた。

「我らは、アセルスを守り、鍛える必要がある。それだけだ」

「そんなの理由じゃありません！？」

イルドゥンは何も答えず、ただ頬笑み…長い沈黙を経て答えた。

「アセルスは、我らの世界を変革する可能性のある唯一の存在。それだけだ。だから、アセルスを鍛えるのだ」

そして彼は部屋から出た。

「納得はまだできないけど、どうやら、みんなアセルスを鍛えるために頑張らないといけないみたいだね」

フェイトちゃんの声にみんなが頷く。今度隊長達で話しなぐりや。

そんななか、いつやり部屋から抜けようとあはやでがいた。

「えりやー、はやてちゃんは、このこと知っていたみたいだね。」

私は逃げないよつてくぎを刺す。

「あつ…ばれてた?」

「もうじやないと、全ポジションできるよつて鍛えるなんて言わな
いでしょ?」

「あ、あははは…」

なんとか笑つて「まかすはやてだが、なのは、フロイトの顔は怖か
つた…

「はやてちゃん…隠しじ」とはいけないよ…」「そりだよ、はやて…」

「か、堪忍や…一人とも…なつ?」

「駄目だよ」「駄目」

いやや-----!

一人に、はやは連れて行かれたのだった。

シャーリーから暗さはまだ取れてはいない。語られたことはすべてではないことを知る者は少ない。

まだ、語るべきでない事実を残して。

皆、解散した。

医務室

そこには医療ポッドに浮かぶ、一人の姿が残されていくだけだった。

s i d e o u t

side アセルス

白薔薇を連れ去ろうとした、炎の従騎士との戦いから3日。私と白薔薇は目覚めなかつた。私は自分の弱さに怒りを感じていた。強ければ、白薔薇が傷つくこともない。だから私は強くならなければならぬ。

今、私は機動六課の隊長達と、マンツーマンの特訓の最中だ。朝、昼、晩。毎日のように、全ポジションの特訓を行つた。正直、大変だ。みんな容赦ない攻撃ばかりだし…。実際のところ、魔力量の少ない私にとつては防御に魔力を費やす余裕などなかつた。なので隊長陣の中では参考とするのは、フェイト隊長。

選ぶ道は一つ。回避能力の向上である。高機動、そして見切りを駆使すれば、防御面には心配はない。まあ…多少なりと防御の練習はするが。

「はあはあ…なのは隊長、強いなあ…」

そんな感想を漏らす理由としては現在、スターズ分隊隊長の、なのはさんと模擬戦の真っ最中なわけである。私のデバイスの基本形態は銃であるため、度々なのはさんとやっているわけだが…。

〔 A c c e l S h o o t e r 〕

前方に対峙するなのはさんから、アクセルショーターが飛来する。

「しかし、数が無茶苦茶だ……」

飛来する弾は20発。もちろん防御するつもりはない。

「ルナ、ソル!!迎撃いくよ」

ドラグーン?にルナ、?にはソルと呼称を付けている。理由はデバイスの「アの色から月と太陽を連想したからだ。その月と太陽は答える。

〔 A l l r i g h t , m y m a s t e r 〕

「はあああーーー！」

シユーターを次々と撃ち落としていく。何度も痛い目にあえば、いやでも覚える。

「やるね、アセルス。じゃあこれならどう?」

急にシユーターの速度が上がる。これまで…やっぱり加減してたんですね。でも、負けたくない。

〔Sonic Move〕

脚に最低限の魔力を込め、そして動きを見切り、回避する。私は空を飛ぶことは無理だ。でも、飛べなくても負ける理由はない！！！

シユーター同士の誤爆、撃墜。そしてついにシユーターは無くなつた。

「ルナ、ソル。モード変更。モードブレイズ」

[Blaze Mode]

一二丁の銃から、名の如き紅き刃が伸びる。

モードブレイズ。近接戦闘特化形態。

紅き双刃を携えた私はそのまま一気に間合いを詰める。

「もういたああああああーーーー！」

[Protection]

刃は届いてはいない。なにか壁のような物で、なのは隊長は守られている。

「アセルス、本当にすゞじよー短期間でここまで出来るようになるなんて！」

なぜか褒められた。うれしいけど、今はそれどころじゃない。気付いてしまった。器用なことに、防御しながらも、魔力をチャージしている。

一度間合いを取るべきか…いや、無理だ。距離はあまり意味がない。遠距離型なら尚更だ。なら…

「ソレでシールドを碎くよ」

シールドとの競り合いは休憩。双刃を真っすぐ突きつける。そう、これは双剣でもあり、銃剣でもある。

カートリッジをロードせずに詰まつた魔力を弾丸として放つ。小気味良い音と共に、5発の弾丸を発射する。上下左右に打ち込み、そして中央に最後の一発が撃ち込まれることで完成する。

隊長陣最高の防御力を持つシールドは跡形もなく消え去った。だが、それは終焉でもあった。

「まさか、シールドが破られるなんて思わなかつたよ。でも、余力は残さないと、後が続かないよ！」

「Starlight Breaker」

隊長最高の砲撃が迫る。ただもう、余力なんてあるわけなく。

「はあはあ…負けたあ」

連敗はいつになつたら止まるのか。リベンジを誓い私の意識は刈り取られた。

side out

side なのは

びっくりした。まさかシールドが破られるなんて。

「お疲れ様、なのは」

「『』苦労だつたな、高町」

「フロイトちゃん、シグナムさん、見てたんですか？」

「はやてが見てこいつて。それに私達の教導が活きてるかなって気になつたのもあるし」

「どうだった、高町。アセルスの戦い方は？」

「だからか…なんか二人に似てると思つたよ。

「回避力に速度、突破力。それに判断力も順調に育つてると思つの。でも、防御面がね」

「なのはも、そう感じる？私も同じ感想なんだけど、ただ私達と話をした結果、防御に魔力は使いたくないって」

「だから、我ら一人が高機動戦闘を教えているわけだ。ただスタッフと魔力のバランスがまだ甘いがな」

そんな話題の中心のアセルスは今、シグナム副隊長に背負われている。

「じゃあ、二人とも、先に医務室に行って。後で行くから」

「ん、分かったよ、なのは」

「了解だ」

「一人の姿が見えなくなると私は膝を付いた。

「最後の一発、貰つちゃつたな」

血の味がする…やせ我慢も大変だよ。

「カートリッジのあんな使い方…本当に弾丸だよ…」

そうしてデータをまとめ医務室へと向かつた。

「あとで、ばれないように治療しなきや…」

side out

連敗中（後書き）

そろそろ、Satoが始めることができるついです。

しかし、他の作者さんは凄いです。

頑張ります。

アセルスが機動六課に来てから、1ヶ月が経過。最初は戦い方や、魔力の扱いにもかなり慣れただよ。彼らとの約束もあるが、こちらも組織で動いている以上、アセルスにも、試験を受けてもらう必要がある。嘱託扱いだが、上を誤魔化すには、これくらいする必要があるのだ。さて、今日は試験と階級とかの説明をすることとする。

部隊長報告書

s i d e はやて

「急に呼び出して悪いんやけど、アセルスには試験を受けてもらわないかんのや。と、いうわけで、早速試験受けてもらつでーー。」

アセルスには悪いが、そろそろ隠しきれそうにならないからな。早くこっちに正式な形で所属させな…

「部隊長、話が急でいまいち分からぬのですが」

「私の事は、「はやて」でええつて。まあ資料を渡すから

そういうて、数枚の資料をアセルスとイルドゥン、白薔薇姫に渡した。

「はやて、我らは単独で動くと条件を付けたはずだが？」

「やつばーつてまだ事情を話してないし、そんな怒りも…」

「IJの機動六課は色々問題も山積みなんよ。それに上には隠している三人もあるやろ？加えて、一週間後に査察に来るとか言いはじめてな…本当、なんか恨みでもあるんかいなって話なんやナビ」

その話は軽く三人に無視されたようだ。私の威厳つて…

「IJの資料を読む限りでは、ある程度自由にすることは階級とか軍属といったものが必要になるわけですね？」

白薔薇姫、物分かりが早くて助かります。

「ふーん。それで私は何の試験を受ければいいの？」

「おー、その質問待つとったで。」

やつと話が進むで…やつこつてモニターにデータを展開する。

「今回受けてもらつのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験や。今までのデータからみると、多分この試験くらいがちょうどやと思うよ。ただ戦技のレベルは、遙か上になるんやうつか、色々ハンデを背負つても“いつ”になると、試験が終わるまでは、あくまで他人のふりや」

どうやら納得はしてくれているが、色々不満がありそうな様子だ。

「はやて、まずハンデについての説明。それに受験するこの二人は？それに試験を受けるつてどこの所属で受けるの？」

色々と感づくのが早いな。見込んだだけのことはあるで。

「魔力のランク的には相応なんやけど、それを上回る戦闘技術をアセルスはもつとるから、怪しまれる可能性もある。だから、今回はソルヒルナは使用禁止で…！」

三人がめっちゃ睨んでるんですけど…仕方ないやん…。だからこれ説明するの嫌やつたんや。… あそこで、グーを出していれば。

大丈夫か、機動六課。

「ま、まあ決定事項やから。それに同時受験者の一人はフロントタップにセンタータイプや。だから、センターが被るのもなんやから。今回はサポートメインで！」

「戦闘技術はなるべく使うなとか？はやてよ」

あいかわらず、核心に触れてくるな…

「やうじゅうじゅうちや。だから、代用品のものを渡すことになつてるんやけど…おつ来た来た」

扉が開くと、一人はシャーリーと分かつたが、もう一人の初老の男性は面識がないため分からないようだった。イルドゥンを除いては。

「なるほど、時空管理局陸上警備隊第108部隊所属にしてしまつことで問題を解決したわけだ」

「なんで、イルドゥンはなんでもしつとねんや～ほり、ゲンヤさんもびっくりしとるや～。

「こいつは驚いた。私は君と会うのは初めてのはずだが？」

「常識では測る事ができないことは、常に存在しているものだ」

「そいつは聞いてみてえもんだ」

何故か馬が合ひやうなこの一人…危険すぎる。

「まあ、とりあえず、そのなんだ。俺はゲンヤ・ナカジマ。時空管理局陸上警備隊第108部隊の隊長をやってらあ。よろしく頼む」「と、いうわけや。アセルスには、第108部隊に所属していて試験後、スカウトされ、機動六課つて予定になつとるから。それと、シャーリー」

シャーリーが私に新しいデバイスと、カードの様なものをくれた。なんだろう？

「これが、バックアップ用に作ったデバイス、通称フォートレス（要塞）。ストレージですが、アセルスさんの防御面や移動に凄く役立つと思います。それと、カードなんんですけど、これはイルドゥンさんと白薔薇姫さんから、情報をもらつて作った試作品です。今回、作る事ができたのは、剣と盾だけです。それに一回しか使えません

ので

説明をうけたあと、せっかくなのでセッタアップしてみる」といった。ちなみに監修には白薔薇も参加したらしく…何故?

答えはすぐに分かった。

「フォートレス、セットアップ」

バリアジャケットの展開が完了し、鏡を見てみた。

「これって、白薔薇?」

いつもの紅いドレスではなく、純白のドレス。そして腕と脚には、純白の小手と具足が装着されている。さすがに薔薇はなかったが。

「はい。私も参加したいのですが、私達はロングアーチでバックアップという形になりましたので、是非と思いました。お気に召しませんでしたか?」アセルス様

「ううん。全然。白薔薇、うれしいよ」

そういうなり、私達は唇を重ねる。周囲に人が居ようが関係ないことだ。私は白薔薇に感謝しているだけなのだから。

「ゲンヤさん。日常茶飯事やから

「あ、ああ」

やつぱり誰が初めて見てもそいつのが当たり前やな。

「うちの娘一人も、ああだつたんだが、やつぱりあれが普通なんか
ね?」

なんといつ爆弾発言。ああ、この部隊はどうなるんやひ。だつてス
カウトする一人つて……はああ。

「試験日は明日や。よろしくな。アセルス」

なぜかサムズアップで返すアセルス。もうこやや。

帰つて、ワインやみんなと……やな。

さて、連絡回つとか。

side out

準備（後書き）

すみません。キャラ壊れています。百合化は止まりません。
今回は秘術を選びました。理由はカードだからですwww

いろいろ感じることはあるとおもいますが、許してください。
頑張ります。

次から、StSが始まります。

始動（前書き）

StSが始まります。ただ原作をぶち壊し氣味なので、原作の感じが損ないたくない方はご覧にならないほうがよいと思います。

始動

時空管理局陸上警備隊第108部隊所属、アセルス二等陸士。

これが私の仮の所属と階級らしい。なんか、組織つていろいろ面倒だね。

アセルスの独り言より。

新暦75年の春。ミッドチルダ臨界第8空港近隣。廃棄され佇むだけの都市のビルから新たな物語は始まった。

side アセルス

乾いた風が頬を撫でる。今、私は陸戦魔導師Bランクへの昇格試験を受けるため、スタート地点にいるところだ。私の後ろでは、ボイッシュな蒼い髪の少女、そしてオレンジの髪が似合う少女が身体をほぐすようにストレッチをしている。

蒼い髪の彼女は、スバル＝ナカジマ。昨日あつたゲンヤ隊長の娘さんらしい。そしてオレンジの髪の彼女は、ティアナ＝ランスター二等陸士。スバルとは古い付き合いらしい。

そんなこんなで軽い挨拶をしたのだった。

「私は、アセルス二等陸士。陸士108部隊所属です。よろしく」

なんかきこひかないな…ほんと苦手だよ。試験が終わるまで我慢我慢。

そんなことを思っていたら、見事に一人は食いついた。

「えつ！…お父さん（ゲンヤさん）の部隊なんですか！？知りませんでした」

まあその反応は正しいです。私は偽りなので。

「田立つのは苦手なんです。それよりも、今回の試験スリーマンセル（三人一組）での試験と伺ったのですが、見たところスバルはフロントアタッカー、ティアナはセンター・ガードに見えますが、相違はありませんね？」

私の言いたいことにティアナは気付いたようだ。鋭いな、この子。

「お互い、初対面ということだし、スキルを確認したいわけね？分かつたわ」

そして3分ほどお互いの能力や、タイプの確認を取った。今回は、はやってにも言われたとおり、スバルがフロント、ティアナがセンター、私がフルバックとなる。ただ、強化系はほとんど使えないのに…はやって…覚悟しといてね。

今、ティアナが時間を確認する。そしてブザーがなり、空中にパネルが現れた。挨拶をしているのは…つてリイン空曹長ですか。試験監督やるんだ。。。少し笑いを堪えながら、説明を聞くことにした。

「おはよウジヤリコります。さて…魔導師試験を受ける受験者3人。揃つてますか～？」

リイン…なんか可愛いよ。一人は返事をしそうなので、会わせて返事をする。

「はい！」

「確認しますね！時空管理局陸士386部隊所属のスバル＝ナカジ
マ一等陸士」

「はい！」

「ティアナ＝ランスター一等陸士」

「はい！」

「それに時空管理局陸士108部隊所属のアセルス二等陸士で間違
いありませんか？」

「はい！」

リイン、ちょっと笑ってる…他人の振りつて難しいよね。

「保有している魔導師ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは、
陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いないですね～？」

「はい！」

「間違いありません」

一人とも、眞面目だね。私は苦手だから、ちょっとつらやましいな。

なんで羨ましいの？…なんか忘れてる…そんな気がする。

何か引っかかるが、今はリインの説明を聞かないと。

「本日の試験を担当するのは、わたくし、リインホース？（ジヴァイ）空體長です。よろしくですよ～」

そう言いながら敬礼するリイン。

こちらも敬礼で返す。

「よろしくお願ひします」

さてと、とにかく無事に終わりますよ！」

side out

side 隊長達

上空にヘリが一機。そこには、はやてとフュートが居た。

「Jの一人が、はやてが見つけた一人？…はやて！ナカジマ隊長の娘さんだよね？スバルって」

「セツヤ、それにティアナって子と付き合いも長くて、相性もいいや。それに色々あるしなー」この試験の結果で引き抜くつもりやか

「う

なのはちやん、判断頼むで。

そのころ、試験会場の準備をなのはが行っていた。

「準備完了」。レイジングハート、ありがとう

「いえ、マスターも大変でしょう」

「ありがとうございます。監視用のサーチャや障害のオーストスフィアもセット完了したし、私達は全体を見てようか」

「Y e s . M y M a s t e r 」

s i d e o u t

s i d e アセルス

さてこちらは、試験の内容の説明中。ここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。ダミーターゲットもあるらしいので注意が必要らしい。妨害攻撃はもちろんあるらしいので、気を付けつつ、全ターゲット破壊。制限時間内にゴールを目指すとのことだ。

「以上で説明は終わりますが、何か質問はありますですか？」

スバルは何か言いたそうにティアナを見るが、ティアナはスバルを見て「ありません」と答え、スバルも続けた。私もなかつたが、今回の中にはやてから条件をつけてもらつた。それは：

ばれなきや大丈夫！！

この約束があれば何とかなりそうだ。

「それじゃあ、スタートまで、あと少し。ゴール地点で会いましょう…ですよ」

そういうてモニタのパネルが消えた。やっぱり可愛いな。

そういううちにライトが染まりそして消える。

「さあ、みんな行くよーー！」

こつして思い思いの試験がスタートした。

最初のターゲットがどうやら前方のビルの中にあるらしい。そういうするうちに、二人はビルへと登つて行く。おきぎりですか？

「アセルス！スバルと先行して叩くからー下のターゲットよろしく」

そういうってスバルはガラスを破り中に入つて行く。ティアナの姿も分かんなくなつた。

「二人なら大丈夫だと思つし…準備運動をかねてやりますか」

「フォートレス、セットアップ」

待機状態（指輪）のフォートレスを機動させる。まだ慣れないな、このバリエジャケット…

「さて、サーチャーもないし。ばれなきや大丈夫だし…」

そういうつて、ポイントターゲットを守るスフィアとの距離を一気に詰める。こちらに気付いたスフィアが砲撃してきたが、すぐにスライディングで回避、そのまま破壊した。すぐさま起き上がり、回し蹴りと、裏拳のコンビネーションによりたちまちスフィアとポイントターゲットはスクランブルとなつた。

「派手にやりすぎたかな？」

自分に疑問を投げかけながらも、合流ポイントへと向かつた。

「二人とも、大丈夫？」

二人とも大丈夫そうだが、びっくりしている。ああ、バリアジャケットか…

「なにそのジャケット…凄く綺麗…」

「関心してる時じゃないよ、二人とも…」

周りを見てみると、スフィアの残骸がたくさんある。二人とも相性はもちろん、これから伸びそうだな。

「ところで次は真上なはずだけど、どうする?」

ティアナに相談を持ちかける。一人で突破は簡単だけど、一人の前ではフルバックだし、色々秘密にしないと。

「あがつたら集中砲火が来る。だからここはオプティックハイドを使っての私とスバルのクロスシフトで瞬殺。いい?」

「了解…！」

そういうて二人の姿が消える。結構便利そう。

「二人のバックアップも大変だよ、ほんとに」

私の姿も消え、違う道で上がった。

パシュン！

天井にティアナのアンカーガンからのアンカーが刺さり、下からあがつてくる。それにスフィアは気付き、集中砲火を仕掛けってきた。しかしそこにはアンカーガンしかない。そして掛け声とともに、音が近づく。

5・・・4・・・

スフィアが落ちていく。ローラー音と共に。

3・・・

そして音の正体が姿を表す。スバルだ。スフィアはスバルに気付く。だがスバルは止まらない。そして、カートリッジをロードする。

2・・・

スフィアから砲撃が来る。が、彼女は被弾することなく避け、弾く。

1・・・

そして、おもいっきり踏切、高く跳んだ。同時に魔力スフィアを3発形成したティアナの姿が。

0。時は満ちたようだ。

「クロスファイアー」

「リボルバー」

「「シユ————ト!!!!」」

彼女たちのクロスシフトで、スフィアは殲滅。

できたかに見えた。しかし、忘れてはいけない。今回はスリーマンセル。スフィアの数も多いのだ。少しの安堵が油断となり、二人は気付かない。そして物陰から今までに砲撃を開始しようとするスフィアが三体が躍り出た。

「ティア！危ない！！」

とつさに気付いたスバルはティアナに声をかける。だが一人ともクロスシフトの影響か少し疲れていた。とつさには回避できない。

しまった。やられる…

「秘められし力を解放せん。祖は力の象徴なり。出でよ

私は剣のカードに魔力を込め、スフィアに投げた。詠唱が完了すると剣3本がそれぞれスフィアを貫いていた。

「二人とも、油断大敵。だね」

私はオプティックハイドを解除し、二人の前に。試験用だし、出し惜しみは駄目だね。

「助かつた／＼ありがとうアセルス／＼」

「ありがとう。助かつたわ」

「二人のバックアップだからね、気にしないで」

礼を言う二人だが、どうやら剣について聞きたそうだ。

「あの剣は、アセルスの？」

やつぱりか。あんまり答えることできないしなあ… そつだ困つたらこいつ言えればいいって言われたこと思い出した。

「とりあえず、今は時間がないよ。まあはぐらかすのもだから、簡単に言うと、他の人とちょっと違うんだ。だからね」

納得できないかもしないけど許してね。二人とも。

side out

side 隊長達

「なかなか伸びそうだね。アセルスはともかくこの一人、いい動きしてるよ。」

「そりやう！－フルバッタでアセルスも上手いことやつてくれどるし、二人とも狙いどおりや」

二人は率直な感想を述べる。そしてこれをモニターで観察していたなのはも、どこか嬉しそうだ。

「さて、残すは最終関門だね。大型スファイア。今の一一人には難しい相手かもしれないけど。それに今回は…はやて、やっぱりやり過ぎじゃあ…」

とても心配そうなフェイト。一体何が。それは、この御方のせいである。

「大丈夫やで！スリーマンセルなら一體なら余裕やろ。だから今は…」

悪だくみが好きな部隊長八神はやで。大丈夫か機動六課。

side out

side ティアナ

私は囮に使つたアンカーガンを回収していた。スバルが「ティアナは本番強いな～」って言いながら滑つている。

「うひさいわよ。せつせと片付けて次に行く……はつー？」

スバルの背後に大型のスフィアを確認した。まずい、スバルが…私は駆けだした。

「スバル！！ 防御！！」

間一髪砲撃を回避。そのまま両サイドに走り出した。

「くっ…！」

走りながら、一発スフィアに打ち込む。そのとき、床の隙間に足がかかり、捻挫してしまった。

「くっくく…」

スバルが叫んでるけど、今はそれどころじゃない。身体を回転させ砲撃を回避する。そして壁の隙間からスフィアへの射撃。しかし後で知ったのだが、監視用サーチャーに流れ弾が当たつてしまつた。

サーチャーが壊れたため、なのはが動くことになった。念の為…バリアジャケットを展開して。

「ティア！」

「騒がないで、なんでもないから」

嘘を付いていいることはスバルには分かったようだ。まあ私が見ても嘘だって分かるくらい足首が腫れているんだけど…痛つ

「捻挫してんでしょう?..」

「だから向にもなって。くう…」

やつぱり立ち上がれない。結構重症かな…

「」めん。油断してた。私が油断してなかつたら、こんなことは

…

つたくこのスバルはびりじてこうなんだか…

「ほんとこ謝つてばかりね。いつもの事でしょ。これくらい平気よ

！」

強がつてみたけど、これじゃあゴールは無理ね。なんとかスバルとアセルスだけでも…

「ティアナ。あなたも一緒にやらないと、意味ないんですよ。それに、

そういうってアセルスは私の足首に手をかざす。見たことのない、法陣が展開される。

「癒しの光よ。スター・ライトヒール」

暖かい。まるで太陽の光に包まれるような柔らかな光。そして光が引くと、腫れは無くなっていた。

「アセルス…ほんと凄いわね。」

「未熟だから、効果は完全じゃないけど、なんとかやれそう?」

うだ。
2・3回足首を動かし、確かめる。少し痛みがあるが、我慢できそ

「心配かけて、ごめん。三人で絶対ゴールするわよ！」

「「「「了解！—！—！」」」

作戦は説明した通り。スバル、こつちはあんまり長く持たないから、一発で仕留めなさいよ

任せといて。ティア

時間がない…行くわよ。

瓦礫の影に隠れて、私はある魔法を使う。

フェイクシリエット

魔力をかなり使うけど陽動とかには最適なのよね。

スバル頼むわよ

案の定、スフィアはフェイクに反応し、気を取られている。

そして、反対のビルの屋上には、スバルがいた。

「私は、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃もない。私にできるのは、全力で走る事と、クロスレンジの一発だけ」

でも、決めたんだ。

あの人みたいになるんだって。

負けない。強くなるんだ。

何かを守れる自分になるんだって。

決意を言葉とし、拳を振り下ろす。

「ウイニングロード……！」

拳を床に叩きつけると、魔力光と同じ水色の道がスフィアがあるで
あるビルへと到達する。しかしスフィアは気付き、スバルが来る
であろう壁に注意を向ける。だが、ティアナのフェイクにより注意
は逸らされた。

今よ、行つて！！

side out

side スバル

ガシャン

カートリッジをロードした音が鳴り、私は突撃する。

「行いいいいいくぞ…………」

ローラーをフル回転させ、ウイニングロードを全力で駆ける。そして

壁を壊し内部へと侵入した。

ପ୍ରକାଶକାଳୀ

スフィアに渾身の右ストレートを繰り出す。しかし、スフィアは防
御する。

「おおおおおおおおおお……」

私は構う事なく、
拳を付きつける。

気迫とともに、カートリッジが一発ロードされる。そして、指が防
御の中に。そして中から防御を破壊した。しかし、スフィアの反撃
にをくらいい、後ろに回避する。

そして一発分がロードされ、法陣が展開される。

「これで、決める！！一撃必倒！！！」

「デイバイン・バスター！！！！！」

振りぬかれた拳から、圧縮された砲撃が繰り出される。それは易々とスファイアを破壊したのだった。

side アセルス

二人とも凄いな。実力的には、苦しいのに。やっぱり相性抜群だね。ただ、このまま終わらせてくれそうにないんだよね。はやてのことだから。

二人とも、時間ないから急いで

そして、駆けだしていった。

ゴールで待つリインはいつ来るのかと、心配している。時間を再度確認し、再度前方を見ると、三人の姿が見えた。

「来たですね。時間もありますし、大丈夫でしょうです」

しかし、リインは知らなかつた。知つていたのは、隊長達だけでリインは知らない。まだ大型スフィアがあることを

「ティア大丈夫?」

スバルはティアを背負つて走つている。やはり足は完全ではなかつたみたいで、痛みが再発したみたいだ。

とにかく、早くゴールして治療しないと。だがここに最後の罠があつた。大型スフィアが背後に現れたのだ。

「やつぱりね。こんなことと思つたよ」

「あわわわ、あれなんですか～？」

はやてのやりそなことは分かつてたけど、これは卑怯だよ、はやて。このさい合格のためには、仕方ないか…それに、リインもパニック起こしてんし。

「一人とも、先に早く。あいつは私が仕留めるから」

「そんな無茶よ、私達でなんとかなったのに」

「今の一人は、満身創痍。はやく「ゴールすることが先決だよ。大丈夫、絶対に間に合わせるから」

二人をなんとか納得させ先に行かせる。だが、この大型スフィアの様子はおかしかった。

この魔力量は…さつきの奴とは全然違つ。しかも、私を狙つていな
い。

そう、この狂つてしまつたスフィアは、一人を狙つてゐる。

一人とも、避けて

二人はどうやら寸前に回避できた。だが、スピードを落とさせるわけにはいかない。

もう一枚使うしかないみたいだね。ごめんシャーリー。

「秘められし力を解放せん。祖は守りの象徴なり。出でよ」

もう一枚の盾が描かれたカードに魔力を込め、二人に投げる。二人の背後に、盾が出現し、一度目の砲撃を防いだ。

「さて、悪い子にはお仕置きしなきや」

壁を蹴り三角飛びの容量で、攻撃箇所を破壊する。そして、背後に回り込み、掌をスフィアに密着させる。純白の小手が淡い光を帶びた。

「終わりだよ！」

短剣

内部に気を送り内部からの破壊。最近の模擬戦で閃いたものだ。

狂ったスフィアは爆散。やれやれと思い時間を確認すると、もう10秒しかない。ゴールをみれば、一人が何故かネットに絡まっている。止まる事考えてなかつたのか…

「仕方ないね。私もあるの一人と一緒に罰を受けますか」

Sonic Move

10秒かっちらりに私は「ゴールし、そのままネットへと突っ込んだの
だった。

その後、三人そろって、リン空曹長に怒られたのは言つまでもな
い。それにスバルとティアにも色々聞かれることとなり、まだ誤魔
化す必要があつたため、大変だった。

でも、スバルとのは隊長との出会いも聞けたし良かつたかな。

はやて、覚悟しててね

ちよつ、アセルス、あれは違つて。あんな強いの置くわけない
やん

ちよつとほんとつぱいけど、まああとでお仕置きだね。

でも、そうなら原因は一体…

手がかりになりそうな、スフィアを爆散させてしまった、少し抜け
た一面をも見せるアセルスだった。

始動（後書き）

いきなり話に変更が…。Orz
アセルスが試験を受けるので、これくらいは…

勘弁してください。

たまには、羽目を外したつていいと想こます。でもやつすがる
と、後々こわいですよ。

3×1／3つて不思議な計算なんだよね。数学つてふしきだね。
リインとフライテの全く関係のない何気ない一言より。

side リイン

「愚つたよつ座我はひどくなれりです」

治療が終わり、なのはさんに報告してるです。ビックやらアセルスさん
が治療してくれてたみたいで、少しごして軽傷ですんだわけです。
アセルスさんも訓練の成果ばっちり出でてるです。あとと、アセルス
さんも含めて説教はしましたし、帰りますですよ。

「なのはさん、以上で報告おわりです」

「リインもお疲れさま。ちゃんと試験監できただよ

やつた～です　なのはさんに褒められました。嬉しそうでその場で回っちゃいます。

s i d e o u t

s i d e なのは

嬉しそうに回るリインを見て、なんか疲れも吹き飛んじゃった。

「こやははは… とりあえず、みんな今日はお疲れ様。試験の結果はまた後日に私から通達します」

一人とも、ここれからがほんと楽しみだな…。

試験会場から帰つて行く一人を見送り、アセルスと話すことにした。

「アセルス、お疲れ様。どうだった？あの一人？」

「一人ともまだまだ荒いけど、コンビとしては凄く能力高いと思う。それに伸びるよ、かなり！」

やつぱりアセルスも同意見みたい。これから教導楽しみだな。

「データも整理できだし、帰ろつか。あつーまだアセルスのことは秘密だつたね。。。」

「なのはさん。氣を付けてくださいよ。偽るの大変なんです」

「プライベートでは、なのはでいいよ。アセルス」

そういうて額に軽くKissを落とす。あつ、慌てる。なんか新鮮だな…慌てるアセルス。いつも白薔薇姫といひやうしてゐるに。

「なのは…／＼私には白薔薇が…」

「なのはさん…アセルスさん…惚気てる場合じやありません…ルスにもなんか魅力的なものある…」

「なのはさん…アセルスさん…惚気てる場合じやありません…！」もう。。先に帰りますですよ？」

「…」めん。心の中では必死に謝る私でした。

side out

side スバル

「なのはさん、覚えてくれてたんだ。それに、なのはさんに憧れてここまで来たつてことも言えた！」

テンションMAXな私。ティアが絶賛溜め息、呆れてる。ひどいよ、

ティア)。

「うつさい、スバル。とにかく、最後の暴走の減点痛すぎよーー！もう…落ちたらどうすんのよーー！」

ティアが足を捻挫しなかつたら、こんなことには。。。なんて言えない。絶対。

「きつと。。大丈夫。。だよ..はああ」

溜め息が移っちゃった…気にしてても仕方ないよね。うん、帰ろう。結構大変だったし、早く帰ろう。止めていた足を繰り出したそのときだった。

ここに居たか。覚悟ーー！

どこからか、声が聞こえた。そして後ろを振り返ると同時に、三人の居た場所に、結界が展開されていた。

side out

side はやて

試験の内容について、フロイトちゃんと会話してゐる最中やつた。訓練スペースにできたあの結界がまた現れたんや。

「フロイトちゃんーあれつて、訓練スペースのときの結界とちやうか？」

「たぶん、そうだと思つ。でも、なんで」「」「？」

なんで、こんなとこに結界が… こんなところ狙つても仕方ないやろし…。いや、アセルス? 多分そうだ。アセルスを狙つてる。

「」「ひかり、ロングアーチ〇〇。ロングアーチ、聞こえる?」

「はやてか。びづやうひきりこ、従騎士が来たようだな」

従騎士? もしかしてあの結界の正体! ?

「我らの元いた世界から、アセルスを倒し、白薔薇姫様を連れ戻そ
うとする騎士たちだ。このまえは炎の従騎士だつたはずだ」

詳しい話を聞いてなかつたから分からんかつたけど、」「」「」と
やつたんか。なるほど。

「その結界に関するのは、妖魔だけだ。中には誰が?」

「多分、アセルスとなのはちやんとコインが中に」

モニター越しにイルドゥンと白薔薇姫が笑つてゐる。笑い「ちやな
いで。

「心配しないでください、はやて様。アセルス様には十分教育しておつますので。それにフロイト様も安心しています」

横を見ると確かに心配してなさそうな、フロイトちゃんが。

「はやて、大丈夫だよ。あの三人なら、そういう負けやしないよ。オールラウンダーに最強のセンター、そして、はやての大好きな家族だつて一緒にだからね！」

たしかに。心配しそうやつたな。連絡はとれへんけど、きっと、大丈夫や。

「三人とも、無事に帰ってきてや

side out

side アセルス

この感じは、前にも経験した。あのときだ。白薔薇を連れてこいつとした。あいつの時と一緒に。また白薔薇を狙ってるの……嫌だ。絶対に白薔薇は渡さない。

感情がいやでも高ぶる。駄目！抑えないと。

少し深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。よし、大丈夫だ。

「アセルス、これって… 映像で見たのと同じ?」

「多分そうです。奴らは白薔薇を狙つて…」

いいや、今回はお前の命を預く

「…!?なんですか~今の声は~」

リインが慌てるの同時に、声の主が現れた。

「我は、水の従騎士。お前の命、貰い受ける!」

「簡単にやうですかってやられるわけにはいかないよ!…なのは、
リイン、力を貸して!…」

「もううん…」こんなところで死ぬわけにはいかないよ!…

「私もですよ!…」

視線で合図し、三人はバリアジャケットを装着する。

ソルとルナは今は手元はない。今はフォートレスでやるしかない。

なのは、リイン。設定は殺傷に変更。殺るしかないよ

二人とも、戸惑ってる。多分一人の正義なんだろうな。

「ごめん、二人とも。私が止めを刺すから、一人は動きを止めて！」

「ごめん、アセルス。こつちは任せて

アセルスさん、お願ひしますです

そうして、フォートレスの設定を殺傷に変更する。貴様は塵一つこの世には残さないからね。

「さあ、いくですよ」

古代ベルカ式の法陣を開くリインは自らも一部ともいえるストレージデバイス「蒼天の書」を開き、相対する。

「フリジットダガー」

リインの眼前に30本以上の水色の短剣が現れる。そしてそれらは、
従騎士へと飛翔した。

「小瀬な！！！」

従騎士は盾と剣を使い、飛来する短剣を次々に撃ち落としていく。

だが、盾に刺さった短剣の周りは短剣の名の如く凍結している。

その攻防から少し距離を置いて、なのはは機会をうかがっていた。

「アクセルシューター、ワンショットで精密射撃。いくよーー！」

〔A c c e l s h o o t e r〕

普段より大きいアクセルシューターが打ち出される。放たれた弾丸は寸分の狂いもなく、盾に刺さった短剣を捉えた。そして、その衝撃に耐えることのできない盾は無残にも砕け散つた。

「おのれえええーーー！」

まさか人間如きにこゝまでされるとは思わなかつたのだろう。怒声と共に、なのはに突っ込んでいく。だが…

「油断しすぎだよ」

なのはに向かつて走る、従騎士の前に宙返りで割りこみ、そのまま角にかかと落とし。あびせ蹴りでそのまま角を折つてやつた。怒りすぎると逆に冷静になるのだろうか？水の従騎士たる敵は水を使つた。

「水が、やつの周りに…一体なにを」

何もなかつた地面から突如、水が湧き出し、従騎士の周りに円状の水溜まりが形成された。

「ここまで口ケにされたのは、はじめてだぞ、人間どもーーー楽

には殺さんからなーーー！」

剣を振り上げると、水溜りから、水球が形成される。そして無数の水球が襲ってきた。

水撃

狙いはもちろん、リインだった。だが、考えが単調すぎたようだ。アセルス、そしてなのはにも読まれていた。

「リイン、私の後ろに。なのはーーー！リインーーー任せるよーーー！」

気を練り、魔力と混ぜ、障壁を開拓する。

プロテクション

魔力が足りない分、氣功で補うことにより、強度や、凡庸性が増した。だがフォートレスを使っている場合しか、この強度は無理だが。なんとか水撃を防ぐことはできている。だが、水の従騎士は伊達ではなく、プロテクションにもヒビが見える。

二人とも…早く…

結界面ギリギリの上空。

薬莢が一発分排出される。

「チャージ完了! レイジングハート、ディバインバスターいくよ!」

〔D i v i n e B u s t e r〕

魔力が凝縮される。 そう高町なのはが得意とするこの砲撃。

「ディバイーンバスター——」

プロテクションが破られると同時に、桃色の巨大な魔力が従騎士を飲み込んでいく。 流石に不意を突かれ、直撃の為、非殺傷とはいっても意識を刈り取る寸前までおいこんだ。

「逃がしません!! 捕らえよ、凍てつく足枷! フリー・レンフェッセルン!」

そう、水の従騎士は最大のミスを犯した。 リインの凍結魔法は周囲に水があれば、発生速度は上昇し、強度も増す。 水さえなければ、まだなんとかなっていたらうが、一瞬にして、氷檻に固定された。

「ぬうう、何たる失態」

「へえ、まだ喋れるんだ。でも、言つたよね。塵も残さないって。」

身体の中を電流が駆け抜け。イメージが湧き上がる。私は魔力の変換資質があるらしい。だからこのイメージが成り立つのだ。

これでとじめだよ。

右の小手が紅く燃え上がる。

「知ってる？冷めたものを急激に温めると、壊れやすくなるんだよね。だから、試してみよつか。もちろん、貴様でな」

脱兎のごとく駆け、正面に対峙、そして、その加速を利用した、正拳突きを放った。炎を纏つた一撃は、氷の中の騎士を捉えた瞬間、爆炎を放ち、碎き飛ばした。

金剛神掌

「まだ、生きてるなんて、さすが妖魔」

私は、残つた騎士の頭を足で踏みつけている。

「貴様如きに……だが忘れるな……次の騎士が貴様等を……」

他の部分が消滅していく。そして、残るは頭だ。

「では、言つておひづ」

私は、一人を見て頷く。そして……

「……私達は負けない（ですう）……！」

そうして、頭を踏みつぶした。

騎士が完全に消滅したようだ。結界が解かれた。

「アセルスつて、この時は、凄く恐いんだね……」

「なのはさん……リインも怖かつたです……」

そこには青く染まつた純白のドレスに身を包むアセルスがただ、笑っていた。

s i d e o u t

s i d e フェイト

結界が発生してから、私とはやては、結界近くで待機していた。すると、後ろから、スバルとティアナが来たようだ。

「スバル＝ナカジマ＝等陸士とティアナ＝ランスター＝等陸士だね。フェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務管です。今は危険なので、二人とも、下がつてて」

「せや、危ないし、怪我しどるや。ここは任せといてやーー！」

二人ともびっくりしてる。どうしたのかな？

「フェイト執務管！－、それに、八神はやて＝等陸佐！－何故お二方がここに？」

ティアナが慌てて尋ねる。そんなに緊張しなくてもいいのに。

「試験を見せてもらつてたの。そしたら、急にこんなことになっち

やつて「

経緯を説明していると、急に結界が解除され、そこには青に染まり、笑うアセルスと少し困っている、なのはとリインがいた。

「なのは、リイン、アセルス、無事だった？」

なのはの元へと駆けよる。どうやら無事みたいだ。思わず抱きついでしまった。

「無事でよかつた……」

「フエイトちゃん……」めんね。心配かけて

リインもはやってのところに飛んでいった。やっぱり怖かったのだろうか？再びアセルスに視線をやると、バリアジャケットが解除されると同時に倒れた。

「アセルス！……」

なのはが駆け寄り、支える。

「今の戦闘で魔力を使いきつたみたい。とりあえず、検査だけでもしないと」

結界中で一体何があつたのだろうか。今は、治療と休憩が必要そうだ。

「スバルにティアナ。試験結果は三日後に伝えるから。アセルスのために時間頂戴ね」

なのはがそう言つと、二人は敬礼して答える。

「了解しました」

「じゃあ一人とも、私達は、アセルスを病院に連れていくから、気を付けて帰つてね」

そういうアセルスをヘリに乗せ、飛び立つた。もちろん病院ではなく、機動六課にだが。

「私達つて乗せてくれないんだね、ティア」

「我慢しなさい、スバル」

残された二人、寂しく帰るのだった。

side out

実力（後書き）

またしても、ブレイクonz

訓練が成果か、従騎士を簡単にやつちゃいましたwww

いろいろとありますが、「了承ください。

勧誘（前書き）

大変遅くなりました・・・。
しばらく書き貯めが続きそう・・・です。

今という一瞬の為に、全力の努力をぶつけることができる方針は高く評価するべきである。

シグナムのありがたい咳きより。

s i d e 白薔薇

アセルス様が従騎士との戦いで倒れたと聞いてから、医務室でアセルス様に付き添っています。幸い、魔力の使いすぎと、疲労とのことでした。デバイスからの補助がなくてここまで戦えるようになります本当に嬉しく思います。

「アセルス様：／＼＼＼お強くなられましたね」

優しく頬を撫でk i s sを落とし、そしてその美しい寝顔をただ見つめていました。

s i d e o u t

s i d e ティアナ

現在、私とスバルは、試験の結果を聞くために、機動六課のオフィスに居る。ここでびっくりしたんだけど、私達を機動六課のF Wとしてスカウトしたいと、はやて一等陸佐から話があったの。私達が

…。

「ええと…取り込み中かな?」

高町なのは一等空尉。どうやら試験の結果を持つてきたようだ。

「一人とも技術はほぼ問題なし。でも危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えてます。自分やパートナーの安全だとか、試験のルールを守れない魔導師が、人を守るなんてできないよね?だから残念ながら一人とも不合格」

やつぱり…不合格。落ち込む私の考えはすぐに吹き飛ぶ。

「なんだけど、一人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのはかえって危ないかも。というのが私と試験監の共通見解」

「ですか」

つまり…どうこういとなのかしら?そこに手紙のよつなものが一人分手渡される。

「はい、これ、特別講習に参加するための申請用紙と推薦状ね。これをもつて本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから」

えつー?えええ!?

「来週から、本局の厳しい先輩たちにしつかりもまれて、安全とルールをよく学んでこよう!そうしたらBランクなんてきっと楽勝だ

よ。ねつ……はやて一等陸佐?」

つまつ……まだチャンスはあるんだ。

「あ、ありがと!」ゼロもす……」

でも……なんか……はやて一等陸佐が……冷や汗だらだらなんですね!…

「まあ、一人とも試験に集中したいやうから、この話の返答は試験後でかまへんよ!」じゃ、後はよろしく!」

あつ、逃げた。よっぽど怖いんだうつな。そつこえればアセルスはどうなつたんだる?

「高町一尉、「なのはでいいよ、ティアナ」では、なのはさん、アセルスはどうなつたんですか?」

ここにアセルスは来ていない。まだ回復していないのか?しかし答えはただただ驚愕するものだった。

side out

side なのは

アセルスのことは、はやてちやんや、イルドゥンさん、白薔薇姫さんと話して、もつぱりしておいいことになつていた。一人とも、機動六課には来るだらう。

「実は、アセルスのことなんだけど…まだ詳しくはちゃんと離せないんだけど、アセルスは陸士108部隊所属でもないし、一等陸士でもないんだ」

やつぱり一人とも固まってる。スバルはまだ内容が掘めてないみたい。でもティアナは気付いているみたい。

「なのははさん、つまりはどういうことですか？」

「この際だしちゃんと言つとかないとね。

「アセルスは機動六課所属で本来の階級は准陸尉。それに魔導師ランクはBランク相当だけど、戦技はAAAに近いものがあるの。総合ではAAに近いと思つよ」

また固まっちゃった。今回の試験は上層部に怪しまれないようにするためだつたから仕方なかつたし、スカウトする予定の一人を見てもらいたかった。

「これも深く話せないんだけど、そういうことなの」

はやてちゃん…私に押し付けるなんて酷いよ。そこにスバルが呟く。

「だから、一人で簡単にあのスフィアを壊せたんだ…」

「今回の試験は特別だつたからね。でも、一人とも一問題点も多かつたからしつかり、本局で勉強してきてね。話はまたそれからね…」

一人して頭を深く垂れるのだった。

side out

side スバル

中庭の芝生に思わず寝ころぶ。試験のこと、新部隊のこと、アセルスのこと。色々あり過ぎて頭いっぱいだよ。

「ティア。ティアは新部隊、どうする?」

「遺失物管理部なんてエリート部署じゃない?そんな中で、ちゃんと働けるのかしら?」

またティアの悪い癖がでた。もう…しょうがないなあ…

チュツ… / / /

ティアが赤くなつてる…効果できめん! -

「なな…何してんの馬鹿! - - - -」

「ティアならできるよ…絶対に。それに執務官になるにも二つちのほうが近いよ…」

少し元気でてきたかな?私達はまだ二人で一人前だから。いつか一人で一人前になる日まで。

「ティア！頑張ろつ……」

頬笑みながら、ティアにハイタッチを求める。それにティアも答え、そこに決意と共に、乾いた音が響いた。

side out

side シグナム

私は、テスター・サガ面倒を見る一人のフォワード候補の一一人を迎えている。紅色が映える少年「エリオ・モンティアル三等陸士」竜使い「キャロル・ルシエ三等陸士」。

ただ色々あつてな。エリオ……隅におけん奴だ。

さて、二人とも自ら紹介は済んでいる様だな。

「二人とも、そろそろ行くぞ！隊舎に案内する」

まだあどけない二人は揃って敬礼を返す。

「はい……」

side out

市街地に結界が展開されている。今、ガジェットの掃討中である。

「ヴィータちゃん、ザフィーラ、追い込んだ。ガジェット・型、そ
っちは三体

ガジェットが三体、細い路地を逃げている。しかし、その前方には、
ザフィーラが立ちふさがる。

「ああああああああああああああああああああああああああ

氣迫を込めた叫びと共に地面から白銀の軛が飛び出し、ガジェット
を一体貫き、破壊した。爆発と同時に起きた土煙を抜け、残りの一
体が依然逃亡する。

しかし逃がすわけがない。赤き騎士が渾身の一振りと共に急降下し
てきたのだ。

「でええええいいいいいいいいい

振り下ろされた鎌はガジェットの側面に振り下ろし、壁へと吹き飛
ばした。もちろんガジェットが耐えることなく、爆散した。

残るは後一體。その一體はザフィーラの頭上を通過し逃亡する。し
かし、追撃の準備は完了している。

「アイゼン……」

【 Schwabefliegen】

ヴィータが魔力球を一個生成する。そして、グラーフアイゼンで勢いよく打ち出せばそのままガジェットを捉え、そして爆発した。

「片付いたか」

「シャマル残りは？」

広域にサーチをかけ反応を確認する。

「残存反応無し。全部潰したわ」

反応を確認し、一人と合流する。今日はこれで終わりそうね。

「最近、出現の頻度が増えてきているな。それに、最近色々と妙だ」

「ああ、だんだん賢くなつてきている。それに影で何かこそこそしてこる連中がいそうだ」

二人とも気付いているみたいね。センサーに掛からないギリギリから観察している何かもいたようだ。

「まだ私達で何とかできるけれど、そろそろきつくなつてきたわね」

「ひょつひょつ達には任せてらんねー。まだ私達でなんとかしねーと」

「やつだな、それに我らだけでは手が足らん」

三人は同時に頷く。

「そのための新部隊。はやての……いや、私達の新部隊」

こうして機動六課という大きなピースが、できあがろうとしていた。

side out

私って、最近病院送り多くないですか…作者（・・・）

アセルスの小言より

氣のせいだと思つますよ~~~~

s i d e アセルス

「つううん…」

ぼやけた意識が少しずつこいらの世界に引き戻される。最近の中では意識失った時間が一番長かったのではないか？それだけ私の心身は極度の疲労を受けていた。

「…は…そつか。また疲れて倒れちゃったんだ…スタミナ無いな、ほんと」

よつやくはつきりしてきた視界の中、ベッドから起き上がった。幸い疲れは抜けているようだ。

そんなとき、タイミングを見透かしたよつこ、まちゅうせゅうた携帯端末に連絡が入る。イルドゥンからみたいだ。

ロビーで挨拶があるから出席しろとのことだ。。。やつこえはあの二人にもあれ以来会ってないしね。

少し身体を伸ばして、自分の部屋に戻りシャワーを浴びる。ずっと寝てたのに、汚れてないな。白薔薇：／＼／ 感謝しなきや。

シャワールームから出て、タオル一枚で鏡の前に立つ。綿のような身体には無数の痣、傷が田立つ。それだけ彼女が過ごしている時間は濃密なのだ。

「さてと、そろそろ行かなきや」

しかし肝心なことを忘れていた。そう制服が無いのだ。さすがにバリアジャケットでロビーに行くには少し気が引ける…

それも部屋に戻れば取り越し苦労に終わることとなつた。

「白薔薇：／＼／」

部屋には機動六課の制服が掛けられていた。私の事をほんとに分かってくれている…

「あつがとへ…白薔薇」

素早く制服に着替えれば、鏡の前で身だしなみを整える。つん、似合っている。

「さあ、行こうかー。」

s.i.d.e o ut

s.i.d.e はやて

部隊長オフィス

真新しい机を指で一度なぞる。つっここの田代がやってきたのだから。隣でリンも喜んでこるよつだ。

「この部屋もようやく隊長室らしくなったですね～」

「わうやね～リンのトスクもちょいどのがあって良かったな～」

「えへへ、リンにぴったりですぅ」

リインも嬉しそうやな…おひ、誰か来たよつや。

「失礼します」

「あつーお着替え終了やな 一人とも似合つてゐよ」

機動六課の制服に着替えた、なのはちゃんとフェイトちゃん。うん、とっても似合つてる。

「三人で同じ制服なんて中学校いらいだね。なんや懐かしいなあ…。
まあ、なのはちゃんは飛んだり跳ねたりが楽な教導隊の制服のほう
が多くなるかもしれんけど」

それになのはも笑つて返す。

「まあ、事務仕事とか、公式の場はこいつら。ねつ…」

三人で少し笑つ。あの約束がついに実現したのだから。

「なのは、そろそろ…」

フェイトがなのはの切り出す。仕事上必要なことは例えこの三人の仲であつても疎かにしてはいけない。

まず敬礼したなのはが答える。

「本日、只今よつ高町なのは一等空尉」

それにフェイトも続ぐ。

「フェイト・T・ハラオウン執務管」

「両名とも機動六課に出向となります。どうぞよろしくお願ひしま
す」

私もこれに敬礼で返す。

「はい、よろしくお願ひします」

少しの間ができる、そしてまた笑みがこぼれる。やはり二人の仲は素晴らしいものだ。

「ブー――」

そういうところで、ドアが開くとそこには、成長した懐かしい青年の姿があった。

「どうぞ」

ドアが開くとそこには、成長した懐かしい青年の姿があった。

「失礼します。あつ、高町一等空尉、テスター・ラッサ・ハラオウン執務官。御無沙汰しています」

礼儀よく敬礼し、蒼髪の青年は挨拶をする。ただ、一人とも少し困惑していた。が、二人とも気付いたようだ。

「ええと、」「もしかして、グリフィス君?」

よかつた、覚えていてくれていたみたいだ。

「はい、グリフィス・ローランです」

しかし、彼の前の一人は大はしゃぎしている。

「うわわ…凄い！凄いよグリフィス君！…すっごい成長してる…！」

「！」

「前見た時は、もつとちちっちゃんかつたのに」

「二人とも。。。昔の話は・・・//」

「その節はお世話になりました。今はこの部隊の副官を務めています」

「そりや、アセルスがこっちの世界に来た時にも、グリフィス君はかなり頑張ってくれたんや」

ほんと、優秀な人材や。

「母も元気でやっています。それと、報告よろしいでしょうか。新規のフォワード4名、それに機動六課のスタッフ、それとアセルスさんも揃いました。現在、ロビーに集合しています」

「そりやあ、早かったな。それにアセルスも復調してなによりやな。それじやあ、なのはちゃん、フュイトちゃん。みんなに御挨拶や！」

「！」

「うんーーー！」

side アセルス

ロビーでは、はやてやみんなの挨拶が行われている。ただ病み上がりな私には、ただただ辛い訳で…あつ、次は私の番かな。

「アセルス准陸尉です。階級とか関係なく接してください。」

簡単な挨拶で話を終わる。実のところを言えば、体調がいまいちなのですぐに切り上げることとなつた。

挨拶が終わり、解散となつた後、シグナムとフェイトが一緒に歩いていた。どうやらこの二人は色々あつたみたい。そんな妄想している私に、二人は気付いたようだ。

「アセルス！－もう大丈夫なの？みんな心配してたよ。」

「そうだアセルス、もう身体はいいのか？」

「二人とも…心配してくれてたんだ。…ありがとう。」

「もう大丈夫。二人とも、ありがとう」

少し照れながらも一人に頬笑みかける。ただ一人は少し赤面していたけど。

「まだまだ、二人みたいにはいかないな。二人とも、また教導お願
いね」

強くならなきゃいけないから。守るため、勝つためには・・・そんな思いに耽つていると、一人に手を握られていた。

「喜んで！――！」

二人とも…ちょっと怖いよ…

そんなこんなで、時間を潰していると、フェイドがある」と思いだした。

「アセルス、実はフォワードの4名が模擬戦を行つてゐるんだ。それでね、アセルスにも模擬戦に参加しておいてほしいんだ。

「模擬戦って…隊長達といつもやつてるやつ？」

「それもあるけど…アセルスも聞いたことあるでしょ？」「ガジェット・ドローン」。私達はこれとも戦わないといけないの

ガジェット・ドローン　話は聞いているけど、実際にまだ戦つたことはない。経験を得るためにも戦つておくべきだろ？

「わかった。で、どこで模擬戦やつてるの？訓練スペースはまだ…壊したままだし…」

壊した本人は全く気にしない。

「それなら大丈夫！さあ、案内するから！行くよアセルス。リハビ

りついでに、身体動かそつ

二人に引っ張られながら、私は外に連れ出された。

～～移動～～

隊舎の外に移動し、しばらく歩くと眼前には、荒廃したビル群が立っていた。しかし、以前ここはただの人工の土地だったはずだ。

いつの間にこんなものができたんだろう…

ビル群を眺めながら歩いていると、そこにデータを整理しているシヤーリーが居た。

「あっ、アセルス！もう身体は大丈夫？なのはさんも心配してましたよ」

コンソールを操作しながら、シヤーリーは淡々と話している。どうやら原因はデータを取っている為の様だ。

「シヤーリー、なんのデータ取ってるの？」

何気ない疑問だが、これがフェイドがここに連れてきた理由である。

「いま、フォワード4人のデバイスのデータを取っているんです。

みんな良く走りますからね。みんないい子に仕上げますよ「

なるほど…だからシャーリーが楽しそうなんだ。そういうや、私もこの模擬戦に混ざらないと…

「シャーリー、私のデバイスのデータを取つておいて。最近、ルナとソルを使ってなかつたから、調整を兼ねてお願いしたいんだけど」

「言われなくともそのつもりでしたよ、アセルス 妖魔とのデータはありますが、ガジェットのデータはまだありませんから。ドラグーンもしつかり調整しますよ！…！」

頼むよ…シャーリー。さて、私も訓練に混ざろうつかな。

「アセルス、頑張つてね！無茶はしちゃダメだよ」「アセルス、無理はするな」

やはり、少し心配なのだろう。大丈夫だよ…一人とも。

待機形態のルナ、ソルに触れる。それに答えるように、一機は光る。
ピアス
久しぶりに使う相棒達だけど…きっと大丈夫…！」

「Stand by ready」「セットアップ」

待機中のピアスが銃形態へと変化する。同時に紅きバリアジャケットが展開される。

魔方陣が消えるとや」には、紅き姫が舞い降りた。

「ふう……やつぱり」れがしひくつくるかな?さてと、みんなに混ざらないと」

〔ソロリ モード〕

一瞬にして、私は模擬戦が行われている、ビル群へと駆けて行つた。

side out

side ハリオ

第一回模擬戦

逃走するターゲット8体の撃墜、または捕獲。これが今回のミッション。スターZの一人や、キャロに迷惑をかけないように頑張らなないと。

「それじゃあ、第一回模擬戦、元気に行こうか……!!」ショーンスター

「ト」

なのは隊長の合図と同時にターゲットが逃走を開始する。今回のターゲットは、接近すると攻撃をしてくるタイプらしい。

らしいのだが……

向こうから、スバルさんがガジェットを追いかけながら、魔力弾による撃墜を試みていた。しかし、逃走していた4機ともに簡単に避けられていた。

「うわ！？なにこれ、速過ぎーー！」

確かに、速そうだ。だけど僕だってスピードには自信がある。逃走経路に陣取り、撃墜を試みる。

ガジェットからの攻撃を確認と同時に跳躍、ビルを使い三角飛びの要領で回避、そしてデバイス「ストラーダ」を振りぬき、魔力刃を飛ばす。が、それもひらひらと舞う木の葉のように、簡単に避けられてしまった。

「駄目だ…ふわふわ避けられて、全然当たらない…」

何度か追いかけ、攻撃を仕掛けるも、すべて避けられてしまった。するとティアナさんから念話が来た。しまった…後ろとの距離…考
えてなかつた。

前衛の一人、分散しそぎ……ちよつとは後の「」とも考えて

あつ、はい。すみません

「めん、ティア！！

一度、スバルさんと合流することが先決みたいだ。

追撃はあきらめ、一度スバルさんと連絡を取る。

スバルさん、この先のジルの下で合流します

スバルさんもそのつもりだったようだ。

OK、私も向かつてゐるから

時間もないのに急いで合流地点へと向かつた。

合流ポイントへの移動の最中、ビルの屋上から、追いついたティアナさんとキャロがガジェットに攻撃を仕掛けているのが見えた。

side out

side ティアナ

「ちびっこ、威力強化お願い」

「はい！ケリュケイオン」

「Boost up】

「Barrett Power」

ちびっここの補助により、私の魔力弾が一回り大きくなつた。これならいける。

眼下を走る4体のガジェットに狙いをつける…そして強化された4発の弾丸を解き放つた。

「シュー―――ト――!..」

オレンジの弾丸はターゲット目がけ正確に飛来する。だが着弾の寸前、4発の弾丸は打ち消された。

「バリア！？」「違います、あれはフィールド系！..」「魔力が消

された！？

三者三様の感想、意見を述べる。初見ではびっくりするのも無理はない。

「そんなものまであるなんて…早く合流しないと」

先を急ぐ中、なのは隊長からの説明が入った。

ガジェットには少々やっかいな性質があつてね。攻撃魔力を打ち消すアンチ・マギリング・フィールド「AMF」。普通の射撃は通用しない。それに、AMFを前回にされると、飛翔系、足場作り。移動系魔法の発動も難しくなる。だから…

どうやら遅かつたようだ。合流前にスバルさんがガジェットを追いかけたらしく、AMFの影響を受け、綺麗な前方三回転を決め、ビルにぶつかる。足場が消えたのが原因らしい。

「スバルさん―――大丈夫ですか？？」

「エリオ…なんとか…いたたた…」

どうやら実戦でもこんなやっかいな性質をもつた敵を相手にしなくてはいけないとなると先が暗くなりそうだ。

「対抗する手段はいくつかあるよー素早く考えて、素早く動いて！」

そう、これは思考のトレーニングでもあるのだから。どうやらみんな考えはまとまつたみたいだ。

ティアナとキヤロがまず動いた。

「ちびっこ、名前なんていつたつけ？」

「キヤロであります」

「手持ちの魔法とそのチビ竜の技でなんとかできやうなのがある?..」

チビ竜が馬鹿にするなよといわんばかりに、羽を広げる。

「こくつか…ためしてみたいものが」

その答えを聞くと同時にパネルを閉じる。意見は同じのようだ。さて、この手段が上手くいけばいいけど…

side out

side out

スバル、あいつらの足止めお願い

了解! ハリオ、先にあいつらの足止めお願いできる?

正直、あまり考えがまとまつていなかつた僕は困惑している。だけど、ティアナさんがなにか考えてくれてるみたいだし、ここはなんと

か足止めをしなきや。

なんとかやつてみます

「ひらりの近くに空中で繋がったビルの廊下がある。それを利用すれば足止めもできるはずだ。」

幸い、そのポイントはすぐに発見でき、ガジェットが到達する前に用意することができた。するとスバルさんも遅れながらやってきた。

「ヒロオー！前衛一人で足止め頑張り……！」

「スバルさん……やつですよね！」

「はー……！」

元気よく返事を返すと同時に、ストラーダにカートリッジをロードさせた。

「ストラーダ！カートリッジロード！」

【エクスポート】

カートリッジがロードされると、魔力が溢れだす。ストラーダを風車の如く回転させ、勢いのままビルを破壊する。崩れるビルの残骸に、つまぐガジェットを巻き込むことができた。

「まだ残つてゐ！――スバルさん」

瓦礫から難を逃れたガジェット逃走を続ける。しかし、一度も失敗を続ける者をいない。頭上を越えて逃走しようとするが、そこにスバルが割って入った。

「潰れてる――――――！」

力任せに殴りつけ、たたき落とす。だがAMFの影響か、破壊することには至らない。

「なら……」

これまたフランケンシュタイナーよろしくとばかりに、足でガジェットを地面に叩き付ける。そして今度は直接殴りつける。ジワリジワリと装甲を貫通、そして破壊した。

「スバルさん！――すゞいです。足止めも成功ですね」

「ヒリオも良かつたよー。」

一人で拳をこつんと合わせる。その瞬間……

5機の新たなガジェットが現れ、そのまま一人を追い越して行つた。

「しまつた！？まだ居たなんて！――」

その方向はバックス組の方角。早く追いかけなければ、二人にこの数は多すぎる。

二人して疲労困憊したなか、駆けだしていった。

side out

side キヤロ&ティアナ

エリオ達が足止めをしてくれたおかげで、バックス二人はそれぞれ試したいことの準備ができていた。

「ティアナさん、先に仕掛けます」

ティアナに告げると、幼き召喚士は使役竜「フリードリヒ」に命じる。

「フリードー・ブラストフレア」

「きゅく～」

小さき竜は口元に火炎球を形成していく…そして命令を下す。

「ファイアー！」

真下を逃走するガジェットに火球が迫り、地面に直撃する。その後火球は地面を火の海へと変えた。火炎に巻き込まれたガジェットは耐えることができず、そのまま爆散した。

だが全てを爆散させることはできず、数体は上空へ逃げようとする。

だが…

「逃がしません。連続行きます！――！」

「我が求めるは、戒める物、捕える物。言の葉に答えよ。鋼鉄の縛鎖。鍊鉄召喚、アルケミックチェーン！――」

ガジェットの真下に法陣が展開されると、まるで生きているかのような鎖が現れ…ガジェットを捕えていった。

それを見ていたなのは。

器用だなこの子。。。無機物を召喚・・・それに無機物操作も組み合わせるなんて。フロイトちゃんも面白い子連れてきたね。

だがその竜召喚士のとなりではあり、「驚くべき」とを今までに成そうとしていた。

「射撃型が、射撃が通じないからつて引き下がるわけにはいかないのよーーー！」

カートリッジをロード、魔力弾を形成する。

「ティアナさん！魔力弾は通用しませんでしたよーーー！」

「キャローーいいから黙つて見てなさいーーー！」

本命の魔力弾がAMFを抜けるまで…通り抜けるまでの間、本命を保護する魔力の膜を…

イメージ…集中

集中。集中。固まれ…固まれ…固まれ…！…！

裂帛の気迫が多重弾殻を完成させる。そして逃げ続けるガジェットに止めを刺さんがため、発射する。

「ヴァリアブルショートーーー！」

放された弾丸はガジェットに着弾するもAMFに阻まれる。しかし、本命を包んだ魔力を無効化する間にAMFを突き進み続け、そして…

本命の魔力弾はガジェットを貫通、奥に居たもう一体のガジェット

も貫いた。

s i d e o u t

s i d e なのは

本当は A A ランク魔導師の技術なんだけどな……みんな鍛えがいがあるよ。。。

模擬戦を眺めていたのははづくづく感心していた。だが、ここでイレギュラーな事態が発生した。

これでミシシヨンコンブリートのはずだが…

まだ5機残ってる!?

「シャーリー!この5機は!..?」

シャーリーも慌ててこうだ。

「なのはさん、これは・・・新型です。性能はもちろんですが、破壊しようとした職員が数名負傷しています!…!…!…なのはさん、このままだとバックス一人にエンカウントします!…!…」

新型…

機動六課直々に送り込んでくるなんて…それに性能が上がるとなると…フォワードのみんなが危ない。

「シャーリー…！　ヒンカウントまでの時間は…？」

もう三〇秒もありません…！　それに一人とも疲労します…！…！」

「まぢ…！　このままじゃあ怪我だけではすまない…」

ヒンカウント以前まで迫ったその時。なのはの眼にあるものが映る。

それは目覚めた紅き閃光だった。

「アセルス…！」

アセルス…！　今の状況分かってる…？

なのは隊長、シャーリーから情報は貰つてます。あの5機を止め
ればいいんじょ？

そう、新型だし、データは何とかするから…全力で破壊して…！

！

了解！！！！

現在のフォワードでは太刀打ちできない。疲労しているなら尚更で
ある。だから…紅き姫は全速力で、新型へと駆けて行つた。

s i d e o u t

s i d e アセルス

見えた。あそこにティアナとキャロがいる。一人とも疲弊しきつて
いるとのことだ。そんな状況では当然太刀打ちできない。

アセルス、AMFに気を付けて…魔力弾は無効化されるから…！

了解です。なのは隊長

AMF…一体どんなものなのか分からぬけど。。。。やるしかない
ね。

ティアナ！大丈夫？そつちに新型ガジェットが三体向かってる…！

！殺傷行動にでる恐れがあるから、そこで動かないで！！

あなた…アセルスなの？今まで何してたの？それより新型つて詳しいことは後で…！…ヒンカウント…！

軽い念話を終えるとついに、視界に捕捉する。

「見つけた！…さあ…いくよ、ルナ、ソル！」

二丁の相棒を構え、魔力弾を放ちながら距離を詰める。

だが、情報どおりAMFにより無効化される。それにはティアナが怒っていた気がするが…

やつぱりだめか…それなら

ルナ、ソルからロードせざそのまま詰めておいた魔力を打ち出す。

小気味良い音と共に2発発射される。トリガーもいつも通りの軽さだ：

放された圧縮された魔力弾は新型へと飛来…そしてAMFを貫通。どうやらこの方法はAMFにも通用するらしい。

それを見ていたティアナが驚愕していたが。一体目を撃破した時、向こうからスバルとエリオがやってくるのが見えた。だが今は二人

に話しかける暇もなく…

次、いくよーー！

モードブレイズ

形態を双剣へと変更する。だがそのまま斬つて壊すだけでは意味がない…だから

「はああああーー！」

気合いを込め、魔力を練る。少しずつだが、アセルスの周りに空気の渦が巻き始める。

イルドゥンに教えてもらったこの技、試す価値はありそうだ。

そして、跳躍。同時に風を纏つた魔力刃を飛ばす。

一刀烈風剣

一本の魔力刃は一瞬で目標に到達、4当分に綺麗に切り裂いた。

これを見たエリオもまた驚愕していた。

まだまだ！！！

キヤロやティアナがいるビルに攻撃しようとする新型が一体。私は躊躇なくスライディングと同時に蹴りあげ跳躍し、スーパープレックス（スティングDDT）。足で掴み、地面に叩き付けた。

ここまで3体を瞬時に破壊したの見るや否や、残りの2機が逃亡を図る。だがこちらも逃がすわけにはいかない。

まだ、こちらの術が通用するのかデータを取らなくては。

詠唱を開始。そして紅き法陣が展開される。

「光の焰よ、眼前の敵を焼き滅べせーーー！」

光の爆炎がガジェットを飲み込んでいく。だが、魔力の量や資質的なものか・・・中心にいた一体は破壊することができたが、最期の一体はからうじて難を逃れていた。

「まだまだ、威力に難ありか…さて、最期はと。。

モード変更

モードバスター

見晴らしの良いビルの屋上に陣取ると、バスターに変更し、狙撃に移る。

あの従騎士にも効果あつたんだからこいつらでも効果はあるはず。

「ルナ、徹甲弾形成」

「Armor Piercing」

銃口には、細長い魔力弾が形成される。

アセルスはスコープは使用しない。妖魔の血の恩恵を受けたため…必要がないのだ。いやでも見えてしまうのだから。

逃走経路を予測そして、トリガーを引く。精密射撃により、新型のコアと思われる部分を正確に徹甲弾は打ち抜いた。

「弾が全然見えなかつた…」

気付くとティアナとなのは隊長がいた。

「なのは隊長！ティアナ！！大丈夫でしたか？」

「それはこっちのセリフよアセルス！！！今まで何してたのよ…つてそれよりも今のガジェットって…」

確かに、あのガジェットの事は気になる。そこには隊長が割つてに入る。

まあまあ二人とも。今は六課に戻つてデータ解析と会議が大切だよ。それに模擬戦だつたし、みんな疲れも溜まつてると思つんだ。だからこの件については明日ということで…」

その通りだ。みんな疲れているのが見てとれる。それに私も、病み上がりだ。

「アセルスは事務仕事溜まつてるからやつてね！」

…えええつー？

ショックのあまりに落ち込む私。そう、事務仕事は苦手なのだ。疲れ果てた4人（アセルスの実力を見せられ落ち込み50%、疲労50%）と事務仕事に憂鬱になつている1人はとぼとぼと帰つて行くのであつた。

「アセルス！－あとで色々聞かせてもらうからね！－！」

「そうだよ、アセルス！！！」

「アセルスさん、色々教えてください！」

「私もお願いします！」

秘密にしていたことが明るみになると、いつの間にか分かつてい
たが……

また、治療ポット送りになるのが怖くなるアセルスだった。

一
方

「アセルスの馬鹿――――――」まで壊すことないでしょ「――――」

原因は、フラッシュファイア。

広域に広がる爆炎によつてこのビームが故障している。

「データは取れたけど、修理する側の身になつてよ-----！」

シャーリーの叫びがこだまするなか、第一回模擬戦は幕を閉じた。

だが新型のガジェットの件など、謎が残る一日となつた。

side out

紅姫（後書き）

いろいろとおかしな部分が多いのですが・・・田をつぶつてやつてください。

原作ブレイクが多くある...『気がする

次回も少々ブレイクします。

『見になつていただいた方には本当に申し訳』わざとませんでした。
また遅くとも頑張ります。

烈火（前書き）

今日は少々やりたい放題です…

烈火

最近、夢の中で私が私に話しかけてくるの。なんか不思議だね。
フェイトの日記より。

s i d e アセルス

「つ・・・かれ・・・た」

何故こんなに疲れているのか・・・それは前回の模擬戦での出来事が原因であるのは言うまでもない。

みんなには黙つてたからこうなることは分かつてたけど：

模擬戦のあと溜まりに溜まった書類を片付け、睡眠を取ろうとした時、FW4人に捉まり質問攻めにあつていた。

「だから、言つてるでしょ… 黙つてたのは悪かつたって

そういうしながらも1時間以上は捉まっていた。結果だけ言えば、今までのことを話した。妖魔についてはまだ触れていないが。

「最後に!私のことはアセルスでいいから。同じチームなんだし。

よろしくね、4人とも…／＼／＼

「…………？？？？」

4人がともに顔を赤らめる。 そつこの姫は少々天然なのだ。 だが本人はこの力に気が付いているわけもなく…

「みんな可笑しいな… よろしくね」

「よろしく… ／＼／」

そんなこんなで私はやつと睡眠を取る事ができた。

s i d e o u t

翌日

s i d e スバル

お父さん… 元気ですか？ 私は元気です。 毎日が大変だけど、 少しずつだけど強くなっていると思います。 もう少しして落ち着いたら帰りたいと思います。

～～～屋外訓練場～～～

「うわあああ…」

なんか間抜けな声を出しているがそれは目の前の出来事が原因である。

「ほらアセルス！そんなことじや魔力が持たないよーーもつと感じて、動いて！…！」

もの凄い数のシユーターがアセルスに降り注ぐ。きりもみ回転で避けたり、ビルを三角飛びで駆けあがったりでアセルスは何とか、避けつつ接近を試みる。だが…

「ほら、回避したこと考えてない！…！」

背後の建物からシユーターが飛び出してきた。

「くっ、ソル！…！」

〔 Protection 〕

シユーターを間一髪で防御することに成功した…が

背後にチャージを終えた、なのはさんがいた。

「いつの間に！？」

「アセルス、高速戦も私だつてできるんだよ。だからね…」

ものすごい笑みを浮かべるのは。しかしそれを見ているアセルス、そして4人は顔から汗を流す。

「まだまだ訓練不足だよーーーー！」

「D i v i n e B u s t e r」

万人が落ちるであろう頬笑みとともに放たれた零距離からの砲撃をアセルスが耐えられるわけもなく…

ビルを4棟突き抜けたところでおつかれアセルスが止まった。

「きや————ああ」

……この訓練何？

私達の早朝訓練の休憩中に行われていた、アセルスとのはさんの模擬戦。ただ模擬戦と言えるのか分からぬくらいのやられっぷりだった。

そこになのはがやつてくる。

「さあ、みんな！早朝訓練のラスト一本。みんな頑張れる？」

「はっ、はい！！！」

内心、みんな冷や汗なはずだ。そのせいか、みんなの顔が若干ひきつっている。

「よしーじゃあラスト一本！！！ショートインベージョンやるよ。5分間完全回避か、私に一本入れることができれば終了。みんな頑張ろーー！」

今さっきのことを思うととてもじやないけど、5分間避け続けるなんて無理だよ。それにティアも同じ意見だったみたい。

「みんな、聞くまでもないけど、なんとかして一発入れるわよ！！！目標2分以内。分かつ…ってアセルス、大丈夫なの？」

あつ、アセルス。あんだけブツ飛ばされてたのに…タフネスだね…。

「なんとか…でも私も避けきるの無理。だからティアの意見に賛成だ。それに借りは返さないとね。。。。」

ルナとソルを構え、笑みを浮かべるアセルスを見て全員は思つたに違いない。

凄く恐いよ…アセルス。

「ほら、話はいいまで、来るわよ……全員、散回、完全回避……」

「了解……！」

なのはせんのショーターをが飛来するのをかわきりに、ラスト一本がスタートした。

まずは、私とティアが仕掛ける。

ウイニングロード

蒼き魔力道が無尽に展開される。そして、私は滑走しなのはせんへと迫る。そしてちょうど反対側のビルからティアとの同時攻撃を行う。しかし、その攻撃はショーターによつて防がれた……ようになえた。

二人を正確にとらえた瞬間、霧散した。

「シリエット……やるね」

そう、そんな単純な攻撃は通用しない。そこでシルエットを用いて陽動をかけることにしたのだ。そして本命の私はといふと…

「でやあああ——」

頭上から一気に滑りおりそのまま殴りつける。だが相手はエースオブエースのなのはさんだ。簡単に防がれてしまった。

「うん、スバルもティアナも悪くないよ。二人ともいいコンビネーションだね」

褒めてもらつたのは嬉しい…がなにかに気付き、とつそに後ろに飛び退く。そこにはシルエットを攻撃していたシユーターが先ほどいた場所を高速で通過していた。

いつたん後退して、なんとか機会を伺わなきや…

ティア、援護お願い！

スバル、出すぎよ……」」ちの身にもなつてよね……

シユーターに追われるスバルを援護すべく、カートリッジをロードしようとしたその時だった。

「ジャムつたー?」」んなときこ

急いで薬莢を取りだし、新しいカートリッジと交換し、すぐに撃墜

する。ただスバルが「援護まだ——??」って叫んでいたけど氣にしない。

「ごめん、こつちは失敗しちゃった。エリオ、キャロ、アセルス、後は任せるわよ

3人ともお願ひね！！

わかつたよ

「エリオ、キャロ、やるよー！」

「はい、アセルスさん」

「やりましょう」

side out

side アセルス

手はずはこうだ。アセルスがなのはさんを追い込み、キャロがエリオにブースト、そのままエリオが突撃する。うん、なんて簡単なんだろう。

「アセルスさん……あの……」

Hリオが凄く心配そうに話しかけてくる。 そんなに心配かな?

「え、 貴女からでてこむオーラが恐いんです

「一人とも、 スバルとティアナが撃墜される前にけりをつけよ。
私がひきつけるから、 後はお願ひ」

「なんとか頑張ります」

「了解です」

やつぱり緊張してゐみたい……Hリオやキャロなんて戦いつな年齢
じゃなこよ……

貴女にビビってるんです。

なのはせんが接近してくるまで、 時間がない。 ……そつだ……！

首にかけてある紫紺のペンダントを外し、 キャロにかけてあげる。

「これ……？」

キャロが不思議そうに首を傾げている……うん、可愛いよ、キャロ。

「向こうの世界で作つてもらつた物なんだけど、キャロにあげるよ。お守り代わりに持つてくれたらうれしいな……」

かけてもらつた、ネックレスを見て、少し考えた後、服の内側にしました。

「アセルスさん！大事にしますね！――」

満面の笑みを浮かべて、頭を下げて感謝していると、そこに、シユターが割つて入つてきた。

「へえー、そんなことじつてる余裕あるんだ……」

びくつ

死の宣告が突然やつてきたかのように感じじるこの一言。しかし、俄然やる気な方がここに一人。そつ、アセルスである。

「わざの借りは返せませんよ……」

回避したシユーターをすぐさま撃墜すると、一気に距離を詰めていった。それを見ていた二人はどうと…

「あははは・・・・」

笑っていた。

二人は予め打ち合わせしたポイントへ移動することとなつた。ショーターに気を配りながら移動になると思われたが、完全にアセルスさんに引きつけられた形になつていて、無事に移動することができた。

そのころ…

「シュー――ト――」

ざつと見て20はあるであろうシューターがアセルスを撃墜せんがために、飛来する。

さつきは回避して失敗したけど、次は全部撃ち落とす！！！

試してみたいものがあるし、みんなの為にも絶対成功させる。

／＼＼昨日／＼＼

「あつ、アセルス！ちよづいことこみに！――」

廊下を歩いていると、はやてに呼び止められた。

「せやー、どうしたの？」

「あんな、このゲームやってみてはしこんやけど」

そつこつて渡されたのは、TOGであった。

「私達の世界で作られたやつなんやけどな、面白くて、みんなに勧めてるんよ……なんか私にそつくりな声のキャラもおつてな。なんか親身になつてしまつてな……ああ弟君、健氣やな~」「

「はあ……まあ嫌いじゃないんで時間があればやつてみます……」

「弟君はアセルスの参考になるんやないかな?まあ感想よひしあつ!~」

そんなこんなで、実は結構はまつてしまい、やりこんでいた。

~~~~~

「ルナ、ソル、いくよ……」

紅き法陣を展開すると、テバイスが焰に包まれる。

「真似したら意外にできるだじやないかってね……」

飛来するショーターを確認すると、一種のフィールドを開く。

周りに被害を広げないため、そして相手の動きを封じ込めるため。

「セリフも真似してみよっかな」

そうして、フィールド内に飛び込み、カートリッジをロードする。勢いよく、空薬莢が一発地面に落ちた…そして

「派手に踊れ！…！」

ルナとソルから無数の魔力弾を打ち出す。一歩も動くことなく、焰を纏う弾丸が次々にショーターを落としていく。

そして最後のショーターを撃墜、フィールドが硝子のようになに砕け散つた。

「アンスタンヴァルス」

辺りはただ焼け野原のようになってしまった。

また、怒られる…

「うなつたら…

「なのはさんにハツ当たりだ――――」

じんでもない発言と共に、モードをブレイズへと変更し、なのはさんに斬りかかる。

「はああああ――」

ぎしげしげしげしげ

激しい魔力のぶつかり合いにより、火花のように魔力が飛び散つていた。

「アセルス、また強くなつたね！」

「また、私が怒られるじゃないですか――――――！」

「まあまあ、アセルスが悪いんだし」

「なのはさんの馬鹿――――――！」

縦に切りつけ、回転と同時になぜ扱つよう切りつけた。

## 二刀十字斬

だが、やはり最強といわれるシールドである。ただ押し込む程度にしかならなかつた。

「ハツ当たりは駄目だよ、アセルス！！」

なんだかんだで、またチャージを終えている。やばい…

〔D i v i n e B u s t e r〕

またしても、桃色の巨大な魔力に飲まれていった。

そこには荒廃した土地しか残らなかつた。

「ふう、やり過ぎやつたかな…！？」

〔W a r C o n g〕

レイジングハートの警告とともに、焰を纏つた、矢が飛んできた。

「これは、避けないと、抜かれちゃうな……」

ギリギリ、回避すると、飛来した方向を見る。そこには先ほどの戦つていたアセルスがいた。

「シリエット……一回使つとは思わなかつたよ」

ティアナがぎりぎり間に合つたようだ、上手く事が進んでいく。あとは、もう少しでエリオ達のところに追い来る！！

現在、ルナとソルは双刃の状態になつていて

モードアサルト

「シグナムさんと弟君を参考にやつてみたけど、うまくいくとは思わなかつたよ……」

双刃は『』のようになつていて、魔力の弦によつて今すぐこでも、引くことができる。

「これで、私の役目は最期だよ。はああああ

右手に魔力を集中させる、焰の矢を完成させる。

弦を引き、そして放つ。

「ヴァンフレーシュ」

弟君の技をそのまま真似してみたけど、意外に上手くいくもんだね。それに、ソルとルナがこんなに高性能だなんて…感謝しなきや。

回避したばかりの、なのはさん曰がけて、さうに、もう一発撃ち込む。予想通り、なのはさんは回避し、予定通りのポイントまで、誘導できた。

後は頼むよ…二人とも…

side out

side ハリオ

「来たつ…キヤロ…お願い」

「我が『ひづは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を』

### 〔Boost up Acceleration〕

詠唱が完了すると同時にストラーダから推進力を得て突撃を開始する。アセルスさんが引きつけてくれたおかげで、まだこっちに気付いてない。

「でやああああ――――!――!」

完全に不意を突いた形となつて、なのはさんに激突することとなつた。しかし……隊長の肩書、ましては「エースオブエース」は伊達ではない。

ほぼ無意識に近い状態で、防御に成功していた。

なんとかシールドを突破しようとしたがそのまま数秒間の均衡が続いた。その後、爆発が起きた。

「うわ――――あ――――」

よほどの衝撃だったのだろうか、体勢を立て直すが、後ろへ滑ってしまった。

タイミングは完璧だったのに……まさか防がれるなんて……

土煙でまだなのせんの姿は確認できていない。ただ油断せずに前をただじっと見ていた。

「リオ！」

外した？

アセルスさんやティアナさんからの念話も来る…そして土煙の向こうになるのはさんの姿が見えた。

「なつ、無傷！？」

驚くしかなかつた。完全に不意打ちで、キャロの補助も使ってたのに…

「//シションコンプレー。リオ、そんな顔しないのーちゃんど、シールドを抜けてたよ。ほり、ーー。破れてるでしょ…」

なのはさんが指し示す場所をよく見てみると、穴が開いていた。よかつた…

「やつた——」

みんなが集まっていた。『いや、無事に早朝訓練を終える』  
とがきてホッとしているようだ。

「はー、みんなお疲れさま。みんな動きも少しずつよくなつてきて  
るよ」

機動六課の制服に着替えたなのはせんと一緒に反省会を開始する。  
みんな色々と感じること多かったようだ。話の中には、時にフロ  
ードが鳴いた。

「フロード、ビーフしたの？」

キヤロが疑問に思つたようで、フロードに聞いてみた。

「セツコレバ……」

「なにか焦げたよつた……」

ティアナさんがきょろきょろ周りを見渡していくと、何かに気付いたようだ。

「スバル、あんたのローラー！」

みんなが視線を集めると、そこには明らかにショートして煙をあげ  
るローラーがあつた。

「うわー無茶をせすわらやつたかな」

「オーバーヒートかな？後でメンテスタッフに見てもいいわ」

「はい……」

スバルさん、ちょっと落ち込んでるかな…

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい?」

「はい、騙し騙しです…」

「どうやら一人ともデバイスにガタが来ていたようだ。だが二人とも丁寧に手入れをしてきたためか、ここまでもつたのだろう。

「そろそろ、みんな訓練にも慣れてきたようだし…うん、決めた」

新デバイスに切り替える時だね。

「みんな、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えするね。」

「新…デバイス?」

「まあまあ…それは、後で実際に見てもうから。いつたん着替えてロビーに集合ね!」

「はい…！」

後ろを振り返れば焦土と化した人工島があつた。そこには泣くシャーリーの姿があつたとか。

side out

side アセルス

隊舎に帰つてゐる最中に、黒いスポーツカーに乗つたフェイトとはやてを見た。話によると、教会方面でカリムと話があるようだ。ちなみにカリムとは一応だが面識はある。

「ふう……シャーリーは頼んであつたもの作つてくれてるかな？」

独り言を終えると、制服に着替えロビーへと移動した。

ロビーで集合を終えると、そのままデバイスルームへと移動した。

「これが、私達のデバイス……」

宝石、そしてカードが浮いている。

「そり——で——す——！」

シャーリー……元気だね、相変わらず……つてなんで睨むの……？

「かなりの人に協力してもらいましたよ！そのぶんみんないい子に仕上がってますよ」

「ストラーダとケリュケイオンは変化なしかな？」

「やうなのかな？？」

エリオとキャロは自分たちのデバイスみて率直な感想を述べる。しかしその意見は違いますですよと言わんばかりの声が聞こえた。はい、リン。どうれ。

「セリフ取らないでくださいよ、アセルスさん！！」

「ふんふん怒りながらも、何故か可愛さしかみえない、リン。うん、可愛い。

「もう…では説明しますですよ。以前のお二人のデバイスは最低限のフレームと、機能しか持たせていいなかつたんです。でも今回は色々な内面を強化してるわけですよ。それに形状が変わらない分扱いやすいと思いますです。」

「やうだつたんだ…」

二人とも凄く驚いてる。私もそれを聞いたらびっくりするよ。

それぞれのデバイスを一度リンが受け取ると、リンからの助言を聞くこととなつた。

「」の子たちはまだみんな生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められて、いっぱい時間をかけてやつと完成したです。」

デバイスをそれぞれの持ち主へと優しく返していく。

「ただの道具や思わないで、大切に。でも、性能の限界まで思いつき使つてあげて欲しいです」

わかつてゐよ。リン。みんなだつて分かつてゐる。

周りを見れば、みんなデバイスを優しくも決意を込めて握るのだつた。

「やつぞう、この子たちには何段階かのリミッターをかけてあるの。だから初期では今までとはあまり変わらないかな」

「みんなが確実に扱えるようになつたら、私や、フロイト隊長やリンク、シャーリーの判断で解除していくから」

「ちよつと一緒にレベルアップしていく感じですね」

「ちなみに、アセルスのデバイスにも掛かってるからね！」

初めて聞いたんですけど…

「アセルスのはちょっと特別でね…解除はかなり難しいと思つけど、アセルスが成長してくれば、なんとか外せると思つよ」

はあ…そうだったんだ。

そこにティアナが思い出したかのよう尋ねた。

「出力リミッターでこうと、なのはさん達にもかかってますよね？」

「私達はデバイスだけじゃなくて、本人にもだけど」

私は知っていたけど、それを知らなかつたFW4人は愕然としている。無理もないけど。

「どうやら決まり」との為にリミッターが掛けられているとのことらしい。ただそんなことして何の意味があるのか私には理解できない。

「解除にも色々条件が厳しくてね……はあ……」

絶賛溜め息の中、斬り裂くよつてアラートが鳴り響く。

「一級警戒体制！？」

「グリフィス君」

モニターに現れたと同時に説明が始まる。

「教会の方から出動命令です」

「…ひらひらして。なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、聞こえてる？」

返事を返しすぐに状況を確認する。

どうやらレリックらしい物が見つかったらしい。山岳リニアレールで移動中に、ガジェットに襲われた模様。車両制御もガジェットにより奪われている。

「新型も出てくるかもしだれん。それに数もなかなかや。ハードな初戦になるけど、いけるか？」

「大丈夫！」「大丈夫だよ」

「みんなもいけるか？」

「はい！……」

声を揃え判事を返す。

「現場はなのは、フェイト両隊長に、ロングアーチは私が戻るまでは、グリフィス君に指揮権を委ねます」

「それじゃ、機動六課FW部隊出動」

「はい！……」

みんなが部屋を出ていくなか、私はシャーリーに呼び止められた。

「はい、頼まれていたもの。白薔薇姫とイルドゥンが徹夜で完成させてくれたの」

シャーリーからカードとマガジンを受け取る。

「「J」のマガジンに入つてるのは・・・」

「分かつてゐる。」Jたちの世界は使用は駄目なんでしょ。大丈夫」

受け取つたカードとマガジンを収納すると、はやてから通信が入る。

「アセルス、今日は別行動や。白薔薇姫とイルドゥンの三人で、山岳にある廃墟の調査をお願いしたいんや」

一瞬、何故か聞こうとしたが、表情をみるかぎりなにがあるようだ。

「はやて、その裏は・・・」

「さすがやな。実は妖魔がまた現れる可能性があるんよ。最近微量ながらレーダーに反応が見られてる。だから方向も一緒やから調査を頼もうかと思つてお願いしたいんよ」

「妖魔…まだ諦めていないのか…」

高ぶる感情を抑え、返事を返す。

「分かつた、すぐに行く」

「頼むで、アセルス！」

通信を終えると後ろには一人が待つていた。

「久しぶりの実戦だな、アセルス」

「アセルス様、さあ行きましょう」

一緒に戦うことができなかつた一人と一緒に戦うことができぬ。うん、頑張ろう。そして成長ことを認めさせないとね。

「行くよ!」一人とも

そして、静かに山岳の廃墟へと向かうのだった。

side out

「はやて部隊長…一人を行かせて良かつたのですか?」

「二人がどうしてもつて言うから仕方なかつたんや。それに条件で、自由にさせるつて約束してしもつたからな…」

「ですが、あの二人はもう…魔法すら使えないんですよ…」

「分かつてるよ…でもな二人ともみすみす倒れるわけないよ。一人とも…強いんやからな…」

不安は拭い切れない。しかしそれでも一人は信用して送り出すしかなかつた。

side out

side 白薔薇姫

アセルス様と一緒に現地での任務…あの日いらい、裏方として支えて来ましたが、今回は一緒に居ることができます。

「アセルス様、もうすぐ目的の廃墟です」

ファーストアラートの後、私達ははやて様に頼まれていた、山岳の廃墟へと向かっていました。

「アセルス様、イルドゥン、なにか感じませんか?」

「ああ、これはそうですね」

「うん、妖魔だね…」

目前に迫った、廃墟から妖魔の気配が感じられる。水の従騎士と戦つて以来、妖魔が現れたことはなかつたが、ここ最近になつてまた活動を開始したようだ。

アセルス様、突入の先陣お願いできますか?

わかつたよ、フォローお願ひ

任せおけ

ルナとソルを構え、入口に張り付き、中の様子を伺う。しかし、ここにきてから、何も感じられなくなつた。

変だ…

一人とも、行くよ。3・2・1

3カウントと同時に中に突入し、索敵を行つもすぐには、もぬけのからゆうだ。

じゅりく中を捜すと、一台のパソコンのようなものがあった。

「一人とも…これは…？」

そこにやってきた白薔薇が操作を開始する。どうやらじゅりくこまけてから慣れたようだ。もちろん文字も読めるようになつていて

「データはほとんど消されてますね…」

白薔薇が手際よくデータを解析している。そこに一つだけ残つていたデータを見つけた。

「つー? アセルス様、どうやらレリックを狙つているのは、ガジエットだけではないかもしません」

残つていた、データをこじらりの端末に転送してくれた。

データを見てみると、どうやら何者かが妖魔と接触している可能性があることが分かった。

「アセルス、白薔薇姫様、どうやら急ぐ必要がありそうだ。急いで  
リニアレールへ向かう」

「そうだね、みんなに妖魔の相手は…急いで…」

三人は頷くとすぐに、廃墟から出る…しかし…

3…2…1…0…

轟音とともに廃墟は爆発したのだった。

そしてそれを遠くから眺める影が。

「くつくつ…餌に直ぐに食いついてくるとは…愚かな」

その影はそのままリニアレールの方へと姿を消したのだった。

side out

烈火（後書き）

やつてみたかつたことをやつてみました。  
ただテイルズはこれからは使わない…と思います。

## 決意（前書き）

ほぼ内容は変わっていませんが、セリフが少し変わっています。

## 決意

s.i.d.e なのは

現在、ヘリに乗つて、リニアレールへと向かつてゐる。FW4人とリインと私。フェイトちゃんは現在、こちらにむかつてゐる。今回、アセルスは別任務であることは伝えてある。

「新デバイス…ぶつつけ本番になつちゃつたけど、訓練通りで大丈夫だから」

やはり不安は隠せないようだ。機動六課としての初任務であり、エリオ、キャロにおいては、人生初だから尚更だ。

「はい」「頑張ります」

二人は返事を返すが少しの緊張感は感じられる。

ただ、エリオとキャロはまだ表情が硬い。

それを察してか、リインが声をかけてくれる。

「エリオ、キャロ、フリードもしつかりですよー!」

「はい」

二人とも少しばは緊張感が解けたようだ。

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがいるから、おつかなびつ

「…」

「…」

うん、なんとか大丈夫そう。

ふと、キャロを見てみると、ペンドントを握っている。

それにヒリオが気付いたようだ。

「キャロ、それは？」

「アセルスさんから貰つたんですね。お守り代わりにって」

紫紺のペンドントをギュッと握るキャロ。

「…」

「うん、頑張り、キャロ…」

うん、一人とも、やつと打ち解けてきたみたい。れいと、どうやら私達の出番みたい。

「ヴァイス君、私とフェイト隊長で空を抑えるから」

「やつと出番が…って了解つす。なのはさんお願ひしますか」

後方のハッチを開放する。

「みんな、先に出るけど、みんなズバッといつたりやおつー。」

「「はー」」

そして、キャロの元に

「遠くに居ても通信で繋がってる。一人じゃないから。みんな、ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法は、みんなを守つてあげられる優しくて、強い力なんだから……ね」

改めて、FWを確認すると、そのままハツチから降下。空中でバリアジャケットを展開すると、そのままガジェット殲滅へと向かった。

side out

side FW

「それでは、改めて任務を確認するです。ガジェットを逃走させずに破壊すること、そしてレリックを安全に確保することですよ」

「スターズ分隊、ライトニング分隊はそれぞれ車両前後から両田の重要貨物室を囲んでください。先に到達したほうが確保するですよ」

「私も現場に降りて、管制を担当します」

「私も現場に降りて、管制を担当します」

そのころ、遅れてきたフュイトとなのはが合流し、高速戦が展開さ

れている。一人の戦う姿は正しく戦乙女といったところだろう。

「さて、新人ども、隊長さん達が空を抑えてくれているおかげで、無事安全に降下ポイントに到着だ。準備はいいか？」

「はい」「大丈夫です」

「それじゃあ、がんばってこいー！」

スバルとティアナがハツチに向かう。一人は実戦は初めてではない分、落ち着いている。

「緊張しないでね、下で待ってるから。スターZ03スバル・ナカジマ」

「二人とも、先に行くわよ。スターZ04ティアナ・ランスター」

「「行きます」

同時に降下を開始、そしてバリアジャケットを展開する。

「次、ライトニング。気を付けてな！」

「「はい」

いつの間にか、二人とも手をつないでいる。やはり不安なんだろう。

「行こう、ライトニング。ヨリオ・モンティアル

「うそ、エリオ君、ライトニング〇四キャラ・ル・ルシドとフリー  
ドリビ」

「「行きますーー！」」

そして降下すると同時にバリーアジャケットを展開し、車両に降下する。

「うわーこれって、隊長のバリアジャケット?」

「そりです、参考に隊長さんたちを参考にしてます。性能も凄いん  
ですよー！」

バリアジャケットを見て、喜んでいると、目標にエンゲージ。戦闘が開始された。

リニアレールの天井が一部膨れ上がる。そこからエネルギー弾が飛び出してくる。

気持ちを切り替え、ティアナはクロスマーティアスミラージュを構える。そして魔力弾を現れたガジェットに発射する。

『シル――ト――』

着弾後、すぐさまガジェットは爆破、破壊される。

その穴を使い車両内にスバルが飛びこむ。

侵入直後、ガジェット目がけ右手を振り下ろす。

メキメキと装甲を貫通し、ガジェットは破壊される。さうに奥に居たガジェットを破壊するべく、接近を試みる。ガジェットはケーブルの様なもので攻撃をしてくるが、持ち前の機動力でかわしていき、回し蹴りで、一体撃破、放たれたエネルギー弾をしゃがんで回避すると、その勢いで、壁を滑り…

「リボルバー・ショート…！」

ガジェットは破壊できたが、車両内にこれだけスピードを出せば、当然外に飛び出してしまう。

「うわあああ

空中に飛び出す形になつたが、ウイングロードが展開され、無事に天井へ帰還する。

「マジハキャリバーってかなり凄い？フーングリップとか加速とか…」

「私はあなたをより強く、速く走らせるために作りだされましたか

「う」

「違うよ、お前はね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ。そんな」と言わないの……

「アの部分を眺めながら答える。

「やうなんですか？同じ感じますが」

「違うもんだよ、色々とね

〔考えておきます〕

そんなやつたりをしてると、煙が上がる。

ティアナ、どうですか？

駄目です、ケーブル破壊効果なしです

ティアナが停止を試みたが、効果がなかつたようだ。リインは少し  
考え、命令を飛ばす。

車両の停止は私が引受けます。ティアナはスバルと合流してく  
ださいです

了解

返事を返すとトウーハンドからワントーンハンドに切り替える。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、魔力弾形成のサポートも  
してくれる」

「不要でしたか？」

「あんたみたいな優秀な子に頼り過ぎると、良くないんだけど、で  
も実戦では助かる」

「光榮です」

一方、ライトニングはガジェットを無事破壊しながら進んでいると、大型のガジェットと遭遇する。

アームを使い、二人に攻撃を行つ。なんとか回避し、キャロはフリードに命じる。

「フリード、ブラストフレア……」

火炎弾がフリードから放たれる。しかし新型はアームで易々と弾く。

「うおおおおおお……！」

魔力を纏つたストラーダをで斬りかかる。しかし、傷一つつけることはできなかつた。

「硬い……ぐう……」

キャロが援護しようと魔法陣を展開する。しかし急に魔方陣が消えていく。

「AMF……」んな遠くまで……」

しかし、時間は待ってはくれない。エリオが押され始めている。

二人とも、大丈夫！？

ティアナとスバルから同時に念話が飛ぶ。援護に行きたいのは山々なのだが、ガジェットに押されている。一いちも手が離せないのだ。

少し目を離しているとエリオがアームに掴まれている。

「うわあーーあああ

苦しそうな声を上げるエリオ。だが声は急に聞こえなくなる。気絶してしまったようだ。ガジェットは無慈悲にも意識を失ったエリオを崖へと投げ捨てた。

「エリオ君！――！」

それを見たキャロは同時に崖へと飛び出す。それを見たスバルとティアナは叫んでいた。だがここでも慌ててはいられない人物が一人。なのはとキャロだ。

大丈夫だよ。新型から離れれば、AMFの効果が薄くなる。つまり魔法が使えるよ。キャロ、自信もつていいんだよ。みんなを守る、優しい力なんだから

なのはの通信を聞いていたかは分からない。だがキャロの眼は覚悟を決めた眼だ。

守りたい。私に笑いかけてくれる人たちを、自分の力で…守りたい

!!

エリオに追いつき手を掴む。

ケリュケイオンが光それに答える。

「フリード、今まで不自由な思いをさせて『めんね。大丈夫、ちやんと制御してみせるから』

その決意を無駄にしないよ！」…フリードも答える。

「ああ……」

エリオモロの間になんとか意識を持ち直したようだ。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり天を駆けよ来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！…」

魔方陣が展開され、一瞬光が強くなる。そこに現れたのは巨大な竜だった。そう、これこそがフリードの真の姿である。

「オオオオオオオ…」

咆哮を上げると、新型を破壊すべく、リニアレールへと戻つて行く。

「フリード・ブラストレイ」

先ほどまでは大きさがまるで違う。巨大な火炎弾は新型を飲み込んでいく。しかし、まだ破壊するまでにはいかない。しかしダメージは確実に見えている。

「キャロー、あいつは僕がやるよー。」

「うん……エリオ君……」

キヤロが詠唱を開始する。

「我が乞ひは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

せりて詠唱は続く

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

「ツインブースト。スラッシュ & ストライク」

詠唱が終わるとケリュケイオンからストラーダに魔力が流れ込む。

「はああああ！」

一気に、間合いを詰めると、ストラーダを突き刺す。強化に加え、フリードによつて装甲がもうくなつていた。

「でええええやあああ！」

下から上に切り上げるように、ストラーダを振り上げる。見事に真っ二つに切り裂かれた新型はエリオの背後で爆散したのだった。

無事に任務を終えることができた。レリックも無事に回収することことができた。

現在、ライトニング分隊が引き継ぎのため残っている。

「二人とも、怪我はなかつた？」

フェイドがエリオとキャロを抱きしめる。

そんなこんなで、引き継いでいる最中だつた。

まがまがしいフィールドが形成される。

「これは・・・」

フェイドは氣付いた様だ。これは、あの試験の日以来見ていなかつたが…

幼いライトニングを引き連れ、戦いに臨まなくていけなくなつた。

「二人は絶対守るから」

どこかの部屋でこれを眺める者がいた。

「さあ、見せてもらおうか。『の残骸』へへへへへ

s  
i  
d  
e

o  
u  
t

## 決意（後書き）

「つまべ話」を回収されるのか…

心配ですが、頑張ります。

よろしければ、感想やアドバイスお願いします。

## 悪戯（前書き）

閲覧前に一言

作者の独断と偏見がたっぷり詰まっています。ご注意ください。

## 悪戯

s.i.d.e フェイト

リーアレールガジェット襲撃の事後引き継ぎの最中、それは突如として訪れた。

ぞくぞくするような嫌悪感。これと同時に、異質のフィールドが形成された。

「フリオ、キャロー！ 気を付けて」

「ヒタイトさん、これは・・・」

「フリードも怖がつてます」

二人とも、まだ妖魔のことについての知識は、ほとんど無いと言つても間違ひではない。ましてや、二人は今日が初陣でもあり、激戦があつたばかりだ。

「私も戦つたことないけど……やるしかないね……」

決意を固めると、愛機のバルディッシュを構える。先ほどから通信を試みるが連絡が付かないこともこの警戒の要因でもある。

増援はなし…

数分経つただろうか… 実際にはほんの数十秒だらう。しかし、護りながら戦うことほど厳しいものはない。二人をかばいつつ、周囲に警戒を払っているときだった。

これが我の標的か…くつくつ…

「誰だ！？」

獵奇的な声に瞬時に反応する。直接頭に響くよつて、この声は聞こえるのだ。

！？

不意に後ろを振り向くが何も居ない。が…

どこのを見ている… Fの残骸

正面から杖のよつなものが振り下さられる。

ぶうんん

空気を切り裂く音と共に、頭部田がけて正確に振り下さりしきでいる。

「はあああ

そこにはもうフェイトはいなかつた。杖を振りおろしてきた何かの背後に回り込み、バルディッシュを振り切っていた。

しかし…

手ごたえはあるでなかつた。

「幻影！？」

「フェイトさん、後ろです！！」

エリオが対象を確認すると、ストラーダを手に突撃する。しかし、これもまた手ごたえがなかつた。

「！？、キャロ、後ろ！－」

すでに対象はキャロの頭部田がけ杖を振り下ろしている。

ブレインクラッシュ

当たつてしまえば即死といつても過言ではない。実際、キャロは避けることは不得意であり、異端の存在に飲まれていた。

「あやあああ

## 【Project】

悲鳴と同時に、ケリュケイオンがプロジェクトFにより防御を図る。  
ぞしごいいい

訓練のおかげだらう。咄嗟の防御で、即死は免れた。

「キヤ口から離れなさい」

自分の持ちうる可能な限りの速度で突撃するが、それに気付いたのか、キヤ口から離れ、距離を置く。

これはこれは…へつへつへつ

紹介が遅れましたね。私は森の従騎士と呼ばれる者。以後、お見知りおきを…いや、ここではよつなりですかね？

「妖魔！…一体何が狙いなの？」

それは、貴女とそここの坊やですよ…プロジェクトFの残骸達。私も、

異界の技術には興味がありましてね…生体サンプルとして捕えよつ  
と思いましてね。それに…邪魔者は消しておきましたよ。

ぱちん

森の従騎士が指を鳴らすと、アセルス達が向かつた廃墟が爆発する  
映像が映し出される。

餌を撒けば必ず食いつくと思っていましたよ。貴女方の司令官も大  
したことないですね…

「はやてを馬鹿にするな…！…それにアセルス達も生きてる。絶対  
に」

怒りの形相で、従騎士に突撃する。しかし距離が詰まるにつれて、  
身体が重くなる。

「まさか… A M F…？」

ほう、さすがですね…しかし、こんなもので、ここまで抑え込める  
とは。あの科学者も大したものですね…

おどけたように、話しかけるこの妖魔に怒りしか感じない。ただ、  
親友を侮辱したこと、Hリオや私のことについて…許せない。

貴女にも人並みの感情があつたんですね。いやいや、これは驚きで

すよ…

「貴様、黙れ！…！」

久しぶりに激昂している。いついらだつたか、この感情に支配されたのは。ただ、もうこいつを許すわけにはいかない。

「バルディッシュ、殺傷設定に」

「Y e s , s i r 」

「フュイトさん…」

エリオから声が聞こえる。こんな私を見たことが無かつたからかな…おびえてる。

「大丈夫。守るから、二人とも…」

二人に笑みを浮かべると、再び、怒りの形相へと変える。そして魔力を込めて、愛機を振り切る。

〔 H a k e n S l a s h 〕

魔力斬撃が徒騎士へと迫る。だが、目前で何かに接触し、爆散。

「A M Fがこんなに強いなんて…ん！？」

周囲に何か粉のようなものが漂っている。そしてバリアジャケットに粉のようなものが触ると、触れた部分が溶けていた。

もう少し前に出ていれば、簡単に楽になれたものを…本当に貴女は運がいい。

「毒か…どこまで卑怯なんだ、貴様は！…！」

二度、三度、バルティッシュを振るい、斬撃を飛ばすも、すべて直前で消えてしまっている。

無駄ですよ…我の胞子には通用しない…

「毒、そして魔力を打ち消すこの能力…AMF！？」

ほつ、気付いたようですね…だがもう遅いんですよ…

「気が付けば」この空間の九割は胞子で満たされていた。じりやがら、爆散したときに撒き散らしていたようだ。

大丈夫、生け捕りにしたいので、殺しませんよ…ただ、生きてると

は言える状態で留まるかは分かりませんがね。

くすり…

「勝つたつもりなのかな?これくらいで」

胞子に気付いたときから、すでに時間は稼いでいた。そう、焰を扱う竜を召喚するために。

「フュイトさん!お待たせしました。フリード、ブラストレイ!!」

「!

おおおおおおお…

咆哮と共に、火球が放たれる。フュイトは気付いていた。焰ならば、この状況を開拓できるはずだ。

フリードは首を振りながら広範囲に焰を撒き散らし、胞子を焼却していく。

フェイトの予想通り、焰には弱かつたようだ。

おやおや、そんなに苦しみたいのですか?くつくつ…ほんとに物好きな方々だ。

「おしゃべりはそこまでだ

[ S o n . T i M e ]

「一つの雷鳴が両サイドから同時に斬りかかる。そつ完全に不意を付いた形だ。

「消えなさいーー！」

エリオと私は同時に【デバイスを振り切る】…しかし、急に身体が動かなくなってしまった。

「エリオーーー！」

よく見てみると、網に絡まつたようになつていて、当然、エリオも同じ状態だ。

エクトプラズマネット

切り札は隠しておくものですよ…

やられた…警戒が足りなかった。ましてや「」まで策士じみた相手ならなおさらだ…

そしてこの後悔は最悪な形を迎えることとなる。

「うめで活きがいいと我也苦労する……ナニでだ。

狂氣じみた声がこの空間を支配する。途轍もなく嫌な予感がする。

貴女の心を破壊せてもう二度と

もあらん、少年……君もだよ。ただ、君には働いてもうつがね

従騎士は笑いを浮かべながら一人に近づいてくる。もううんキャラ  
もネットに捕らわれている。

そして、二人の横に達すると……頭に手を触れる……

「く……はあはあ……くはあああは……

切り札ってのは一枚だけとは限らないんですよ——

「やめろ……触るな……！？」やあああああ――――――

手が触れた瞬間、一人が急に苦しむように声をあげたのだった。

side out

side #ヤロ

「フロイトさん、ヒリオ君――」

二人が急に苦しみ、叫んでいるのがよく見える。あの妖魔の手が触れたときからこうなつてしているのだ。

貴女は、さらに苦しそうでぐだぐだ……貴女の犯してきた罪と後悔すべき過去に捕らわれて……

「こやあああ、やめて……ああああ

」

「フロイトさん――――」

声は聞こえていない、ただフロイトはかなり苦しそうであるだけ。

そして、同様に……リオも苦しみでいる。

「嫌だ……僕は……あああああ……」

一人ともがかなり苦しんでいる。そう肉体的に追い込めないなら、精神面から……そう考えたのだ。

「いや、来ないで……来ないで……」

「私の方にまづくつと近づいてくる……

足音はしない……まづくつ……まづくつと……近づいてくる……

「いや、来ないで……来ないで……」

錯乱している、キャラ。茫然フリーズは口を封じられている。

貴女には興味はないので……  
壊れて死んでください。

そう言って、頭に手を触れてくる。そうこれが従騎士のもつ一枚の切り札。

### カウンターフィア

心の闇に漬け込み、錯乱させていくこの能力。一人が苦しんでいるのはこれが原因である。

さあ……逝きなさい……

しかし、何も起こらない。キャロは何も苦しんでいない。

馬鹿な……ヒューマン如きに破られるはずが……

相当な自信があつたのか、または人間如きに破られたことがショックだつたのか、少し狼狽している。そして、これを防いだ原因が明らかとなる。

「温かい…」

キャロが呟くと、胸のペンドントが光っている。それは朝、アセルスからもらつたものだつた。

何故、それを・・・命の結晶を何故貴様が…

アセルスさんにもらつたペンドント。これのおかげで助かっているらしい。

トウテツパターン。まさしく命の結晶

どうやら、貴女にはこの方法は通用しないようだ・・・では、こういつのはどうでしょうか？

急に、身体が自由になる。急に開放されたことに、不信感を覚えつつ何とかして助け出す方法を考えていると・・・

「エリオ君！？」

エリオもまた開放される。そして、ゆっくりとこちらに向かってきている。

「エリオ君、大丈夫！？」

近づいて様子を伺おうとした時だつた。ストラーダが真一文字に振り扱われる。

【Protection】

またしてもケリュケイオンに助けられる形になつた。が・・・エリオは間違なく攻撃してきた。

「エリオ君！？私だよ、キャロだよ！？分からぬの！？」

必死に呼びかけるも返事がない。眼も光が感じられない・・・

「操りれてるの・・・！」

その通りですよ……ははははは・・・ぐうぐううう・・・

あの小娘を殺りなさい。命令ですよ。

「はい・・・」

生氣のない声で妖魔に対し返事を返すエリオ。完全に心が支配されているようだ。

「エリオ君、しつかりしてーー。」

私の声は届いていない。ゆっくり、ゆっくり近づいてくる。その手に握られているストラーダは殺傷設定のようだ。

〔Sonic Move〕

突如、眼前に現れるエリオ。躊躇することなく、ストラーダは振りぬかれる。

「エリオ君ーー。」

〔Protection〕

ぎしゃあああ

魔力とデバイスの激しいぶつかり合い。魔力が火花のように飛び散る。現在はなんとか均衡を保っているが・・・キャロの心は揺れている。

攻撃なんてできないよ…

3分ほど経ったころだ。徐々にだが状況に変化が見られた。

キャロが押されている。

防御に徹して、疲れを誘つつもりだったのだが、一向に攻めてが緩まない。むしろ増してきている。

「はあはあ・・・魔力が、もう持たない。それにエリオ君も限界を超えるよ…」

無理やり動かされているようなものだ。エリオは自分で疲れを感じていはない、ましては、魔力も無尽蔵に使っている。当然、身体にかかる負担は・・・

必死に考えた。エリオ君を止める方法を。そして見つけたのだ。苦肉の策をひとつ。上手くいく確証なんて全然ない。でも…やらなきや。

おやおや、何かするみたいですね…ほら、貴女も見なさい。

隊長は伊達ではない。ここまでの精神汚染にも耐えている。意識もからうじて残していた。

「はあはあ…」

しかし、喋る気力もない。過去の事件など記憶の奥底からかき回されれば、こうなつてしまひの当然だ。

「…め…・て…一人…と…・・・も」

気力を振り絞りなんとか声を発するも、聞こえるわけもなく…

そして…

ぶしゃああ

肉を貫いた音が聞こえた。

ゆっくりと前を見てみると、

キャロを貫いた、エリオが立っていた。

「あ、あ、あ、いやああああ――」

そのときだつた。なにか私のなかの何かが壊れてしまつた……そんな感じだつた。

「エ…り…君…。ケホッ」

口から血を吐き、眼の前の男の子の名前を必死に呼ぶ。

まだ、無機質な表情を崩さないエリオ。しかし、これはキャロが賭けにでた苦肉の策だつた。

力の入らない手でペンダントを握りしめる。そして。。。。顔をゆっくりと近づけていく。

一人の唇は重なっていた。

「...オ...君...きだよ...」

s i d e o u t

悪戯（後書き）

もしも... どうせやるのなら... おれ... な

**悪戯そして・・・（前書き）**

今回も、作者の偏見が多いに入っています。

悪戯そして・・・

s i d e ? ? ?

きいん…きいん…きいいいん

握られたペンドントが一段と光を放つ。命を賭けた願いに応え、紫紺のペンドントは光輝く。やがて一人を光は包んでいった。

そして…光が引くと…意識を取り戻した、エリオが居た。悪夢から解放された彼はホッとしていた。しかし、すぐに異変に気付いた。濡れている…それに、血のにおいがする。

「キヤロー? キヤロー――」

付きつけられた現実は少年にはあまりにも辛いものだった。ストラーダに貫かれたキヤロが居たのだから。

くくくつつつ…愉快愉快

「これで、目的は果たせましたよ。さて、回収しますか。

「ぱあああん、ぱあああん」

従騎士の身体の一部が爆ぜた。

小気味良い銃声とともに。そして、やってきた。紅き姫が。

「遅かった・・・ッキヤロー!？」

血まみれになつているキヤロ、そして、愕然としたエリオ、そして  
網に捕らわれたフェイトを見つけた。

「貴様!!--何をした!?」

現在の状態を把握した瞬間、激昂していた。許せなかつた。仲間を  
ここまで…

ルナとソルを構え、トリガーを引く。従騎士はAMFがあることでも油断していた。そう、マガジンに入っているのは、魔力ではない。実弾である。

放たれた弾丸は杖に着弾すると、易々と貫通し、爆ぜる。

貴様…こちらの世界で実弾を使用することは…

「貴様らを葬ることにそんなルールは関係ない」とだ

杖は真っ二つになり、従騎士にもダメージはあつたようだ。この隙に後退し、キャロとエリオの治療にかかる。

「ひどい…キャロ…我慢してね」

ストラーダを一気に引き抜く。それに伴う出血はなんとしても防ぐ必要があつた。

ルナのマガジンを魔力弾へと入れ替える。そして3発分ロードする。

紅き法陣が展開される。AMFの影響に気が付いたのか、余分に口一ドしているのだ。

### 陽術 スターライトヒール

暗く淀んだ空間に、太陽の光が舞い込んでくる。

そしてこの光は、傷ついた、少年、少女を優しく癒していく。

…駄目だ、止血程度にしかならない…資質的なものあるし、このAMFはかなり辛い。

「白薔薇が助けを呼んでるから…一人とも…もう少しの辛抱だよ」

治療が終わると同時に、イルドゥンが駆けつけてきた。よく見えなかつたが、衣服が少しボロボロになっていた。

「すまない、遅れた。二人は我に任せろ。貴様は奴を倒せ!」

「わかったよ、二人をお願い」

二人ともかなり危険な状態には変わりない。急いでこの外道を倒さなければ…

「ああ、あの爆発でも生きていたか……」

「訓練と比べればあんなもの、可愛いものだ。それより、貴様は生きては返さないから」

1分間……経つたのか

重苦しい、雰囲気が次第に周囲を支配する。お互いか隙を窺つている。仕掛ければ……やられる。

微動だにせずに……ただ時間が流れ……はずだった。

貴様は、我らの敵だ。だから貴様も狂い死ぬがいい。

しまった……張りつめた空気が一瞬乱れた瞬間に仕掛けられた。完全に不意を突かれた形になってしまった。防御もい間に合つかわからぬ。ただ心の中で私は叫んでいたのだが……

「ああ、同意見だ。だから、貴様が死ね」

暴力的で、無機質な声が響く。そして目の前の従騎士の頭が身体から離れ、地面に落ちる。

ぼとつ。

ひやあああははは・・・・・一体何が・・・・・

私も何が起こっているのか、全く理解できなかつた。急に、やつの頭が落ちたのだから。

妖魔の後ろ…よく見てみると…そこには、死神を思わせるようなフェイトが立つっていた。

ただ、髪はほどかれ、髪の色、虹彩、バリアジャケット、魔力光など黒色になつてゐる。

「フェイト……隊長……？」

今までにないフレッシュヤーを感じながら、私は問いかけた。しかし  
……答えは返つてこない。

私は死ぬのか……ひやああはああは……

狂ったように叫びだす、従騎士。しかし、もう身体と頭は繋がつて  
いない。

切り離された従騎士の頭にバルディッシュを振り下ろす。

「消える、屑が……」

そのまま、高速でバルディッシュを振るつと、妖魔は細切れになつ  
ていく。

〔Plasma Smasher〕

バルディッシュから濃密な魔力砲撃が行われる。それはこれまでに  
見たフェイトさんのものを遥かに凌駕していた。

何も、語る事もなく妖魔は消滅した。消滅と同時に、フィールドが  
解除される。

「あの……フロイトさん……？」

恐る恐る、声をかけるが…直ぐに回避行動を取った。

自分の首元にバルティツシューの鎌がかかっていたからだ。

「何をするんですか！？」

当たり前のことを当たり前に言つ。しかし返ってきた言葉は違つた。

「ふん、貴様はやつと同じだ。人間の形をしてるが、貴様も同じなんだよ」

言葉が消えるやいなや、またしても、首を刈り取るといつわんばかりに、接近してくる。

「うよつと、まつて……速つ」

しゃがみ込みと同時に襷を走りぬけ、距離を取る。

が、距離を取つたのがいけなかつた。視線の先では、地面に倒れ込む、イルドゥンが見えた。弱つたものから狩つて行く。自然の摂理と同じだ。

「イルドゥン！？」フェイト隊長は？貴女は一体誰なの？

事態が飲み込めず、思いつくままの言葉を投げかけていく。そして、返ってきた答えは意外なものだった。

「私は、アリシア。アリシア・テスタークサ。フェイトの姉だ」

side out

えつ！？お姉さん？？？

駄目だ、状況が全然理解できない。

「はっはっは…そりやわかんねーだろうな。まあ、一応フェイトの仲間っぽいしな。説明してやるよ」

フェイトさんは性格が全く違う・・・それに、凄い威圧感…

私はしばらくプロジェクトFについての話を聞いた。またフェイトの過去を。

「つまり、フェイトさんはアリシアさんのクローンだと…？」

「そうだ、しかし、私の人格が表立つことはなかつた。そう、生まれるはずのないフェイトの人格があつたからだ。だが、私もこんなことをして、現世に戻るほどの未練はなかつた。だから、私は、フェイトの姉として、そして影として支えていくことにしたんだ。後は話した通り。過去に母親から受けっていたことや、管理局からの扱い。ここでのストレスを私が代わり引き向けることで、人格の崩壊を防

いでいた

そんなことがあるのか…

しかし話が続く。

「だが、今回はあまりにもストレスが集中しすぎた。そう、先ほど葬つたやつのせいだ。やつは、フェイトの心の傷を抉つた。だから、心が崩壊する前に私が表に出てきた。それだけだ」

「つまり、フェイトさんは、今眠っていると…」

「物分かりがよくて助かるよ。そういうことだ。ちなみに、フェイトのことは心配しなくてもいい。大丈夫だ」

「それといふ事は、他言はするな。フェイトにも言つんじゃないぞ」

「わかつたよ…」

とりあえず、フェイトは無事のようだ。よかつた…それなら次は、エリオとキャロだ。

「また、使つことになるなんてね」

カードを取り出し、力を解放する。

「秘められし力を解放せん。祖は癒しの象徴なり。出でよ」

カードをエリオとキャロの一人にかざす。するとカードから金色の

杯が現れた。

「二人とも……もう少し我慢して……」

杯から水がこぼれていく。こぼれた水は一人に沁みわたつて行く。  
そういうなされていた二人の表情が和らいだ。表情の変化に気付き、  
ようやく安堵の表情を浮かべる。

「後は、救助が来るのを待つだけ……イルドゥンも氣絶してゐるだけだ  
し」

なんとか無事に事件を解決できたと……一息付いていた矢先だった。

またしても首に鎌が掛けられている。

「つー…アリシアさん、一体何のつもりなんですか？」

内心焦りは感じている。どうしてこうなつているのか分からぬ  
らうだ。

「私達の敵は妖魔でした。それに私達は、仲間なんですよ？」

「ああ、そんなことぐらい分かつてゐる。私は、お前から感じられ  
る、その感じが嫌いなんだ。それにな…フェイトの負の感情を代わ  
りに受けたんだ。私にも、ストレスのはけ口ぐらい欲しいんだよ」

「私が妖魔であることがそんなに気になるの？」

「貴様は妖魔とか呼ばれるものの気配が半分だ。後は、人間だらうが」

…？私は妖魔なはずなのに…何言つてるの…？

アリシアの言葉に疑問を浮かべる私。なにか違和感を感じる。なにか…

「うひひ…・・・

突然訪れた、激しい頭痛に、思わず声を漏らしてしまつ。痛い…頭が割れそうだ…

「苦しんでるとこり悪いんだけど…相手してくんない？食えてんだよ。こつちはもう我慢できなくてうずうずしてんだ」

苦しむ私をよそに、アリシアはバルティッシュを突きだし、一いち方に話しかけてくる。

「…一体、何の相手を…？」

返答を待たずして、アリシアは突っ込んできた。『ト寧にフォトンランサーも同時に展開している。

「戦いに決まつてんだろう…！…それ以外になにがあるってんだよ

side out

side out

なんとか頭痛が収まってきた。

現在、アリシアと戦闘中だ。

ただ、状況は思わしくない。一方的に攻め続けられている。まず一つ目、攻撃が当たらないのだ。フェイトさんとの模擬戦は嫌というほどやつてきた。でも、このスピードはそれをも軽く凌駕していた。

「ぐう、速い…」

モードブレイズで現在立ち回っている。しかし、飛んでくるランサーを回避、撃墜に手を焼いている状況だ。

それに二つ目。防御ができない。

これは私がプロテクションを使えないというわけではない。プロテクションの意味がないということだ。

それに気付いたのは、アリシアの斬撃を防御した時だった。プロテクションが斬られたのだ。

どうやら、防御を貫通する性質をもつていて、防ぐことができなくなつた。

最期に…アリシアはデバイスを殺傷設定で使用している。そのために回避に今は全力を注いでいるのだ。

「逃げてばっかりじゃ、面白くねーだろ。ほら攻めてこよ  
ぎいついん

バルディッシュをルナとソルで受け止める。

だが…押し切られそうだ。ほんとに、フェイトとは違う。何もかもが数段上だからだ。

「強い…押し切られる…」

「私にリミッターなんて関係ない。そんなもので私は縛る事はできないんだよ」

つまり、フェイトに掛かっているリミッターを解除した状態ということである。そして、アリシアのセンスも加わって、一方的に押し込まれている。

状況はかなり不利であった。だが、これも訓練のおかげか、少しづつだが状況を押し返せるようになってきた。

ついに数十回の剣劇の後に、癖が分かつてきた。アリシアは力を入れすぎる癖があるみたいだ。この癖を狙っていくしかない。そして、

また鎧迫り合いに持ち込んでいく。そして…実行へと移す。

「…はああーーー！」

アリシアが力をかけた瞬間に力を抜き、なんとかいなすことに成功した。そして、ここに生まれた一瞬の隙…姿勢が崩れるのを狙つていた。

「もうつたーー！」

疾風迅雷

フェイト得意の高速攻撃。そしてアセルスが最初にマスターした閃光の一撃

稻妻突き

アリシアのデバイスを奪う為に狙うのは…・手だ。もちろん非殺傷だが、まともに当たれば少なくとも今は、動かせなくなる。

だが…当たらなかつた。

「惜しかつたね。でもそんな速度じゃ止まつて見えるよ。残念」

回避不能の技さえも回避するアリシア。そして…

笑みを浮かべながら、背後からバルディッシュを振り下ろす。

「消えちまーいな……！」

「まだ…諦めない！…！」

ルナで、バルディッシュを受け止めると、そのまま、回転し、魔力刃を滑らせる。そして回転を利用したまま、ソルを振りぬいた。

かすみ青眼

シグナムから教えてもらったカウンターだ。これなら、いける！…！

ソルは、バルディッシュを吹き飛ばすことに成功していた。弧を描きながら、後方へと飛び、地面に突き刺さる。

「・・・はあはあ」

張りつめた戦いで気付かなかつたのか、ものすごい量の汗をかけている。身体も重い…命を賭けた戦いはこれほどにきついなんて…妖魔との戦いとは全く違う。人と戦うことがどんなに恐く、大変…！

?。

「がはあつ

「がはあつ

・・・！？何が起こったか分からない…ただ強制的に息が吐き出される。腹部に痛みを感じる…どうやら殴られたようだ…

「なかなかいい線いってたけどよ、最期に油断したのはいけねえな・・・」

意識が飛ぶ瞬間に、理解できた。どうやら、アリシアにボディーブローをくらっていた。

「そん・・・・な・・・・・」

意識を失い、倒れ込んだ、私をアリシアが支える。

「面白かったぜ、お譲ちゃん。フェイトもお前のことが気になるらしいからな…」

そういって、アリシアは頬に唇を落とす。

「私も気にいったよ…」

アリシアが何かに気付いた。どうやら、救護が来たようだ。

「そりそろ、フェイトも田が覚めるだろ？。それじゃあ、私も眠る  
としよう…ただ、フェイトを悲しませるなよ。その時は、私がお前  
を狩つてやるからな…」

そういうて、アリシアは眠りについたのだった。

それから数分も立たずに、白薔薇をはじめとした、救助部隊が駆け  
つけてきた。

すぐさま、搬送準備がなされ、搬送が始まつた。

そして、私達4人はすぐに治療ポッド送りとなつた。幸い、イルド  
ウンは軽い、打撲だけだつたが…

side out

side ???

「ほう…やはり面白い。Fの残骸…」ここまでとは

博士のような青年が興味深そうに答える。隣には長身の女性が立つ  
ている。

「それにあの少女、アセルスとか言ったかな？実に興味深い

アセルスの写真を見ながら、にやりと笑みを浮かべる。

「彼もまた面白いものを持ってきてくれたものだ。彼に連絡を取ろう

う

そう言い残すと、ドクターと呼ばれた男はそのまま部屋を後にした。

s i d e o u t

悪戯やじて……（後書き）

いかがだつたでしょうか？  
フェイトのなかに、アリシア……なんかあつせつだと思つてやつてみました。

ちなみに、アリシアのことは豊口めぐみさんのイメージド俳優でい  
ます。

奈々さんでいいのと考へてこましたが、レオヤのイメージで作りま  
したので。

不備や感想があつましたら、気軽にお願ひします。

それぞれの今（前書き）

話が少し短いです。

あと、最後は「注意ください」。

## それぞれの今

リニアレールでの事件から一週間が経ちました。ガジェットがレリックを狙つて、襲撃してきましたが、無事に六課前線部隊が撃退。しかし、その後、出現した三体目の妖魔によつて、フェイトさん、アセルス、キャロ、エリオが治療の為に即入院。現在、4人の回復を待つてゐる次第であると…

リインの日誌より。

「休憩半分、お仕事半分」

リインを見つけた、シャーリーが話しかける。どうやら、休憩を兼ねて、日誌を書いていたようだ。

「シャーリーは何してたですか？」

「私はフォワードのみんなとデバイスの調子を見に訓練所へ行つたんですよ」

「うわ～ みんなどうでしたか？」

リインが私も見に行きたかったと言わんばかりに日誌を輝かせて尋ねている。

「それはもう！絶好調です」

満面の笑みを浮かべて答えるシャーリー。ビックやら皆頑張っているらしい。私も、見に行きたいですぅ……いや、訓練したいですぅ。

side out

side 訓練所

「おひつ……こつべや——」

見かけとは不釣り合いなハンマー「グラーフアイゼン」を振りかざし、突撃してくる少女がいた。

スターズ02ヴィータ副隊長

振り下ろされたハンマーには何か恨みに近いような何かが感じられた。

「スバル！なんで私の出番が無いんだよ……！」

それはハッとする…なんじゃ…。しかし攻撃は待ってはくれない。私は防御訓練の真っ最中で…。むづから、ぼくぼくに殴れてるわけ…

「痛いのは勘弁してください…」

【Protection】

マッハキャリバーがプロテクションを開く。今回は、なんとか防ぐことに成功している。が、じりじり押されている。

「へうううう」

じり・じり・後退していく。そして、勢いを消すことができず、グラーフアイゼンを振り切られた。

「あやあああ」

そして、きれいに木にぶつかる。

「痛つたつたつた…」

「思った通り、強度は悪くねえな」

ヴィータ副隊長が感想を述べながら降りてきた。フロントアタッカーとしてはいい感じらしい。これから三種の防御方法をマスターしていかないといけないらしい。ふう…大変だ。

そんなこんなで、スバルは殴られ続けた。

一方、ティアナは…

「ほら、こちいち動いてちゃ駄目だよー」

くつ…しかし、なのはさん…きついです」これ…

種類の違う、ショーターを次々に撃ち落としていく。が、癖でその場で対処することができなかつた。

「ほら、アセルスを見て一動いてないでしょ。それにティアナだつてできるはずだから」

アセルスを見れば、その場から一步も動くことなく次々と撃ち落としていく。・・・負けたくない。私も強くならなきや…

スイッチが入つた。

次々に撃ち落としていく。しかし足は止まつたまま。それに最適な弾丸をチョイスして対応している。

「そう！それ。相手に合わせて最適な弾丸を選択していく。そして、中距離を一番に」を支配する。それが私達センターの役目」

「分かつてます・・・」

少しづつ、ティアナが分かつてくれたみたい。うん、いい感じ

嬉しくてつい、速度をアセルスと同じ程度まで上げてしまつた。

「ちよつ・・・なのはさん、速過きです・・・さやあ――」

ティアナ撃墜完了

s i d e o u t

s i d e 病院

303号室 フェイト ハリオ キャロ

フェイトさん一家は従騎士戦の後の怪我が酷く、まだ入院していた。三人とも心身ともにダメージが大きすぎた。

「ハリオ、キャロ…一人とも」

「…」

沈黙だけが支配するこの病室。

「二人とも、ごめんね。私が弱いばかりに…」

すでに、涙ぐんでいるフェイトは一人を優しく包み込む。それに感化されるように、抑えていた涙が溢れだした。

「ううつう・・・」

「・・・ぐす…」

二人ともに今回の事は重すぎた。それを十分理解していたからこそ・  
・

「「めんね・・・」めんね・・・」

ただ謝り続けることしかできなかつた。

そして、しばらくのあいだ、二人を抱きしめていた。少しすると二人はまた寝てしまつた。

二人が寝た数分後、シャーリーがやつてきた。

「フェイトさん…大丈夫ですか…」

「シャーリー…心配かけたね。大丈夫だよ」

気丈に振舞つているものの、やはりどこか辛そうだった。しかし、時間は待つてはくれない。

「フェイトさんが休まれている間に、データを解析しておきました。  
これです」

データを開き、フェイトに見せる。

何枚かの写真を見ていくうちに、何かに気付いた。

「これは・・・ジエイル・スカリエットティ・・・」

「どこかで聞いたことがある名前ですね」

「広域次元犯罪者ジエイル・スカリエットティ。私が以前から追いかけていてね。それに、この蒼い宝石は・・・ジュエルシード！？」

管理局で保管してあるはずなのに・・・

「彼の技術力と、ロストロギアがあれば、分からぬ話ではないね」

ふと、何かに気付く。なんだろ？何かの文字みたいだけど

「シャーリー、これ読める？」

「どこかで見たことがある気が・・・」

一人で、考えたが答えが出てこない。が、思い出したようだ

「これは、イルドゥンさんが書いてましたよ。多分、アセルスさん達がいた世界の文字ですよ」

べきつ！――

なにかが握りつぶされた音が聞こえた。シャーリーがフェイトを見

てみると、フロイトが缶を握りつぶしていた。

「奴らが関わってるわけだ…」

もの凄い殺氣が漂い始める。やばい・・・これはやばい。本能が危険だと告げている。

「くくく…シャーリー、行くよ。隊長達を集めて緊急会議。招集任せるよ」

「まつ、はい」

テキパキと着替えを着替えると、そのまま六課へ向かうのだった。二人はまだ、夢の途中だ。

side out

side はやて

彼女はとても怒っている。非常に怒っている。それは何故か。その原因が前に立っている。

「だから我は何もしてはいけない」

「あれだけ無茶はいかんつていつとるやろ! なんでまた無茶したん?

?

「だから何もしていないと言つていいんだが！」

「嘘や。あの妖魔が作るフィールドについての解析は進んでる。中に入るには、移植したコアがないと入れんはずや。無理に入らうとすれば、身体に傷を負うのは当然やろ……」

そう、イルドゥンがボロボロになつていたのは、無理にフィールドを突き破つたからだ。

「これくらいは、どうとこうとはない

「もう、ほとんど戦つ力は残つてないんやで。そんな無茶したら死んでしまうわー！」

「そんなことで死ぬほどヤワデハない。それにアセルスを残すわけにはいかんからな」

そつ語るイルドゥンに対して私は我慢ができなくなつた。

ギュウ…／＼

「はやて・・・

「私は嫌や……イルドゥンが死ぬなんて、絶対嫌や……」

彼女は泣いていた。組織のトップと言つても、まだまだ未成年でもある。彼女たちにも、弱い部分もある。

「泣くな、はやて。我は死なん。それは約束してやる。だから、お前も無茶はするな。わかつたか？」

黙つて頷くはやて。そして二人の視線は交差する。

「絶対や。イルドゥン。約束や！」

「ああ、約束する」

月が照らすなか、二人は静かに重なるのだった。

s i d e   o u t

それぞれの今（後書き）

もう少し推敲しないといけませんね……。

アセルス×イルドゥンが好きな方すみません。

私は今回はイルドゥン×はやてがどうしても書きたくて……

アドバイスなどありましたら、お願ひします。

## 焦燥（前書き）

またしても、遅くなりました。大変申し訳ありません。  
幾分か変更しておりますのでご注意ください。

20000PV ユニーク3500人達成。  
私の中でのひとつ目の目標でもありました。  
ご覧になつていただけた皆様に感謝いたします。

これからも生温かく見てください。

本当に「うまくなっているのか…毎日同じような訓練ばかり。」この前の初出動では、それなり上手くできていた。だけど…この部隊には…凡人なんていない。凡人は私だけだ。けど、私は証明しなければいけない。ランスターは通用するつてことを。

ティアナの日誌。ホテル・アグスタ出動前より。

現在、六課の前線メンバーに加え、はやて、シャルル、リン、ザフィーラは、ヴァイスの操縦するヘリの元、今回の現場へと移動している。

「ほんなら、あらためてここまでの任務のおさらいや。これまで謎やった、ガジェットドローンの制作者、及びレリックの収集者は…」

説明のため、ディスプレイには、ある男の写真と履歴が映し出されている。が、これをおとなしく見ることができない方が一人。そうフェイトだ。だがフェイトもライティング分隊隊長である。そのため、今は拳をぎりぎりと握っている。

「現状では」の男。違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者「ジエイル・スカリエッティ」の線を中心に操作を進める

「Jたちの操作は、主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」・・・グシャツ!!

「はい……」

フェイトちゃん……天井の一部、握り潰さないでね……ほら、エリオとキャロがびくついてるよ。

しかし、内心では、フェイトさんすごい。なんて思つてゐる一人であるが。だが、ヴァイスだけは泣いていた。

「俺のヘリが……」

そんなボヤキは誰にも聞こえるはずもなく、説明が続けられる。リングがはやての横に移動し、説明を始める。

「今日向かう先はここ、ホテル・アグスター

「骨董美術品オークションの開場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

なのはが続けて説明に入る。続けてフェイトが説明する。

「取引許可の出でている口ストローギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出て来ちゃう可能性が高いとのことで、私達が警備に呼ばれたです」

説明を聞きながらも、スバルは暇を持て余したのか、それとも犬ならぬ狼派なのか、ザフィーラを撫ではじめる。

「Jの手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなつたりするし、色々と油断は禁物だよ」

「現場には昨夜から、シグナム副隊長とヴィータ副隊長と、アセルス、白薔薇姫、イルドゥンがはつてくれてる」

「私達は建物内の警護に回るから、前線は副隊長達の指示に従つてね」

「はい……」

さきほどから、きよろきよりしていた、キャロはつこに我慢できなくなつたのか、質問をすることにした。

「あの、シャマル先生、さつきから気になつてたんですけど、その箱つて？」

「ああ、これ？隊長達のお仕事着」

満面の笑みを浮かべて答えるシャマル先生。お仕事着つてなんなかな？

side はやて

ホテル・アグスタ

「いらっしゃいませ、よひいか」

受付担当が来客に対していくつも通りの挨拶を行つてい。次々と客が流れていき、ある客がやつてきた。

すつ・・・

受付に出されるのは、身分証明書。機動六課部隊長八神はやでのものだった。

受付が困惑するのも無理はない。三人ともが、誰が見ても墮ちるであろう、美貌と容姿を兼ね備えている。シャマルが準備していたドレスがなお美しさを引き立てている。

「どうも、機動六課です」

受付に挨拶を済ませると、そのままホテル内を見て回ることに。なのはとはやはてはホール内を。フロイトはホールの周りを確認することになった。

ホール三階付近から、開場内を確認している、なのはとはやはて。そこに昨日から来ていたイルドゥンが合流した。ただいつもと違つて、正装だが・・・

「昨日からお疲れやな、イルドゥン。なかなか決まつてるやん」

「普段とあまり変わらんだろう。中を昨日から調べてみたが、特に変わったことはない。警備も問題なかう」

「せうやな、六課のみんなが外を固めてるし、正面もシャッターがあるし、万が一でも、私たちでなんとかする」

「はやでちゃん、心配することないけど油断は禁物だよ。周りを見てくるから、ちょっと行ってくるね」

言い終えるとホールの外へ。そしてなのはから念話が。

仕事中だから程々にね

あははは、なんのことかな

・・・流石はスターズ分隊隊長。色<sup>いろ</sup>とに鈍感なフエイトちゃんの嫁なだけあるわ。

一人で解釈を終えると、イルドゥンの横へと移動し・・・

「なあ・・・イルドゥン。その・・・なんや・・・あの・・・」

「何をまごついている。部隊長とあるものがそれくらいで狼狽するな」

「あう・・・」

なぜだらう。はやてが小さく見える。が、そこはイルドゥンも分かっている。何を言いたいのか、そして欲しい言葉を・・・

「似合わない服を探すのも、お前なら難しいのではないか?」

少しの間、静寂が支配する。彼が言った言葉を理解することに時間が必要だった。そして、理解できたとき、彼女の胸には喜びが満ち溢れていた。

「イルドゥン・・・ありがとな」

「ここまで、惚ける気だ。はやて、お前はこの隊の隊長だろ？ 我は、我的役割を果たす。お前はお前に役目を果たせ」

そうして、手をとり、手の甲へ kiss を落とす。

「はやて。しつかりな」

「もちろんや、イルドゥン／＼／＼

そんなこんなでイルドゥンはすうっと消えてしまつ。こればかりは私も慣れない。気持ちに一区切りつけると、すぐに切り替える。仕事はきつちりせなあかんから。

side out

side 白薔薇姫

「なかなかお似合いですよ／＼／＼アセルス様

素直な感想を私は述べました。高貴でかつ美しい姿。深紅のドレスが映える。私の監修の元、シャマル様のご助力もと完成させたこのドレス・・・紅い薔薇を携え、アセルス様にお似合いです。

「白薔薇／＼／＼なんか恥ずかしいな」

バリアジャケットや制服ではなく、このような正装をするのは久方ぶりでした。無理もありませんね。

すつと、アセルス様の手を取り、少し顔を赤らめ、お願ひすること

にしました。

「アセルス様・・・お願ひしますね」

言いたいことが分かつたようで、アセルス様も、顔を赤らめているようだ。けれどすぐに答えてくださいました。

「もちろん、喜んで／＼／＼」

すぐに手を取ると、優しくエスコートしてくれました。すれ違う人達は、私達を眺めているようでしたが、私は気にしていません。もちろん、アセルス様も。

昨日一通り見回りましたが、再度確認ということで、建物内を見回つていると、向こうからフェイト様が来られました。フェイト様も黒を基調としたドレスがとてもお似合いです。

「アセルス、白薔薇姫！昨日からお疲れ様です。一人とも、凄く似合つてるよ」

「フェイト様こそ、凄くお似合いです」

「羨ましいな・・・胸とか」

アセルス様・・・少し感想がずれてませんか？

「二人ともいいなあ。ドレスもお揃いだし、アセルスと白薔薇姫も

なんかいい感じだし・・・私もなのはに・・・

公私混同はやめましょう、機動六課。

「と、とにかく、もうすぐオーフショウだしね。お仕事がんばろう  
ね」

「フェイト様も、頑張りましょう

「むう・・・羨ましい」

アセルス様・・・夜は御覚悟を／＼／＼／＼

「バルティッシュ、オーフショウ開始まであとどれくらい」？

〔 3 hours and 27 minutes 〕

「うん」

残りの時間、私達はフェイト様と一緒に回ることにしました。途中、廊下で話をされていた二人の御仁の一人がなにか気付いたようでしたが、特に危険なこともなさそうなので、そのままスルーして見回りを続けることにしました。

side テイアナ

しかし、今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か

スバルからこんな念話が飛んでくる。今は特に問題もないのに警戒しつつ、会話を始めた。

そうね、あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長の事とか、副隊長の事とか

うん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど

そこから、八神部隊長の「バイスのこと、副隊長とシャマル先生とザフィーラ、リインを合わせた6人のことについて少し話が進む。だがレアスキル持ちは当然、秘匿事項が多い。

ティア? 何か気になることでも?

別に。また後でね

気になるなんてもんじゃない。六課の戦力は無敵を通り越して異常だし、八神部隊長がどんな裏技を使つたかしらないけど隊長格はみんなオーバーS。副隊長もニアSランク。ほかの隊員達だって、前線から管制管まで未来のエリート達ばかり。あの歳でBランクを取っているエリオとレアで強力な竜召喚士のキャロはフェイトさん

の秘蔵っ子。それに危なつかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。そしてまだ謎だらけだが、私と同じぐらいで、遙か上を行くアセルス。

「この部隊で凡人なのは私だけか……だけどそんなの関係ない。私は立ち止まるわけにはいかないから」

side out

side . . .

「どうした、何か気になる事でもあるのか」

「ドーのおもちゃが近づいてるって……」

森の中で、親子にも見える男と少女の他愛もない会話をしていた。だが少女にもたらされた情報に間違いはない。

・・・!?

ホテルの屋上に待機していたシャマルのデバイス「クラールヴィント」のセンサーに反応があった。どうやら、お姫さんの来たようだ。だが歓迎はだれもしないが。

「シャーリーーーー？」

ロングアーチのシャーリーに確認を取る。クラールヴィントのセンサーの誤認ではないことも確認できた。

「来た来た・・・来ましたよ！ ガジェットドローン陸戦？型、機影三十・・・いや三十五。陸戦？型、2、3、4！！」

ホテルの三方からガジェットが襲来していることがディスプレイで確認できた。すぐさま情報は各隊員に通達される。

そこからは早かつた。

副隊長やシャマルの指示のもと行動が開始される。新人FW4人はティアナの指揮下でホテル前に防衛ラインの設置。ヴィータ、シグナム、ザフィーラは追撃に出ることになった。ただザフィーラが喋れたことに、エリオとキャロは少々驚いていたようだ。

「了解ーーー！」

それぞれ内容を把握すると返事を返し、移動を開始した。ただ、ティアナは魔力アンカーを使い、シャマルの元に。状況を見たいとのことで、シャマルからデータを受け取っていた。

「副隊長のみなさん、デバイス、ロック解除。グラーフアイゼン、

レヴァンティン、レベル？起動承認

「クラールヴィント、お願ひね」

「グラーフアイゼン

「レヴァンティン

それぞれのデバイスを掲げバリアジャケットを展開する。そこにはいつも副隊長ではなく「八神はやての騎士達」の姿があった。

バリアジャケットの展開が終わるとヴィータ、シグナムは追撃へと赴く。

「新人達のところには、ぜつてーやらねえ。一機たりとも通さねえ。  
即行でぶつづぶす」

それを聞いていたシグナムはやれやれといった感じで、話を聞いていた。

「お前も案外過保護だな」

「う、うつせーよ

そんなやつとりをしながらも、田標のすぐそこまで迫っていた。木々をなぎ倒しながらもこちらへ一直線といったところか。

「ヴィータ、私が大型をやる。お前は細かいのを叩いてくれ

「あつ、ずるいぞシグナム！…遠距離が苦手だからってそれは卑怯だぞ！…」

「そんなもの早いもの勝ちだ！！」

子どものですかと言いたくなるようなこの一人。ただここ最近出番がなく暇を持て余していたのは事実である。

「今度、アイス奢れよな…！」

「分かつた分かつた」

そして一人と一匹は戦闘を開始した。

八神部隊長、私が防衛ラインに参加してもいいでしょうか？

外の状態を確認していると、アセルスから確認が飛んできた。

中の警備は十分やううし、アセルスがFWに合流すれば、さらに安心やな。

了解や。アセルスはそのままFWに合流、ティアナ指揮下で防衛ラインの維持と遊撃。各ポジションのカバー頼むで

了解しました

確認を終えるとすぐさま、窓へと走り出す。白薔薇は中の警護を任

せて、私はラインの維持に専念することにした。

さて、いくよ。ルナ、ソル！！

両耳のピアスを触り、外へと飛び出す。同時に深紅のバリアジャケットが展開される。一階から勢いのままに飛び出してしまったが、なんなく着地。そのまま皆の元へ向流ることにした。

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

ホテルから少し離れた場所から、ゼストと呼ばれる騎士と少女は眺めていた。そこにローラーから通信が来たのだ。

「ルーテシアはどうかな？頼まれてくれないかな？」

「うん、いいよ」

ルーテシアと呼ばれる少女は断る事もなくローラー・ソラジェイル・スカリエッティの依頼を受けた。

依頼を受けてくれたことに彼は感謝しているようで、今度お菓子をお菓子を御馳走すると言つてくれた。別にお菓子とかはいいんだけど・

依頼品のデータを受け取ると、ルーテシアは召喚を始める。そう、

彼女も召喚士なのだ。

「吾は「ひ、小さき者、羽搏ぐ者。言の葉に応え、我が名を果たせ。召喚インゼクトシーク」

紫の魔力陣から、卵のようなものが現れ、それが破裂するとそこから小さな羽虫が大量に召喚された。ルーテシアはオブジェクトコントロール、つまり無機物の操作を羽虫にさせるというのだ。だが、これは彼女の能力の一端にすぎないのだが。

「気を付けていいでらつしゃい・・・」

放たれた羽虫はガジェットに入り込み、「ントロールを奪いとる。そして動きは格段に良くなり、シグナムや、ヴィータが一撃で落とせなくなつた。

ヴィータがラインまで下がることになり、シグナムとザフィーラの二人で当たることでなんとかラインの維持を優先することにしたが、さらに相手は追い打ちをかけてくる。

「ブンターヴィヒト。オブジェクト11機、転送移動」

これには同タイプであるキャロがいち早く気付いた。

「遠隔召喚、来ます！！」

言葉と同じくして、眼前に召喚魔方陣が展開される。そこから転送された11機のガジェットが出現する。

「召喚ってこんなこともできるの？」

スバルやエリオが転送魔法により現れたガジェットを見て叫んでいた。だがキャロは知っていた。

「すぐれた召喚士は、転送魔法のエキスペートでもあるんです」

三人のやり取りを聞いていたティアナだけは違っていた。彼女はすでに臨戦態勢に入っている。副隊長達のリミッター付きでの戦いを見せつけられ、さらに「やらなければ」の感情に飲まれかけている。

「なんでもいいわ、それより、迎撃いくわよ

「おおお……！」

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して。私はそれでいつだつてやつてきた。

クロスマリージュを正面に構え、魔方陣を開き、迎撃の準備を整える。リイン曹長もこちらに合流することになつたそうだ。ただ虫にやられたとかなんとか。

が・・・ルーテシア達の目的を知る者はいない。ガジェットは囮であり、本命の物を探している最中だった。そしてそれもついには見つかる。

「見つけた・・・ガリュー、お願ひね」

右手を掲げると「アスクレピオス」から黒い塊が放出された。それこそが彼女の召喚虫で信頼を置く、ガリューだった。すぐにガリューは倉庫へと向かっていった。

「くっ！！」

足を止め、ガジェットに対して射撃を行つも、効果的なダメージを与えることができない。避けられるし、当たつても破壊することができない。

ガジェットから放たれたミサイルを撃墜することに氣を取られ過ぎて、背後を完全に取られていた。が、キヤロの声でなんとかジャンプして回避し、一発打ち込むもAMFにより決定打にはならない。

「ティア!? 大丈夫??」

ウイングロードを滑走し、ガジェットをかく乱しているスバルから声が飛ぶ。何とかの意味を込めて、左手を少しあげ、木に身を隠し、マガジンを交換していたとき、シャマル先生から連絡がくる。

防衛ライン、もう少しだけ持ちこたえてね。すぐに、ヴィータ副隊長がすぐに戻つてくるから。それに左舷はアセルスが抑えてくれてるから、みんなは正面だけに注意して

アセルスも出でるの！？それにシャマル先生、守つてばかりじゃ行きまつます。ちゃんと全機落とします

ちょっと、ティアナ大丈夫なの？無茶しないで

朝晩訓練してきますから・・・大丈夫です。

「エリオ、センターに後退！スバル、クロスシフトAで行くわよ！  
！」

「あああ――！」

ティアナの意図とする動きを理解し、さらにガジェットをひきつける。それを確認するや、カートリッジ4発ロードする。

証明するんだ。特別な才能がなくたって、一流の隊長達がいる部隊でだつて、どんな危険な戦いだつて・・・

一つ、また一つ。シューターが生成されていく。そして十数発のシーラーがティアナの周りに漂っている。

「私は、ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって

大丈夫。打てる。クロスマリージュも・・・私も。

スバルは準備が整つたことを確認すると、車線軸にガジェットを追い込んでいく。そしてティアナを確認すると、その場から急速に離脱した。それが合図となるのだ。

「クロスファイアーシュート！…！」

ガジェット目がけ、一斉に放たれるオレンジの弾丸。カートリッジのおかげか、易々とガジェットを貫通していく。

だが、彼女の技量では、この数を正確に制御することがそうそうできるはずもなく、さらに、精神的にも不安定なら尚更だ。一発だけ逸れてしまい、それが運悪くスバルの方へと飛んで行つた。

背後に魔力を感じたスバルが振り返るもすでに眼前。防御するにも、魔力量が大きくて貫通されてしまう。

「ああっ・・・」

どうすることもできずに、ただ固まってしまう。バリアを使うこともできずに直撃する寸前、目をつぶしてしまつ。だが私には衝撃などは何も来なかつた。

「ティアナも無理しそうだよ。スバルももう少し集中しないと、怪我だけじやすまないよ」

目を開けると、深紅のバリアジャケットに身を包むアセルスが、シユーターを受け止めていた。しかも、バリアとかじやなくて、魔力の刃を使って受け止めているのだ。

### 十字留め

普段からの地獄のような訓練のおかげで、魔力弾も止めることができるようになった。さらにここから応用である。勢いを吸収すると同時に方向を変え、余ったガジェットに跳ね返した。

左舷のガジェットを全て切り裂き破壊してきた。？型であろうと、今のアセルスを止めることはできなかつた。左舷を片づけ、急いで駆けつけた時、ちょうどスバルが誤射されるとこらだつた。

「ふう・・・ティアナ、無茶は良くないよ。スバルもそうだよ。こうなるつてくらい予想はついてたでしょ？ここは私に任せて、一人は休んでて。ヴィータ副隊長も来てくれたみたいだし」

普段のティアナの事を考へると厳しく言つことは止めよう。今日の事で何か変わるかもしれないから。

ティアナの身体が震えてる。自分のやつたことが招いた結果・・・フレンドリーファイアになりかけていたのだ。できると啖呵をきつておきながら、この結果だ。無理もない。

「アセルス、今のは私がいけないんだよ、だから・・・」

聞きわけのない二人だねホント・・・前思考撤回。少し、イラッて  
しちゃったよ。

「引っ越しんで」

深紅の瞳が心を抉る。圧倒的な強者が弱者を眼だけで殺すような・  
・深く、暗い眼で・・・

「何回も言わせないでね・・・それに、私の階級は4人より上・  
・つまり上官命令だよ」

「は・・・い・・・」

こんな恐いアセルスみたことない・・・押しつぶされそうなプレッ  
シャーを感じる。それにティアナも相当こたえてるみたい・・・  
アセルスとヴィータ副隊長に任せて、私とティアナは後ろにさがつ  
た・・・私はこの時気付かなかつた。ティアナは声を殺し、泣いて  
いたことを。

side out

ガリューは何も問題なく目的物を回収し、離脱を開始した。ルーテ  
シアからのオーダーを受け、スカリエッティのもとへ向かっている  
最中だ。

だが、機動六課も簡単に終わる相手ではない。ノーマークだったガ

リューの前後に影が現れた。

「はやてとアセルスの読みは当たつていたようだな」

「はい、イルドゥン」

前後を挟むように、イルドゥンと白薔薇姫が躍り出る。完全に気配を殺し、ガリューを待ち伏せていた。妖魔の剣と妖魔の小手、具足を装備した状態で・・・

待ち伏せは上手くいったが、はたして抑えられるものか・・・が、やるしかないようだな。

だが、相手と殺りあうつもりのないガリューは逃げることだけを考えている。なので、二人を避けることだけに集中している。

至極簡単な方法をガリューは選択した。そう、正面突破だ。

「・・・」

さらに加速し、そのまま抜き去ろうと試みる。だが、イルドゥンも易々抜かれるわけにはいかない。

抜刀の構えをとり、相手を見据える。空気が変わった・・・

「一撃で決める」

ガリューが通り過ぎようとしたその刹那・・・

あーいいいん！――！

金属と金属がぶつかる音が鳴り響く。

・・・金属音だと！？一体何とぶつかったのだ！？

土煙りをあげた後、スピードを相殺するために、足でブレーキをかける。白薔薇姫が近づくも、そこにはイルドゥンしかいない。

「イルドゥン・・・」

「すみません、逃しました・・・だが、一太刀は入ったが・・・が  
はあつ」

膝をつき、吐血するイルドゥン・・・どうやら、すれ違こさまに躓  
つたようだ。

「まさかここまで、動けないとほ。情けない

膝をつきながら、少しあがつた息を整えていく。その間に海しき  
がにじみ出でている。

「今は治療が先です。シャマル様を呼びます

白薔薇姫から連絡を受けてシャマルがやつてきた。前線はすでに全機撃墜していたので持ち場を離れることにも問題はなかつた。

「二人とも、無理はしないでくださいと言つてるじゃないですか。本来の5割程度しか出せないんですから」

治療を受け、なんとか出血は止まつた。治療が終わるとすぐに、イルドゥンは動きだす。

「迷惑をかけた。すぐにホテル内に戻る」

「待つて、まだ終わつてないです……つてもつ」

すでに、そこに姿はない。白薔薇姫はやれやれといった感じで笑つていた。

「何故、無茶をするんですか?」一人とも

治療データをまとめながら、白薔薇姫に問いかける。前にも話は聞いているのだが、どうしても納得ができないのだ。

「誰だってそう思う。一人の力が落ちているのは分かつているのだから。」

「シャマル様、私達には時間がないのです。あの方が本腰を入れてくる前に・・・その時までに成さなければならぬことがあるのです」

「

成さなければならぬこと。それがなんのかは一人にしか分かない。だか、命をかけるほどに、何か大事なことがあるのだろう。今は詮索せずに、私もホテルへと戻るのだった。

side out

その後、オークションが開催され、はやては、アコース査察官と。なのはとフェイトはそれぞれユーノと再会することになった。



**焦燥（後書き）**

作者の解釈が十二分に入っていますので、生温かく見ていただけたら幸いです。

ホテル・アグスタの件の後、私は彼女達に言つたことを自分の中で反芻してみた。自分が同じ立場だつたら……力が同じならば……どうしていたのだろうか。多分、同じことをしていただろう。彼女のことは分からぬでもない。私も正直なところ焦つてはいる。本当に強くなっているのか……分からぬ。けれど私には止まる事が許されない。守りたいから……これからも、ずっとこの先も。

アセルスの日誌より。

side アセルス

ホテルでの一件が終わり、現場検証が行われている。オークションは無事に終わり、今は六課総出でガジェットの回収は現場での出来事をまとめている。私は黙つておこうと思つたのだが、ヴィータ副隊長に問い合わせられ、喋つてしまつた。当然、私も怒られたのだが、ティアナにスバルも一緒だつた。このことは当然、なのはさんにも伝わり、今はティアナと二人で散歩というなお話の最中だ。

「私も、言い過ぎたかな……」

ぽつりとでた言葉は誰にも届かずには消えていく。誰もそれが正しいのかなんて分かりはしない。ただ、事態が進むことを待つほかに道はない。

ティアナはなのはさんと、散歩という形の話し合いに行つてゐるとい

るだし・・・

しばりく、六課スタッフと現場での出来事について話をしていると、フェイトさんが誰かと話しているのに気づく。親しげに話をしているのが気になつたので、近くに行つてみるとこいつは宣言しておひつ興味があるからといつことは宣言しておひつ

「フェイトさん、検証はほとんど終わりましたよ」

「うん、ありがとう。これで、スカリエッティに近づくことができるとかもしないね。そういう、アセルスに紹介しておくな。私どなのはの幼馴染でユーノ・スクライア司書長。今回のオーケーションの鑑定を担当してたんだ」

「初めてまして、アセルス准陸尉です」

一応、形式的な挨拶を行つ。初対面なら尚更である。

「あはは、そんなに硬くされると困っちゃうな。普通でいいよ。僕はユーノ・スクライア。無限書庫の司書長をやつてます。よろしく」

そんなこんなで簡単な挨拶を終えると、フェイトさんが気になつたことを話始める。どうやら、前回のミーティングに出ていたロストロゴギアについてのようだ。

キヤロ、気になるなら一緒に聞けば?

気付いてたんですか!? 私はただ、ユーノ先生とフェイトさんがどんな関係なのか知りたかつただけで・・・

エリオにキヤロ。二人ともフュイトさんに引き取られ、一緒に生活を始めてまだ長くはない。そのため色々と氣にもなるのだろう。

色々聞こえてあげるから、後でゆっくりお茶でもしようつか。ね、  
キヤロ

はい……お願いします

凄く喜んでるな……妖魔との一件以来、凄く仲良くなっている。キヤロにあげたペンドントに助けられましたとか、なんとかで。でも、女の子同士で、お茶するのも楽しいからね。

「そり・・・ジユエルシードが」

「うん、局の保管庫から地方の施設に貸し出されてて、そこで盗まれちゃったみたい」

コンソールを操作しながら、ガジェットから発見されたジユエルシードについての説明をフュイトが行つていて。あまり詳しい話は聞いていないが、フュイトさんはジユエルシードと何か関係があつたらしく。

「そりか・・・」

顔を曇らせながら、ユーノ司書長は答えていた。ユーノ司書長の反応、フュイトとの関係を踏まえるとどうしても気になることが一つある。聞いてもいいものか分からないが、キヤロとの約束もあることだし、ここには思いきって聞いてみることにした。

「フュイトさん。フュイトさんとジユノルシードとせどりのような関係があつたのですか？お一人を見ていると、過去に何かあつたように思えるのですが・・・」

聞いてはいけないことだつたのだろうか。一人とも一瞬顔を濁した。だが、フュイトはすぐに普段通りの優しい笑みを浮かべ、話してくれた。

「アセルス、なんか真面目すぎだよ。みんなの前じゃないんだからね」

くすくすと笑いながら、フュイトさんは答える。どうやら私の形式ばつた感じはフュイトさんから見るととても可笑しいらしい。

「アセルスは真面目だからね。仕方ないよ、うん」

反論の余地なく、完封されてしまった。恐るべし…

コーノ司書長は、相変わらずだなつて感じで見ていて、話を戻そ  
と、咳払いをしていた。

「少しずれちゃつたけど、10年前、私は、なのはとコーノ司書長の一人とジユエルシードを集める為に戦つてたんだ。その事件はP-T事件って呼ばれてね。母さんや、姉さんと悲しい分かれがあつたけど、なのはや、みんなと出会つことができて、今は感謝してるよ」

・・・姉さん？？？

「あの・・・そのお姉さんの、名前は・・・」

「アリシア・テスターもサツで言つんだ。私の大切な姉さんなんだ」

「キッ！――

本当だつたんだ。あの戦つた相手が、フェイトの姉である、アリシアであることがここに証明されてしまった。

「アセルスどうかしたの・・・？？？」

優しく尋ねてくれたフェイトさんに眼を合わすことができない。瞳の奥からアリシアに見られている気がしてならないからだ。

「迂闊に話すと・・・次は・・・殺られる」

背中にものす「」に量の冷や汗をかきながらも、情報はしつかりまとめていた。が、内心はつづかり喋つてしまわないかと冷や冷やしていたのだが。

フェイトさんの過去の話に区切りが付いたちょうどその時、もう一人の幼馴染ことなのはさんがやつってきた。『いやら、ティアナとの話を終わつたようだ。

「ちよつと良かつた。アコース査察官が戻られるまで、ユーノ先生

の護衛を任せられてるんだけど、後退お願ひできぬ?」

「うん、了解」

やつぱり久しぶりに会つのだから色々話したいこともあるのだろう。フェイトさんはなんと交代して、調査に戻ることにした。

「エリオ、キャロ、それにアセルス、現場検分手伝ってくれるかな?」

「気を利かせたら、多分、フェイトさんに勝てる人はいないんじゃないかな・・・了解です。」

なのはさんと、ユーノ先生を残して検分に移つた。それからじばらく検分を続けていると、シャーリーから撤収準備完了の報告が全体に伝わつた。

各員、撤収を開始。六課に帰還することとなつた。

なのはや、はやても、今回久しぶりに出会えた人々との話はこれら活力にもなるだろつ。

side out

side ティアナ

六課に戻つてくる」にこな、もつ夕刻。あたりはすっかり茜色に染まっている。

「みんな、お疲れさま。今日の訓練はお休みにします。しつかり休んで、また明日からがんばり」

「はい……お疲れさまでした」

一同解散し、隊舎の方へと向かつて歩きはじめる。みんな、疲労の色は隠せないようだ。だが・・・簡単に休むことをよしとしない人物が一人。ティアナである。

「私はもう少し練習していくから。みんなは先戻つてて」

「あ、それなら私も一緒に」

「僕も！？」

「私も手伝います」

仲間として本当に恵まれているのないだろうか。だれもミスを責めるわけでもなく、さらには疲れているのにも関わらず私に付き合うというのだ。

だが、素直になれない。ましてや、今日のミスはランスターを証明すると誓った私にとって、致命的な失敗だ。弱い私なんて誰にも見せたくない。

「ありがと。でも、みんな疲れてるでしょ。今日の私は、ほとんど疲れてないから。みんなは先に帰つてて」

皮肉のつもりかな・・・自分で言つてて馬鹿みたい。みんなもそれ

以上食い下がる事もなく、隊舎に戻つてくれたみたい。これ以上みんなに迷惑をかけるわけにはいかない。だから・・・凡人である私は努力するしかないんだ。

それから数時間の間、練習用のポインターを相手に、トレーニングを行つた。集中していて気付かなかつたが、すでに外は真つ暗だ。

「はあはあはあ・・・」

休憩も入れずに無理をしていれば当然こいつなるのは、誰の目にから見ても明らかだつた。流石に見かねたのか、この空氣を変える男が現れる。

「『』苦労なこいつた。任務終わりで自主トレとは恐れ入るね。だけどお前らは身体が資本だから無茶し過ぎるのはな。ほれ、これでも飲みな」

整備服で現れたのは、ヴァイス陸曹だ。両手には缶ジュースを持っている。どうやら見かねたようで休憩の口実を作るために持つてきただようだ。

「ありがとうございます。ずっと覗いてたんですか?」

「整備の合間にスコープでけりうりとね」

「それは、御心配かけました。缶ジュースありがとうございました」

時間にすればわずか数分といったところか。これだけでは休憩とは呼べる時間ではないが、今のティアナに対する態度からは幾分かの休憩には

なつたのではないか。

「私は凡人なんで人一倍努力しないといけないので。それでは、失礼します」

「俺に言わせりや、十分すぎるぐらいなんだがな・・・」

その場にはティアナはもう居ない。ヴァイス陸曹が言いたかつたこと・・・その真意をくみ取る事は、今のティアナには不可能だろう。だから今は、外から見守ることしかできないのだ。

「私は・・・凡人だから・・・」

side out

そのころ隊舎では

お風呂から上がった、アセルス、キャロ、スバル、エリオ、白薔薇姫がティアナのことについて話していた。アセルスとキャロは今度の休みにでもお茶しよっかとか言っているが気にしないでおこう。

「ティーダ・ランスターってティアナのお兄さん?」

アセルスもティアナのことについて気になっていたらしく、スバルの話にさつきとは違ひ真剣になつて聞いている。当然、この場にいるみんなもそうなのだが。

「みんなには詳しく述べなかつたからね。この際だしみんなにも知つてもらおうかな。ティアナのお兄さん、ティーダさんのこと」

それから半時間程、スバルは知つてゐることを全て話してくれた。ティーダさんのこと、ティーダさんに対する上司の事、そしてティアナのことを。どうしてそこまでして、結果に拘つていたのかその理由がスバル以外に明るみになつた。だがそれを聞いたが故に、一人の少女は許せなかつた。

「ティアナどうしてここまで無茶なことをするのかは、よく分かつよ。でも、このままなら私は許せない。絶対に」

「アセルス、それはどういうこと……？」

そう言つなり、アセルスは部屋に戻つて行つた。それに付きそつ形で白薔薇姫も戻つて行つた。去り際に、「アセルス様にも何か思うところがあるのだと思います」と残して。

分からぬ。私にはアセルスが思つてゐることが全然……それになんだか空氣も冷めてきたみたいだし、この場は解散になつた。各自が部屋に戻り、スバルもデバイスの整備をして寝ることにした。

「もうこんな時間……」

そこにシャワーを終えたティアナが戻つてきた。さすがに私が起き

ていないと思つていたのか少しは驚いている。

「あんた、まだ起きてたの？明日もあるんだから早く寝なさいよ。それに明日4時から朝練するからアラームうるさかつたら『めん。それじや、ねやすみ』

布団に入るなり即睡。みっぽど疲れていたんだろう。私も早く寝なきゃ。さりげなく自分の時計のアラームを4時にセッテした。絶対ティアナ起きないだろうし、私の体力を侮つてもうつちや困る。

「おやすみ、ティア」

明日も頑張りついでーー

こうして、新人たちの一団が幕を閉じた。しかし、まだ終わらない人たちもいた。

「シャーリー、頼んであつた物はできたか？」

「なんとか間に合いました。それにしても・・・いいんですか、本当に？」

「いいのですよ、シャーリー様。時間は待ってはくれませんから。それに、アセルス様も成長されます」

三人の会話には色々と思うところがあるのだろう。だが、時が歩みを止めることは決してない。だから歩み続けるしかないのだ。

「後は、キックカケだけか・・・」

そして、案の定起きることができなかつた、ティアナをスバルが起こし、それから朝練をスバルが手伝うこととなつた。訓練以外で考えたシフトの練習などなど。そして普段の訓練や教導など、日は一日、一日と過ぎていく。そして、ティアナの焦りも確実に増していく。誰かが止めることもできず。

そして、運命の日が訪れる・・・

## 再開（後書き）

この小説における、アセルス、イルドゥン、白薔薇姫のUVを考えているんですが・・・なかなか難しいですね。何か良い案がある方はよろしければ感想の方にいただけると嬉しく思います。

## 絆・出会い

- - - 屋外訓練場 - - -

ついに始まってしまったあの模擬戦。私達が怒り、悲しみ、悔い、  
惑い、そして歩き始めたあの日。

今思えば懐かしく、絆を深めることにも繋がったあの日。ただあの  
ころの私達にはその時の意味を知ることはなかつた。そして時間は  
動きだす。

「どうして一人ともこんなことするのかな・・・」

下を向きただ言葉を紡ぐのは、スター・ズ分隊長・高町なのは。その  
手からは赤い血が流れ落ちる。素手でスバルの拳を受け止め、ティ  
アナの魔力刃を受け止めているからだ・・・

「教導の時だけちゃんと話を聞いてるふりをして、模擬戦で危ない  
ことをしたら意味ないよ・・・私の教導何か間違つてる？遊びじゃ  
ないんだよ」

二人ともから何も返事は返つてこない。スバルは完全にテンパつて  
いる。ティアナもそうだ。だが彼女は止まれない。ただ自分の思い  
を吐露しながら・・・泣いていた。

「私は・・・もう迷惑を掛けたくないんです。もう・・・失敗して、  
誰かの足を引っ張りたくないんです。だから・・・だから・・・私

はツ・・・・

魔力弾を形成し、なおも攻撃を続けようとするティアナ。だが、今回模擬戦・・・いや模擬戦と呼べるのだろうか・・・終わつていった。

なんで・・・分かつてくれないの・・・私が体験したあんな辛いことを味わつてほしくないから・・・だから・・・

なのはの目にも涙が見えた。一人の思いはまだ交差する」のではない。ベクトルは完全に逆を向いたままで・・・

ティアナは意識を手放した。なのはの砲撃が直撃・・・シールドも展開することもなく圧倒的な力で意識を刈り取られた。

「ティア！――!? ? ? ?」

バインドで縛られていたスバルがウイングロード上に落下したティアナに駆け寄る。当然なのはに對して怒りを覚え、なのはを睨みつけている。だが、なのはは冷たく言い切つた。

「ティアナにスバル、両者とも撃墜で模擬戦は終了。今日はスターズはこれまでとします。では解散

それ以上は何も告げることはなかつた。その背中からは悔しさと、悲しみが溢れていた・・・

side アセルス

フェイトさんの仕事を手伝っていたため、模擬戦はライトニングに参加することになっていた。そして今起こった事を、フェイトさんやエリオ、キャロとともに見ていた。

「なのはさんの思うことは分かる。私も・・・自分の事は大事にできているのか怪しいところだが、仲間を思うことは決して負けていない。何より、仲間を危険に晒してまでの勝利なんて・・・」

私の考えを口に出した後、フェイトさんは私の唇に指をあてた・・・

「アセルス・・・今は私達の出番じゃないよ。待つことだつて大事なんだよ。それにはだつて分かつてると思つんだ。だから三人とも、なのはやスバル、ティアナのことは責めないでね」

「分かつてます・・・フェイトさん」

「はい！もちろんです」

「私もです」

フェイトも微笑を浮かべている。機動六課の絆を改めて感じていたのだろう。その後、ライトニングの模擬戦が行われた。フェイトさんと私はタイマン。キャロとエリオはコンビでフェイトさんとの勝負だった。

最近までの模擬戦ではフェイトさんの速さにもかなり慣れていたのだが、アリシアと戦つて以来、フェイトさんは強くなっていた。本いわく、身体が軽くなつたとか・・・

その為か、今回も速度で完全に圧倒され終始防戦だった。ここぞと  
いつた時に魔力量と強さが足りず、攻防に決め手を欠いている状  
態だった。魔力が早々成長するわけでもなく・・・今は技術を鍛え  
ているだけだ。

キヤロもエリオもあの日以来、トレーニングに必死だ。自分の弱さ  
が許せなかつたのだろう・・・エリオ、キヤロもティアナのように  
早朝や深夜までトレーニングを続けている。フェイトさんも、止め  
たいのだが、理由を実際の現場で体験しているからこそ何も言えな  
かつた。

六課の前線部隊はかなり追い込まれていてる状況といつても間違いは  
ない。それぞれの思いが交錯し、反発している。誰もが誰も完璧で  
はない。ましてや完璧などないのだから。

side out

side はやて

このままでは部隊はFWは機能しなくなる。何か・・・静まりかえ  
つた水面に波紋を起こす、石を投げ込まなければ・・・

ここに決断を下す三人が居た。機動六課部隊長・八神はやて。そし  
てイルドゥン、白薔薇姫である。今回の模擬戦での一見を受けて決  
断を迫られていた。

「Jのままやと・・・スターズにライトニング、どちらも潰れてしまつ。そろそろ、みんなに話す必要がありそうやな」

「アセルスの件についてもだ。これまでを見てきた限り、心身の成長を感じられる。はやて、白薔薇姫、第一段階に移ろうと考へているのだが」

「私も同意見です。今のアセルス様ならばきっと大丈夫です」

「せや、アセルスの件も頃合いやうりうし、何より、なのはちゃんのこと、そして妖魔のことについて詳しく述べが必要がある。バラバラになつてゐる場合じやなくなつてきてゐるのは事実。だからこそ教導の真意をみんなに知つてもらわんと」

今回のことを見ていた首脳陣『イルドウン』と白薔薇はアセルスのだが、手をうつことを決めた。機動六課が新たな一步を刻むためにこの決断は遅かれ早かれ必要なのだ。

「もう入つてもいいか? はやて」

ドアが開くとそこには制服姿のヴィータがいた。なのはの教導の真意を理解している中でも一番といつても過言ではない。そのヴィータを呼んだのは・・・

「ヴィータ、お願いがあるんやけど」

「分かつてゐよ。今からなのはのどこに行つてくる。しぶつても無理やり許可をとつてくるからな。シャーリーにも準備させといてくれよ」

そういうなり、部屋から出て行つた。流石といつべきか・・・考へていたことは同じだった。来るべきときに備えみんな考へていたのだ。

「はやてよ、優秀な部下を持つているものだな」

「イルドゥン、それは違うで。部下とかやない。ここのはみんなが家族なんや。だから誰一人として、家族の事を考えてない者はおらんよ！」

はやては嬉しそうだ。志を同じくもつた家族同然の仲間が仲間を思い、力を貸してくれる。はやてもまた絆を感じている。が・・・

「あっ！――大事なこと忘れとった」

急に焦りだす、はやてを不審に思つたイルドゥンが問いただす。

「はやてよ、何をそんなに慌てている？」

「実は数日後に、六課に新隊員が加わるんやけどな・・・すっかり忘れとつたんよ。あははは・・・」

完全に棒読みで汗を流しているはやて。完全にだれが見ても何かを隠している事はバレバレである。

「まあ・・・準備は私のほうがしつくから、一人も、みんなとアセルスに話すことまとめおいてな。それとシャーリーにも連絡しててな」

勢いそのままに一人を追い出すと机に突つ伏すはやて。彼女を悩ますのは新加入の新人FWなのだが・・・

「私は反対したんやけどな・・・中央の連中の手が掛かってやうやな。本間にいらんことしてくれんで・・・」

ぶつべ文句を呟きつつも、書類の製作にかかる。腐つても部隊長とせまねこへいのじである。

「腐つてないわ――――」

あさつての方向に吠える部隊長を尻目に、一日の終わりが告げられる。そして、数日が経過し、奇しくも全ての出来事が重なることとなつた。

side out

数日後、海上にガジュットドローン・型が出現。機動六課の出動にあたり、なのはから、ティアナへの待機命令が下った。もちろんなのはは、ティアナを思つてのことだが、ティアナはそれに当然食い下がる。それにしびれを切らしたのはシグナムだつた。

「隊長の命令に駄々をこねるな馬鹿ものが。何もお前は見えていいのだから、待機命令をするのは当然だうが

ティアナを殴り飛ばしたあと、斬つて捨てるよつて言葉を吐く。彼女も我慢の限界を迎えていたようだ。その様子をなのはは心配そうに見ていた。すぐに帰つてくるから・・・そつしたらきちんとお話しよつて。それにヴィータちゃんにも押し切られる形だけどお願ひしてあるし。

そこにスバル、そしてエリオ、キャロが食い下がる。思いは違えど、ティアナが強くなるために努力している姿を知つてたからこそ、シグナムに食い下がったのだ。

「強くなるってそんなにいけないことなんですか？誰かを傷つけたくないから、強くなるうと努力してるんじゃないですか！！」

「ならお前らはなのはの教導の意味を考えたことはあるのか？」

不意に投げかけられた言葉に4人ともが固まる。シグナムはやれやれといったように4人を見ている。

準備をしていたシャーリーとともに現れたヴィータのこの発言により、この場を鎮静化することができた。

「なのはの悪い癖だな。ちゃんと話してないから、こんなにも面倒くさいことになつてやがる」

呆れながらも、ヴィータもやれやれといったポーズを取つている。シャーリーは少し表情が暗い。

「会議室にFWは集合。今から見せたいものがある」

- - - 会議室 - - -

「これは、なのはさん・・・それにフュイトさん！？」

エリオにキャロが呟く。この映像を見たことはなく当然知らなかつ

たのだから。アセルスを除いては。

「まだ9歳のときから、魔法を使うことになつて戦つてきた。それにこんな小さいときから、収束砲まで使って

ちゅうどスター・ライト・ブレイカーが放たれている映像が映し出されている。収束砲は身体に負担が掛かるが躊躇うことなく何度も使用してきたのだ。成長しきっていない身体に無茶を加え続け、急速が『えられる』こともなく、幾度となく身体を酷使したのだ・・・

「そして酷使してきた結果がこれだ」

ヴィータは涙を隠しきれなかつた。あの日現れたUNKNOWNにより疲れがピークに達していたのはは撃墜されたのだ。そしてヴィータは守れなかつた。

ガンッ！！！

ヴィータが我慢できず壁を殴つていた。この映像を見るたびに、あの日の自分の不甲斐なさを思い知らされる。

「なのははな、今までの疲労との重傷で、一度と空を飛ぶことができなくなるところだつたんだ。だけどあいつは諦めなかつた。まだ小さい身体で必死にリハビリをして・・・また空に帰つてきたんだ！――この辛さがお前たちに分かるのか！？？？？？」

修羅の如く詰めるヴィータをシグナムが止める。ヴィータも落ち着きまた話始める。FW4人は涙が止まる気配がない。

「あいつの教導はな、どんなことがあっても、どんなに苦しい状況でも、生きて、無事に帰つてこれる力をお前たちに付けるためなんだ。だから毎日考えて・・・お前たちが一人前のFWになれる教導をしてきたんだよーーー！」

あの日以来、なのはを守ると誓つたヴィータにとつてやはり今回のことは許せなかつたのだろう。若干怒りが全面に出始めているが、そこに手が差し伸べられる。

「ありがとう、ヴィータちゃん」

任務を終えたなのはとフュイトが会議室に来たところだ。さらに、はやて、イルドゥン、白薔薇姫もやってきた。

「本当は私からちゃんと伝えればよかつたんだけどね・・・私の教導つて、地味で力が付いてるつて分かりにくいから・・・」

誰も言葉を発せない。なのはの教導の意味を知つたからこそ、悔いているのだろう。

「ティアナ・・・ちょっと外で話しそうか」

ティアナを連れて、隊舎の前の海へ。腰をおろし海を眺めながら、二人は再度向き合つた。

一人のベクトルの向きはすでに同じになつていた。何も心配するこはない。ティアナは素直に謝り・・・なのはの胸で泣いた・・・

目に見えないが人と人その間にある確かなもの。その力が大きいほど、数が多いほど・・・人は強くなれるのだろう。

なのはちゃん、落ち着いたら会議室に戻つてきてくれる?

了解。今回がタイミング的にはベストだね

念話を終えると、一人は会議室へと戻つた。

「みんな揃つたようやな。みんなに伝えないかん」とが3つあるんや。まず一つ目はのは隊長から」

その場にいるFWは姿勢をただして、話を聞いている。

「まずは、明日からみんなのデバイスのリミッターを一段階解除します」

それを聞いた4人は喜んでいる。ティアナは先ほど一足先に話を聞いていたが。

「明日からセカンドモードで教導だから、覚悟しとけよ」

ヴィータの言葉にも4人は元気に返事を返す。憑き物が落ちたように、みんなの表情は明るかつた。

「次に一つ目。これは妖魔についてや」

エリオ、キャロは当然の「ごとく反応したが、スバルとティアナはまだピンつと来ていない。まだ妖魔との戦闘経験がないからだ。

「それについては資料をまとめてある。各自、読んでおいてくれ」  
イルドゥンから資料が配られる。妖魔とはなんなのか。特徴、出現について等など。

「これを見ながら話したのには理由があるんや」

そう言って、はやてがデータを開く。

「以前、屋外の訓練スペースに現れた新型。それに昇格試験の時の大型スフィア一台に異常があつたんよ。それらを調べてみると機械のはずなんやけど、生体反応の痕跡が微かにあつた」

「つまり、妖魔との何らかの関係性があるかもしれない」と考えているわけですね」

アセルスの答えに頷いて答える。断定までは至らないが、可能性としては考えられる。

「やう、考へるとスカリエッティは妖魔と手を組んでいることになる。我らとしては、あの方が手を組むなど考えなかつたが……」

「ねえ、そのいつも言つてゐる「あの方」で誰のことなの？」

イルドゥンと白薔薇姫は覚悟を決めた。アセルスならば耐えてくれるだろうと。

「ファシナトウールの針の城の主。オルロワージュ様だ」

5人揃つてポカーンとしている。アセルスはそのことを知らなかつた。いや・・・忘れていただけだが・・・

「ちなみに、我と白薔薇姫も妖魔だ」

ここであえてアセルスのことはふれなかつた。アセルスも自分が妖魔だとはいわない。白薔薇姫から言われていたからだ。

4人はさらに驚いている。エリオに、キャロは警戒しているようだ。

「大丈夫だよ。私達はみんなの仲間なんだから」

アセルスが4人に声をかける。4人も普段のアセルスやイルドゥン、白薔薇姫を知つてゐるからこそ、納得したようだ。

「・・・・・つ痛」

また頭痛が・・・しかも今回は、頭が割れそうなほどの痛みだ。何

だろう・・・何も考えられない・・・ただ・・・何か大事なことを忘れてる気がする・・・

けど・・・思いだしたこともある・・・

私は逃げ出したんだ。あの城から。でもなんで逃げ出したんだろう？それに何があつたのかも全然思いだせない・・・

「・・・様、ア・・・ス様」

ぼんやりと白薔薇の顔が視界に入る。どうやら少し気絶していたようだ。

「ごめん、心配かけて。もう大丈夫だから」

「アセルス様、何か変わったことはございませんか？」

心配そうに尋ねてくる白薔薇を撫で、少しだけ忘れていたこと思いだしたことを伝えた。それを聞いた瞬間、白薔薇の表情が少し明るくなっていたように感じた。

「それで急なんやけどな、アセルスのデバイスのルナとソルなんやけど、試作機のためか、かなりのメンテナンスが必要なんよ。ただ機能をストップして置けば自己修理機能があるから、勝手に治るから。だから一回シャーリーに預けてくれるか？」

本人も無茶をしたことには覚えがあるらしい、シャーリーにルナとソルを預けた。

「アセルスさん。自己修理にどれくらいの時間がかかるかは分かりませんが、待機状態で持つておく分には問題ありませんので。直ぐに調整します」

受け取るやいなや、調整を開始するシャーリー。流石といったところか物の数分で調整を終えた。

「できましたよ。またいつものように、耳に付けてあげてくださいね」

シャーリーに感謝しつつ、受け取ったルナとソルを耳に付ける。しばらくの間はお別れだけど、ゆっくり休んでね・・・

「となると、しばりくまフォートレスを使いつことになるね」

昇格試験時に作つてもらつたデバイスを見る。現在は待機状態の指輪だが。

「それはもちろん考へてます。ただし今回のデバイスは特注で、かなり珍しいんです」

そういうて、待機状態のデバイスをアセルス渡した。ネックレスで剣のような形をしている。

「セットアップ」

受け取ると直ぐに起動し、確かめることにした。

「これって……刀？」

黒と銀を基調にした鞘。そして一振りの刀。直刃の波紋で、もはや芸術品である。

「そういうえば、カートリッジシステムは？」

そう、カートリッジシステムがないのだ。

「実は、今回のこのデバイスは、もともとあつた刀をデバイスとしているんです。もちろん非殺傷設定はできますよ。纖細な刀をベスにしているので、カートリッジシステムを付けることができませんでした。一応インテリジョント型なんですが……この子全然いやべらないんです」

「うなんだ、納得して、話しかけてみるが返事も特にない。まあ、これくらいのほうが逆に頼もしいかも。」

「このデバイスには名前がないので、付けてあげてくださいね。それとこのデバイスにカートリッジシステムを付けなかつた理由はもう一つあります。アセルスさんのレアスキルを前提に作っていますので」

「まだしても事情を知らない5人は？？？状態である。ティアナはアセルスに、レアスキルもちだつたのと詰め寄っているが。」

「イルドゥンさんが内緒にしてたんですよ。魔法と縁が浅い状態で、このレアスキルは危険だからって」

一応納得して話を聞く5人。当然内容は気になるところで……

「アセルスのレアスキルと呼ばれるものは、<sup>ブースト</sup>自己強化と呼ばれるものだ。使用中は体力を消費するが、魔力量に威力、それに身体能力が強化される。また何故かはわからんが容姿に変化が見られるらしい」

こんなのがレアスキルなのかと思われそうだが、あくまでもこれは外見上そう思つてもらつためだが。当然アセルスにも・・・

「なのはにも、これを使用した教導メニューを考えてもらつている」

実際に使ってみないと分からぬが話を聞く限りでは便利そうだ。カートリッジシステムがないのも頷ける。それに容姿が変わるなら使つてることも直ぐに分かる。とりあえず体力と刀に慣れないとだね・・・

会議室が宴もたけなわ状態だが、まだ話が残つてゐる。

「最後に三つめなんやけど・・・」

はやてがしづつてゐる間に会議室のドアが開いた。そこには六課の制服を着た、女性が立つてゐた。身長は170cmはあるだろうか。長身でかつ、締まっており、出るところは出るといったナイスな体型である。グレーの髪は肩まで伸びており、黒い瞳が印象的だ。がそれ以上に左目の眼帯が一際目立つてゐる。

「失礼します。本日付で機動六課に出向となりました、エリストイ

ン・カルヴィン」等陸士であります。H里斯とお呼びください。若輩の身でありますがよろしくお願ひいたします」

敬礼を終えると、姿勢を正したまま、はやてを見ている。みんなはもううん、そのはやは溜め息である。

「H里斯」等陸士。あれほど来てはいけないと言つておいたはずです。なのになぜ機動六課へ？」

「はつ！はやて部隊長のもとで是非仕事をしてみたいと思つまして志願しました」

この会話を見ている大半の人には「つまつまうだらう。どこの軍隊あがりですかと・・・

しばりく、はやてとH里斯の会話が続いているがなにやらH里斯のほうが何かを我慢してくるようである。

「だから、しつかりゲンヤさんとのことで勉強していくよ」と云ふてあつたはずですが

この会話を聞く限りでは一人は知り合いの様だ。だがどんな関係までもかは分からない。だがそれもつかの間、だつた。

わなわなと震えるH里斯が我慢できなくなつたのか、ついにこの均衡を打ち破つた。

「母上！..私が嫌いなのですか！？」

「嫌いなわけぢやう。ただ、巻き込みたくなかつただけなんや。そ

れは分かつてほしい」

・・・? ? ?

「母上……! ? ? ? ? ?」

はやては、しまったと頭を抱えている。エリスは何をそんなに驚いているといった感じだ。しかしこの一人を除いて、機動六課スタッフは腰を抜かしている。

「主、こんなことは聞いていないですよ……」

「はやてちゃん、いつのまにこんな大きな子どもがー?」

完全にパニックになってしまった。隠していたのは悪いとはおもっていたのだが、まさかこんな形でばれるとは思つてもいなかつたのだ。

「みんな落ち着いて……!」

が、治まる気配がない。仕方ない場合の最終手段を取るしかないようだ。

「今度から食堂でシャマルを働かせるで」

「すみませんでした」

一同が謝罪の後、はやてに注目している。どうやらエリスのことを話さなければならなによつた。シャマルが何か言つてゐるが気にし

なこでおひげ。

「5年ほど前にな、任務中に記憶喪失の女の子を保護したんよ。それがエリスなんやけど、そのときの一件で、私のことを母親と思つてるんよ。まあ要するに養子になつたことなんやけど……一歳しか違わない娘つてのは、なんとも……」

「私の母上は母上だけです」

「こんな感じなんよ。それに魔導師としての資質もあつてな、ゲンヤさんとこに預かつてもらつてたんよ。最初は少し施設におつたんやけど、一緒にいいつて押し切られて、一人暮らしをさせて、たまに泊まりにいってたんよ。事情が事情なだけに、ゲンヤさんくらいにしか言えんくてな」

「しかし、これからは毎日一緒です。それにハ神・エリストインといつになつたら変えていいのですか！？」

「まだ駄目や……」の部隊はできたばつかりで色々と風当たりは厳しいのに、部隊長のスキャンダルみたいなものはもつての外や……だから落ち着くまで我慢してや」

ヴォルケンリッターにさえ隠していたせいか、はやてもみくちやにされている。しかし、エリスがそこに割つて入り、なんやかんやでまたモメテいる。

こんな感じで、起動六課の絆は深まり、新たな仲間と力が加わりました。ただ、はやは奥様となのはとフェイトにしばらく遊ばれることになるのだが。

和やかな機動六課。

そして、また近づく影が・・・

s i d e   o u t

絆・出会い（後書き）

ヴィータって……カツコイイよね

なんか内容が多くてぐだぐだしていますが、初登場のエリスもこれから大きな役目を多分？担つていいくことでしょう。

ラ○ラに似てるなんて決して『せ』いませんので、悪しからずwww  
それと、新デバイスの名前もよければ募集しております。  
よろしければお願ひします。

姉姫

針の城

「来たか」

「はい、オルロワージュ様。何故か血が騒いで、目が覚めました。あなた様の血を分けた娘アセルス、それに白薔薇姫、イルドゥン…奴では役不足でしょう」

「そなたが行くのか？」

「あなた様の為に戦う事が私の務めです。それに、白薔薇…、妹姫にもあつてみたいもの。何故、あなた様に逆らうのか？」

「そなたは止めることは出来ん。行くがよい」

ファシナトゥールで異様な存在感を示すのは、魅惑の君オルロワージュが主の針の城。そこからまた一つの影が、ミッドチルダへと消えていった。だが今回は何かが違う。それが一体何なのかはまだ誰も知るところではなかった。

そして、針の城では…。

「ラスタバン、まだあれは目覚めないのか？」

柱の陰から現れたのは、ラスタバンとよばれる妖魔である。イルドゥンとは色々と関係があつたようだが…

「はい、まだ目覚める気配はありません。しかし、目が覚めるのはもう時間の問題かと」

side out

side アセルス

衝撃的な事だらけだったあの日から数日が立ち、今では機動六課も上手く機能し始めている。一番は教導を行う側と、受ける側の溝が無くなつたことだろう。

新人FWもデバイスのリミッターをひとつ解除し、セカンドモードで訓練を行つていて。みんな憑き物が落ちたように、訓練にのめり込んでいる。ティアナや、エリオ、キャロもあれ以来、無茶のトレーニングを控えるようになった。

さて、何故私が出てこないのかといふと・・・今は街にしている。

「アセルス准陸尉、エリス二等陸士」

機動六課部隊長こと、八神はやてに呼び出されていたからである。となりには、グレーの髪の少女で、はやての娘である、エリスが立つていて。堅苦しいことは嫌いなんだけど、エリスが口うるさく言うものだから渋々従つている。

二人とも敬礼し、返事を返す。

「本日付で、二人を私の直属の部隊に配属します。私がこの隊の隊

長。普段は前線に出れませんので、アセルスに部隊の指揮権を譲渡します。エリスはアセルスの指揮のもと行動すること。それぞれのコードは私がナイト〇〇、アセルスは〇一、エリスは〇二。何か質問は？」「

私達は独立して動きたいって言つてたけど、妖魔のこともあるし、それにエリスの事をやつぱり放つてはおけないみたい。親ばく・・・

「アセルス准陸尉、何か意見でも？」

「いえ、なにもありません。謹んでお受けいたします」

はやて、そしてエリスからの殺氣を感じた私は、返答に〇・2秒もかからない。はあ・・・なんか大変そうだな・・・

「まあ、堅苦しいのはここまで。アセルスにちょっとお願いがあるんよ」

あの顔を見るかぎり何か良からぬことが起きそうなのは誰がみても分かる。しかし、エリスが隣にいると迂闊に断るわけにも…

「今日、一日休暇あげるから、エリスの買いう物に付き合つてあげてな」

・・・はい？！

そんなこんなで、私はエリスと買い物をしているといつだ。さすがに一人だけでは心配だったので、白薔薇とイルドゥンにむけつそり来もらっている。

白薔薇は凄くうれしそうだつたが、イルドゥンは渋々といった感じだつた。だから白薔薇と二人で、「パパお願い」とか「そりですよ、あなた」といつた感じでからかっていたせいもあるのだが。

「分隊長、お付き合いいいただき感謝します」

「エリス、分隊長はやめてよ。なんか硬過ぎて寒氣がするよ」

エリスは困った表情を浮かべている。今まで、どうしてたんだろ・・・・とツラツラたくるのは仕方ないとして・・・

「そんなに、悩む」とないよ。そうだね・・・お姉さまとか・・・つて[冗談][冗談]

[冗談混じり]にエリスをからかってみたのが間違いだつた。墓穴を掘つたとはこのことだ。エリスという人物に残念ながら冗談は通じない。隊長命令ならば喜んでとばかりに顔が嬉しそうだ。尻尾があれば、確実にふりふりしているところだ。

「はい、お姉さまーーー！」

「ちゅうど、冗談だつてば、それに年齢だつて私と一緒にだよーー？」

「年齢など関係ありません、お姉さまーー！」

いつしてアセルスはお姉さまになつたのだ。肩をがつくつと落とし、溜め息をつく私の横で、エリスはとても嬉しそうだ。

なんやかんやで、アセルスも諦めたようだ、そのまま買い物することにした。

「それにしてもエリスって、服とかに興味ないの？私も入ごどじやないけど、エリスだって女の子なんだからおしゃれしないとせ」

返事がないので、横を向いてみると、顔を赤くして困っているエリスが。どうやら、この手の事には無頓着らしい。それならせつかくだし、いろいろおしゃれさせてみたい。

「ほら、エリス行くよ」

エリスの手を引っ張り、服を見て回る。エリスも初めはあたふたしていたが、やはり女の子。楽しそうに服を眺めていた。そこで、店員を呼び、エリスに似合つ服をコーディネートしてほしいとお願ひすると、眼鏡を光らせエリスを見せの奥へと連れて行つた。もちろん金額に制限なしだが。何故かつて？はやてに付けておくから。

30分後・・・

奥から、エリスの叫び声が聞こえていたような気がするが、無事にエリスが出て来た。袋を提げてるのは、数着買つたからだらう。そして今の服装はというと・・・へそ出し姿が眩しい、「ねーちゃん」にそつくりである。エリスの背が高いことや、出るとじゅうは出るといつたナイスなボディのおかげで、さらにエリスの美しさが引き立てられている。ちなみにエリスに聞いたところ、これが一番動きやすいからとのこと。何かざれている気がするのは置いておこう。とりあえず、エリスが楽しかったのならこれでいい。

そして、今日一日は街で遊ぶことにした。ゲームセンターへ行ったり、映画を見たり、食事したり。年頃の女の子が休日街で過ごすようなことをエリスと一緒に・・・ただ

ナンパされたり、ナンパされたり、ナンパされたり・・・正直、面度くさかった。そのたびに、エリスがブツ飛ばしていたのは、予想通りだが。

そして、6時。周囲もすっかり暗くなり、ひと気も少なくなつてきた。荷物も多くなり、少し休憩することに。幸い近くの公園に公共魔法練習場があり、そこで休憩することにした。

「エリス、今日は楽しかった？」

「はい、とでも。お姉さまありがとうございます」

これが、彼女の精いっぱいの努力なのだらう。これ以上は何も言わ

ないでおこな。それからしばらくは今日の事について話していた。エリスは今までに同じ年と出かけるといったことがあまりなく、今回もかなり久しぶりなのだ。

「・・・」

エリスが黙っているので、エリスを見てみると、正面を見つめている。私も正面を凝視する。人影がこちらへ近づいてきた・・・

その時

「主、敵だ」

「上官、敵であります」

お互いのデバイスが警告を発する。ただ私は初めて喋ったデバイスにびっくりしていたものもあるが。

待機状態のデバイスを首から取り外す。エリスのデバイスも待機状態はネックレスのようだ。

一步一歩、こちらに近づいてくる。その一歩とともに緊張感が場を支配していく。そして・・・この均衡を破つたのは近づく影の主だ。

「アセルス殿！」

「誰だ！？」

私の名前を知っている敵・・・つまり妖魔だ。だが、今まで戦つた

3体とは少し違う気がする。

「金獅子姫様ですね。私、白薔薇と申します。姉姫さまの御噂は耳にしておりました。最も勇敢な龍姫であったと」

急に木の陰から現れた白薔薇にエリスはびっくりしていた。ただ、今はそれどころではなく再び金獅子と呼ばれる人物に相対する。

「白薔薇姫…あなたは最も優しい姫であつたと評判ですよ。その優しさで私の剣が止められますかしら?それにイルドゥンはいよいよですね」

どうやら妖魔でまちがいないらしい。それに白薔薇を倒そうというのなら私は手加減しない。イルドゥンにも何かあるのだろう。今は私が白薔薇を守る。

「戦うのは私だ!」

「ふつ、どちらでも。この剣に屈しなかつたのはオルロワージュ様ただ一人。参る!…!」

人に獅子を足した感じの外見である、金獅子とよばれる妖魔。白薔薇と同じく奴の寵姫。彼女は剣を抜き構えた。仕掛けっこないのを見るとどうやらこいつらの準備を待つているようだ。

「セットアップ」

バリアジャケットを展開すると、一振りの刀が腰に。まだ名前はな  
いが、シグナム副隊長との模擬戦でかなり扱いになれた。展開が完了すると、腰を落として、デバイスに手をかける。当然殺傷設定だ。

「行きます」

足元に魔法陣が展開される。すると同時にアセルスが一気に加速、そのまま抜刀し斬りかかった。タイミング、抜刀のスピードも問題無く、初見ではまず回避はできないだろう。だが金獅子には届いてはいない。

きいんんん！－！

金属の甲高い音と共に鍔迫り合いになつた。しかも片手で受け止めている。どうやら力では勝てそうにもないようだ。ぎりぎりと押されていふと、金獅子が何かに気付いた。

「アセルス殿のその刀は、月下美人ですね。城の宝物庫から無くなつたと聞いていましたが、アセルス殿が持つていられるとは」

そうだつたんだ・・・多分イルドゥンが持つてきてたんだろうな…つとそれどころじゃない。このまま鍔迫り合いなら押し切られる。今は距離を取らないと。次に力が入つた時上手く力の流れを読み、押しに来た力をいなして鍔迫り合いから逃れ、少し距離を取つた。

「はあはあ…強い…」

正直な感想を口に出していた。これまでの三体とは全く違つた強さ。少しの攻防でこれほどの力を感じるのだから、力の差ははつきりいつて厳しい。だが私も諦めるわけにはいかないのだ。

「これなら…どう?」

ソニックムーブで加速し、スピードを活かした連続攻撃を仕掛ける。斬り突き払い。基本動作にフェイントを加え、背後から、側面から、また正面から斬りかかるも、全てが弾かれる。完全に彼女には太刀筋が見えておりただそこに剣を出して止めていただけだった。

「大口を叩いた割りには、苦戦しているようだなアセルス殿。では今度はこちから行くぞ!」

消えたという言葉が妥当だらう。見えなかつたのだ。次の瞬間、背後から剣が振り下ろされる。

「っく……」

反応が遅れていれば、身体は真つ一つに切られていた。幸い身体が覚えていてくれたおかげで、デバイスを割り込ませることに成功していた。だが、体勢も悪く、力も負けていれば当然弾かれる。

「甘い……！」

太刀筋が急にずれ、下から振り上げる形で剣を受け、そのままデバイスが弾き飛ばされる。空中を回転しながらそれは、エリスの前に突き刺さる。完全に今はアセルスはノーガードで体勢を崩されている。いつ斬られてもおかしくはない。だがその状況をよしとしない者が一人。

「レグナ、エマージェンシーだ。いくぞ！」

〔ラジヤー。Standby Ready〕

「セットアップ」

エリスの足元に銀色の魔方陣が展開される。見た目は古代ベルカ式だがところどころ形式が違う。そして銀の光に包まれたエリスの姿が現れる。バリアジャケットは黒を基調とした胸当てや具足、小手が付いているが軽量そうであり、目立つのはその背中に映える銀のマントだろう。まさしく皇帝といったところか。そうしてもうひとつ田を引くのは、巨大な大剣型デバイス「レグナ」。彼女の身長の6割を占める長さで、なりより重そうである。

展開が完了するとすぐに、アセルスと金獅子の間に割って入り、レグナを振り回し、数合斬りあう。見た目からしてレグナは相当重そうなのだが、いとも簡単に扱っているエリスに少しひっくりしている。

「レグナ！シールド展開！」

「グランドシールド」

レグナを中心とした半径1mの防御壁が完成する。金獅子も様子を見ているようだ。性質が分からぬ以上はむやみに仕掛けてこないあたりは流石といったところか。ともかく時間ができたことは大きい。アセルスはすぐにデバイスを回収して構える。

「エリス、助かったよ。しかし……エリスのデバイス凄いね……」

「

「お姉さま、今は前の敵に集中しましょう。殺るか殺られるか…状況はかなりこちらが不利なのには変わりません。私の戦技はお姉さまには及びませんので、なんとか一人して攻略しましょう」

たしかに…今は金獅子を倒すことを考えなくちゃ…ただ闇雲に戦つても有効打を与えることは不可能だ。何か方法は…・・・

が、時間は待ってはくれない。金獅子はこの魔法壁はただの時間稼ぎの為に使つたのだと見るや、全身のばねを使い、渾身の一振りを放つ。

### スマッシュ

空気を切り裂く轟音とともに、繰り出された剣は易々とシールドを破壊するとその勢いのまま、こちらへ衝撃を伝える。今はエリスが私の前に割り込んだ状態の為、レグナで、衝撃を抑えている。だがその隙を見逃すほど金獅子は甘くはなかつた。すでに振りかぶつた状態で攻撃に移っていた。

### 巻き撃ち

至極簡単な撃ちおろしだが、速度が出れば十分な威力になる。エリスも咄嗟に防御したが、間に合わず吹き飛ばされてしまった。

「エリス！－！」

芝生を転がるも、なんとか足で踏ん張り勢いを殺すエリス。だが、口から吐き出された血がその威力を語っている。

エリスが言つた通り、こちらの状況はかなり部が悪い。だが、今のこところこれといった手が見当たらないのだ。だが、ここでもエリスが光を見出してくれた。

お姉さま、レアスキルを使う時ではないでしょうか

すっかり忘れていた。教導のメニューではまだこのレアスキルを使つてはいなかつたのですっかり忘れていたのだ。でもこれなら、やれるかもしれない。ぶつつけ本番で上手いくか分からぬけど···  
・やるしかない。

「身体の中の血をイメージして···はあああああ···」

アセルスの周囲の空気が震えた。彼女の緑の髪は紺碧に、紅の瞳は紫紺に染まつた。そう、ここに自らの意思で妖魔化をおこなつたアセルスが居た。彼女に説明したことはあながち間違いではない。ただ真実を告げるべきタイミングではないのだ。ただ今は、この力に慣れてほしいのだ。

「これがブースト···力が溢れてくる···」

金獅子は特に驚きはしない。当然このことは知っていたから当然だが。

「レグナ、私達もいくわよ」

## 「コモリトロリース」

金獅子が注意を引きつけられる。大気を震わせている、エリスの姿があつたからだ。だが、胸当てや具足などがバージされている以外には特に変化はない。だが見る限りに軽装だ。しかしそれを感じさせない力を感じる。

「ほう…これはこれは…」

金獅子がなにか興味深そうにエリスを見ている。と、そこにエリスからの念話に入る。

お姉さま、私もブーストが使えますが、燃費が悪いので長くは持ちません。一気に決めましょう

わかった、ただ確実に仕留めるから、エリス何とか時間を稼いで

分かりました。一分だけですよ、お姉さま

念話を終えると私は瞑想に入る。完全な太刀筋を脳裏に描き出す。エリスが稼ぐ一分でこれを鮮明にするのだ。そしてエリスは、レグナを軽々振り上げると金獅子に突撃する。

ぎいいいん・・・ぎいしいいい

完全に力は互角に並んだ。撃ちあいで火花を散らしながらお互い後一步踏み込めないでいた。エリスが踏み込むそぶりを見せるとき炎や電撃を使い、牽制している。何とか突破口を開きたいエリスは奥の手を使うことを決意。余力を残すことは許されないらしい。

「ソニック・・・ツヴァイ！」

さうに速度が上がる。アセルスやフェイト、エリオが使うソニックムーブと同じものなのだが、スピードが遙かに早い。ただエリスも相当辛そうだ。実際、魔力消費量はソニックムーブより多いのだから。

しかしこの判断は正しかった。金獅子のわずかな隙を突き、押し込めることができていい。レグナの重さにブースト状態なら、動きを止められる。

「よくも、こんな重い剣を使えますね」

「ええ、あいにく私は重いとは思いませんので」

そんな軽い会話も挟みつつだが、確実に押している。だが、エリスの体力、魔力もそろそろ限界が近い。額にはかなりの汗が噴き出している。徐々に金獅子が押し返し始めたその時、エリスはバックステップで距離を取つた。それはちょうど一分たつた証。次の瞬間、流れるように懷に飛び込んでくるアセルスの姿が・・・

「エリスの作った時間は無駄にはしない！」

懐に到達すると身体を捻り、流れる様に斬り払う。一連の動作に無駄がなく見惚れる刀捌きだつた。からうじて剣で防御できたようだが、勢いは殺せず後方へと吹き飛んでしまつた。剣を突き刺し、勢いを殺すとこちらを見据える。が、さらに攻撃の手は緩むことはない。最期の力を使ってエリスが仕掛けていた。跳躍した勢いをレグナに乗せ、おもいつきり振り下ろす。

### ベアクラッシュ

連續攻撃には剣も耐えることができなかつた。金獅子の剣は真つ二つに折れた・・・そして喉元にはアセルスのデバイスの剣先が触れている。

「私達の勝ちの様だな」

「アセルス様！待つてください」

白薔薇が止めに入つてきた。なんで？白薔薇を狙つてたんだよ？

「姫様、私達はどうしても生きなくてはならないのです。分かってください」とは言ひません。ですが・・・アセルス様は・・・」

白薔薇の思いをくみ取つたのか・・・金獅子は戦う意思がないことを示した。

「私の負けのようだな。白薔薇姫、あなたの気持ちはよく分かりました。私もかつて、その気持ちを胸に抱いていた日々がありました」

「金獅子姫さま…」

金獅子は振り返り、アセルスをみて咳く。

「アセルス殿、妹姫を頼みますよ」

「御待ち下さい。それでは、金獅子姫さまが罰を受けます」

「構いません。あの方に罰していただけるのならば喜んで罰を受けます。さらば！」

それに、あのエリスとかいう者は・・・いや、私が口をはさむことではなかろう。

そこに金獅子の姿はなかった。ただ色々な思いがその場には残つていた。

「金獅子姫…気持ちのいい人だったね」

今までの妖魔とは違い、話を聞いているかぎりでは、私達の見方にいずれはなつてくれるかもしれない。それに、エリスと白薔薇も無事だった。

「ええ、アセルス様、ありがとうございます」

「え、何が？白薔薇、どうこう」と？

白薔薇の言つたことが理解できずにただ聞き返すだけのアセルス。白薔薇は答えてくれず、その場から立ち去つた。あとで分かつたのだが、特殊な結界を張つていたイルドゥンの様子を見に行つていたらしい。

「はあはあ・・・お姉さまも鈍感ですね・・・」

心身ともに完全に疲労しきつたエリスが苦笑していた。一体何を言いたかつたんだろう？それより、早くエリスを休ませないと。

「エリス、お疲れさま。エリスが居ないと死んでたよ

「私一人でも勝つことは不可能でした。お姉さまの力が大きかつたです」

「私達、いいコンビになれそうだね！」

「はい、お姉さまーー！」

そんなこんなで、私達の休日は幕を閉じた。

そして・・・

「なんやー！この請求金額はーーー！」

そこには、エリスの服の代金、そして公園の修理費が、はやてに請求されていたのだった。

針の城

「金獅子か・・・」

「はい、オルロワージュ様

「覚悟は、できてるのあります」

「もううんざりでござります」

針の城・・・そこでは、悲鳴と苦痛に満ちた叫び、そして嬌声が  
木靈した・・・

side out

姉姫（後書き）

金獅子姫・・・初見でやはり負けた記憶があります。あのころ、マップを行き来ばかりしてたので。

今回はエリスの戦闘シーンがありましたが・・・もつと躍動感を出せるように頑張りたいですね。

アセルスのデバイス名何にしようかな・・・

「ティア・・・起きてよー、朝だよー、時間だよー」

私ことスバル・ナカジマは、一段ベッドの下で眠る相棒、ティアナ・ランスターを起こしている最中だ。ここ最近で色々な事があつたけど、それ以降は今までのティアに戻ったみたい。それに、エリオやキヤロとも深い話もできるようになった。

うん！ またいつものように戻れてよかったです。それはそれで、このなかなかけしからんボディーをお持ちの寝ぼすけをどうせつけて起こうか・・・

・・・

閃いた。すぐにティアの上に跨るとそのまま自己主張の激しい双丘にセクハラを開始。そして、唇を重ねていく。

いいよね？ そんな自己解決を済ませるやいなや、セクハラの速度は上がつて行く。が、ここまでされて目が覚めないわけもなく・・・

「何・・・してんのよあんたは！――！」

はい・・・見事にベッドから投げ出されました。だって、あんなに無防備で寝てたらさ・・・そりや襲いたくもなるよ。視界をティアに向けると顔を赤らめ、シーツに包まっているティアが凄い勢いで睨んでいる。

「ほんとにあんたは、いつになつたらセクハラを止めるのよ…！大体、私が寝不足なのは、あんたのせいでしょうが…！」

「ええ――だって、ティアが可愛く鳴くからつい止まらなくなつちやつてさ・・・／＼／＼」

その言葉を聞くと、夜の事を思い出したのかさりげに顔を赤らめる。普段はイニシアチブを持つてはいるのはティアだが、どうやら、夜は違つりらしい。

「ど、とにかく。準備があるんだし、早く着替えていくわよ」

「ティア！ 実はね・・・ 今日の訓練の開始時刻は2時間遅いんだよそなこと聞いておらず、どうこうひとつといった感じでスバルに問いかける。

「私は聞いてないわよ、そなこと…？」

スバルがマツハキャリバーに届いたメールを展開すると、はやてからFW宛てのメールが届いていた。そこには・・・

色々あつたから、みんなも疲れてるし、色々と補充したいやろ？ 明日の朝はいつもよりゆっくりしていいから、夜はみんな頑張つてなー！

と、こんな感じのメールが届いていたのだ。

それを見たティアはベッドに突つ伏すしていた。「もうやだー」つてうめき声が聞こえていた気がするのは気のせいだ。

時計を見ると5：00を過ぎたところか。再び、スバルを見ると、もひ何といいますか……手をわきわきさせている。

「まだ時間あるしね……ティア……」

「やばい……これは……まずい。

普段の訓練のおかげか、危機的などとに關しての察知が鋭くなっている。そのためか、この後起きるであろうことも予測はついたのだが……

「……っ、バインド！？」

なんて魔法の無駄遣い……それにスバル……バインドなんて使えたの？

「ティアを逃がさないためだよ……／＼／＼

努力の方向性を間違つて相棒に溜め息をつきながらも、すでに諦めた。こうなったスバルは止められないからだ。はあ……今日の訓練、身体持つかな……

こうして朝から嬌声が木靈する……それはもちろんこの部屋だけではないのだが……

流石にバインドはまずかったのか、後ではやてに怒られることになつたが。

side テイアナ

「はーい、お疲れさま。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様でした」

なんとか・・・身体はもつたけど・・・この後どうしよう・・・朝から体力を削られ、こつして訓練に臨んだけど、午後のこととか全然考えてなかつた。今の状況はかなりやばい。油断すると眠ってしまいそうだ。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第一段階クリアの見極めテストだつたんだけど・・・この前、みんなのデバイスのリミッターを解除したでしょ？ほんとに大丈夫か今日で確かめてみたんだけど」

え？ そりだつたの？ でも、またこんなとき・・・はあ。

溜め息をつく私をあいて、なのはせんはフュイトさんとヴィータ副隊長に意見を求めている。

「合格」

「はやつーー」

スバルとのハモリは素晴らしいのだがそれはさておき

「こんだけみつちつやって、不合格なり逆に大変だつてこつた」

エリオとキャロル、あはは・・・と笑っている。確かにこれだけやつていいのだから、できて当然か。あの日以来、私も少しずつ変わろうと決意した。徐々にだけど、変わらなきゃいけないって感じたから。

「私もいい線いってると思うから、これにて一段階終了!」

「やった――――」

「うん、すこしづつだけど、私も強くなってるんだ。なのはさんのことを・・・信じて、一歩ずつ進もう。」

「デバイスリミッターを正式に一段解除するから、後でシャーリーのところへ行ってきてね」

「明日からは、セカンドモードを基本形にして訓練すっからな。今日みたいに前の段階の復習は各自やっとけよ」

「はい!、って明日から?」

「ああ、訓練再開は明日からだ」

つまり、つまりですよね・・・つまり今日の午後は・・・

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「みんな入隊日からずっと訓練漬けだったしね

4人が顔を見合せた。つまりこれは、あのフラグが立ったわけですね。

「そんなわけで」

なのはさんがもう一度全体に通告するよりこれからの方の事を伝える。

「みんな今日は一日お休みです。みんな街に出かけて遊んでくるといいよ」

「也——也——」

こうしてFW達の休暇が始まつた。

Side out

Side アセルス

私は食堂で、FW4人を除くメンバーと共に食事を取っている。ちなみに私とエリスは仕事。この前の休暇をここで返すのが普通やろ? とはやてに押し切られたからだ。

「まつたく・・・」

ぶつくれ言いながらも、今日の機嫌は良かつたりする。何故って？  
昨日は白薔薇と・・・おつと、危つて妄想にどっぷり浸かるところ  
だった。

それはさておき、ＴＶからはレジアス中将の表明について報道され

ている。

「なんか堅苦しいな、この人」

「お姉さま、レジアス中将は古くからの武闘派ですか？」

隊長陣は、食事を止めて放送を聞いていた。はやてもこの部隊を指揮する立場として、彼とはなにかとあるようだ。

そして画面右には伝説の3提督の姿もあった。

ミゼット・クローベル ラルゴ・キール レオーネ・フィルス

管理局の今の形を作り上げてきた功労者。だがヴィータに言わせれば、ただの老人会らしいが。

「さてと・・・エリス、先に仕事してくるから」

「私も行きます」

「それでは先に失礼します」

私とエリスはそういうて食堂を後にした。これから書類を片付けるとなると骨が折れそうだ。まつ、やるしかないんだけどね。

私達が、仕事を始めたころ、スバルはティアナと。エリオはキャロと一緒に街へ出かけていった。私には遊ぶことが楽しいという感覚はいまだにあやふやだけど、この前エリスと一緒に出かけた時は楽

しかったと思つ。やつ者と、隊長達つて……魔法の犠牲者でもあるのかも……

「変な」と考へるのは止めよーと思つた

「はい、お姉さま」

ここから一人は仕事に没頭し、ものすごい勢いで書類を片付けていくのであった。

side out

そのじる・・・

スターズとライティングの見送りを終えたのはとフロイト。ちようど、ヴィータとシグナムとすれ違う形になつた。

「ヴィータちゃん」

「それにシグナム。外周りですか?」

「ああ、108部隊と聖王教会にな

「ナカジマ二佐が合同捜査本部を作ってくれるんだつてさ。そのへんの打ち合わせ

「ヴィータちゃんも?」

「私は向ひつの魔導師の戦技指導。まったく、教官資格なんてとる

もんじゅねえな

「こやははは」

ヴィータちゃん、相変わらず可愛いな。・・・フロイトちゃん、睨まないで。

「捜査周りなら私も行つた方が」

「準備はこちらの仕事だ。お前は指揮官で、私はお前の副官なんだぞ」

あ、フロイトちゃんこいつのまだ慣れてないんだ。困つてゐ困つてゐ。

「ありがとうございます。で、いいんでしうか」

「ふつ、好きにじる」

一方・・・

シャーリーとリインはテバイスの調整で忙しそうだ。リミッターの正式な解除に、レイジングハートのエクシードモード、バルディッシュのザンバーの調整。さらにはリインの調整とこちらも多忙である。だがこれも、みんなを守る為の大変な仕事。一人は楽しみながらも調整とチェックを行つていた。

仕事もひと段落したところで、遅めの昼食を取つているところだ。エリスと白薔薇、それにはやてだ。

「はやて、この扱いひどくない？」

「何いとるんや、公園の修理代どうしてくれるん？」

「うちは命がけだったていうのに、この人は・・・

が、思考を読んだか読まないか、エリスがものすごい形相でこちらを見んでいる。はあ、ほんとにはやて大好きなんだから・・・

「まあまあ、二人とも仲良くしてや。一人も大事な家族なんやから機動六課、それははやてにとつては家族と同じ。少しあはやての気持ちも理解しなくちゃ。

「今日一日、何もないといいんやけどな」

だが、そんな淡い期待はすぐに破られる。エリスの「バイス、レグナ宛てに通信が届く。

「エリス、聞こえる？」

「その声は、ギンガ陸曹」

通信の正体は、ギンガ・ナカジマ陸曹。何を隠そうスバル・ナカジマの姉である。そして、エリスが預けられていた部隊の上官でもある。

「お久しぶりです、ギンガ陸曹。今日はどういった御用件で」

「久しぶりの再会を喜んでる場合じゃなくなつたのよ。八神部隊長につないでくれる?」

「隣にちょうどいところだ。部隊長」

はやてにデバイスを向けると、ギンガも久しぶりなのか少し緊張している。

「お久しぶりです、八神部隊長。実は事故の現場検証に来ているのですが、奇妙なものを見つけまして」

映像が少し動く。飲料水や缶詰ばかりで、特になにもおかしな物はないが、すぐにそれは目にとまった。

「ガジェット!!」

「やはり、御存じでしたか。それにあちらを」

映し出された映像には何やら液体が入つてあつたであろう、ポッドのようなものが映し出された。

「ギンガ陸曹、あなたも同意見でしょ?。これは・・・生体ポッド」

「私も・・・同意見です」

そして期を同じくして、キャロから全体通信が

「パトロライティング04、緊急事態につき、現場状況を報告します。サードアベニュー・23の路地裏にてレリックと思しきケースを発見。ケースをもつていたらしい女の子が一人」

「女の子は意識不明です」

「指示をお願いします」

六課全体に現在の状況が映像付きで報告される。

これを見ていたのはからも指示が降りる。

「スバル、ティアナ、ごめんお休みはいつたん中断」

それにつづけてファイトからも指示が。

「救急の手配はこっちでする。一人はそのままケースと女の子を保護。応急手当てをしてあげて」

スターズ、ライトニング共に指示を受けると返事を返し、行動を開始する。

そして、食堂にいた私達は・・・

「全員、待機体勢。席をはずしてゐる子達は席に戻つてな。安全確実に保護するよ! レリックもその女の子も」

「了解」

「ギンガ陸曹、ナカジマ三佐から許可は取つてあるからすぐに現場に急行してや。現場で、この一人、アセルス准陸尉とエリス二等陸士と合流後、FWの援護を」

「了解しました。では急行します」

ギンガからの通信を終えると、直ぐに命令を下す。

「ナイト〇〇から〇一へ、ナイトの指揮権を委任します。ナイト〇一及び〇二は現場へ急行。ギンガ陸曹と合流後、スターズ、ライトニングと合流すること。以上」

「了解しました」

敬礼を返すとすぐに現場へと急行する。隊長達、それにシャマルにリインも一緒にだ。ヴァイス陸曹もすでに準備を整えており、直ぐに離陸することができた。

席に戻つたはやは静かに咳く。

何かの始まりかもな・・・

side out

side スカリエツティ

「レリック反応を追跡していたドローン？型6機。全て破壊されています」

「ほお、破壊したのは局の魔導師か、それとも当たりを引いたか・・・」

「確定はできませんが、後者のようですね」

「素晴らしい・・・すぐに追跡をかけようではないか。

通信越しに話をしているのは、スカリエッティとウーノと呼ばれる人物。そこに赤毛の少女がやってきた。名前はノーザンといひらしい。自分の目で確かめてみたいことだが、ジョイルにウーノにそれぞれ止められてしまった。しぶしぶ今回は引き下がったが、納得はできていないようだ。

「ドローンの出撃は様子を見てからにしましょう。妹達の中から適任者を選んで出します」

あとは・・・

「やあ、優しいルーテシア。レリック絡みだ。ひょっと手伝ってくれるかい？」

ビル屋上に佇むルーテシアは、ただ頷くだけだった。

「ありがとうございます、今日は別のおもちゃも用意してあるから、巻き込み

れないよ」としておくれよ。優しいルーテシア

side out

## 休暇（後書き）

ギンガとの出会いが少し違います。  
また、今回はアセルス側からの休暇の場面を書いています。

s.i.d.e シグナム

機動六課が緊急事態で慌ただしくしているなか、シグナムは聖王教会本部を訪ねていた。そこには機動六課後見人の三人の内の二人が。一人は制服姿が珍しい、クロノ・ハラオウン提督。そしてカリム・グラシアこと騎士カリム。私はシスター・シャツハに案内され二人の待つ部屋へと案内される。

「失礼します」

「ああ、シグナム。お帰りなさい」

「合同捜査の会議の方はもう」

「ええ、滞りなく」

お一方はちょうど、六課の運営面の話が済んだところらしい。ここからは任務のことについての話とのことで、私も同席して話を聞くことになった。

その話の途中だ。直接通信が騎士カリム宛てに届く。相手はそう、主はやてからだ。

「そう、レリックが」

「それを小さな女の子が持つてたいうんも気になる。ガジェットや

召喚士が出てきたら市街地付近での戦闘になる。なるべく迅速に確実に片付けなあかん」

「近隣の部隊にはもづっ?」

「うん、市街地と海岸線の部隊には連絡したよ。奥の手も出さなかんかもしれん」

「やうならなこと祈るがな」

カリムが少し考えて後、すぐにシグナムも部隊に帰るようだと伝える。帰りはシャツハが送ることなので、かなり早く帰ることができそうだ。急いで部隊に戻るべく、聖王教会を後にした。

side out

エリオとキヤロにスバルとティアナが合流してから數十分後、ヘリが到着し、すぐにシャマルが診断を行つた。バイタルも安定しており危険な反応もなく心配ないらしい。それにはみんな安堵の表情を浮かべていた。

「みんな休みの途中だつたのにごめんね

「いえ、大丈夫です」

フェイ特の言葉にもエリオが正直に返す。少しの間だつたが、休みを満喫できていたようだ。

「！」の子はへりで運ぶから、みんなはこっちで現場調査ね

「はい！……」

そして、眠っている女の子を運ぶべくのはは腰を落とす。だがその目に映るのはただの小さな女の子であった・・・

FWが地下水路への調査へ向かうまさにその時、ロングアーチが地下水路に現れたガジェットを捉えた。

「地下水路に数機ずつのグループで総数・・・16、20・・・30！？それに海上方面に12機単位で5グループ」

この報告にはやての第一声は「多いな・・・」だ。確かにこれは多すぎる。地下水路に現れたガジェットもかなりの数だ。副官のグリフィスも判断を待っているようだ。

なんとか人員を多くかけるのが最善なのだが・・・そこに通信が入る。

「スターズ02からロングアーチへ。こちらスターズ02。海上で演習中だつたんだけどナカジマ三佐が許可をくれた。今、現場に向かってる。それからもう一人つて、もう話はついるらしいけど、ギンガ陸曹も向かってる」

「さつき、通信を貰つたばかりやからな。ほんなら、ギンガは指示通りアセルス達と合流後、スバル達と合流して。ヴィータはリインと合流。協力して、海上の南西方向を制圧」

「南西方向、了解です！」

「なのは隊長とフロイト隊長は北西部から」

「了解」

「ベリの方はヴァイス君とシャマルに、任せてくれか？」

「お任せあれ！」

「しっかり守ります」

一通りの指示が飛ぶと、FW達も動き出す。アセルスとエリスは別行動になるため、いつものスターズ、ライトニングの指揮はティアナが取る。

「ああみんな、短い休みは満喫したわね」

「ここからは切り替えて、お仕事モードで頑張って行こう！」

4人が頷くと、デバイスを前に掲げ、声を揃えて言い放つ。

【Standby】

「セーブツアーップ」

4人それぞれが異なる方法でバリアジャケットを展開していく。そして展開が終わると、すぐに地下水路へと降り、女の子が持っていたらうつもう一つのレリックの捜索を開始した。

ちなみに、アセルスと、エリスは先行し、ギンガとの合流を急いでいた。ただ二人にはどことなく嫌な予感がしていて、早くこの件を片付けたかった。

そして、なのはとフェイトはバリアジャケットを展開、北西部の制圧を開始。そしてへりからはバリアジャケットを展開したりインも南西の制圧へと赴くのであった。

時を同じくして、紫髪の少女ルーテシアも行動を開始。奇しくも、六課と同じ地下水道へと向かうのだった。

「いこい……ガリュー」

少しの眩きと共に、少女も自身を転送するのだった。

side out

side アセルス

スバル達4人が地下水道へ降りたころ、私とエリスは別口から地下水道へと降下。当初の第一目的のギンガ・ナカジマ……スバルの姉と合流を急いでいた。すでにバリアジャケットは展開は完了。後はお互い連絡を取り合つて合流するだけだったが、予期せぬことは往々にしてある。今回も例に漏れることなく起こった。

「あれは・・・イカ?」

エリスもそんな馬鹿なといったように前方を見つめている。下水道と言つても問題ないこんな場所に・・・イカがいるのだ。だがただのイカなら可愛いが問題はそうではない。デカイ・・・そしてこいつは魔物である。

「まさか・・・こっちの世界に魔物がいるなんて・・・」

アセルスは忘れていたが、こっちの世界に迷い込んで初めて戦ったのは魔物である。が、そんなこと置いておき、戦わざるを得ない状況になつていて。

「倒さないといけないらしいね・・・エリスやるよー！」

「準備はできています。行きます！..」

時間も惜しく、また魔物ということで遠慮は不要。二人は最初から全力で倒しにかかる。が、二人にとつて現在の状況は非常に厳しい。何故か・・・それはここが限られた空間だということだ。

「くつ・・・しまつた」

巨大なイカ「デビルテンタクラー」は自慢の食腕を使い巧みに攻撃を仕掛けてくる。ただ奴はすっぽりはまつているらしく、その場から動けないのが唯一の救いか。だが食腕の一振りは想像しがたい程の威力を誇っている。

「デバイスが、使えないなんてね。ほんと二人揃つて長い物を使う

もんじやないね「

「上官、申し訳ございません」

「・・・」

私のデバイスは相変わらずの黙んまり。レグナも相変わらずといったところか。しかし、デバイス無しで魔物と戦うことは決して楽ではない。が、足を両手で防いでいるとき、指輪が光った。そう、主の窮地を開すべく準備を終えていた。

「Jacket Purse and Standby】

「セットアップ」

アセルスも意図を汲み紅いバリアジャケットをパージ、即座にデバイスを起動しバリアジャケットを展開。純白の小手に具足を装備した白き姫・・・フォートレスを起動したアセルスが舞い降りる。

エリスも驚いていたようだが、直ぐに状況を把握し、自分の役割を全うし始める。レグナは振りますことができないので、今は完全に防御に徹する。グランドシールドと刃身を使い攻撃をかわしている。そしてオフェンスはというと・・・

「そんな大ぶり、当たらないよー」

デビルテンタクラーの食腕、足を使った10本の連續した振り下ろしを全て避ける。ステップにウィービング、または局所的なシールドを使い、流れるように受け流していく。拳と脚しかないなら間合いを詰めることは必須。そして、直撃との恐怖と向き合い徐々に距

離は詰まつて行く。そして後一步を踏み込んだ。

「あやあああ

エリスも一発入ったと確信したまさにその時、デビルテンタクラーは口から大量のスミを噴射し、視界を奪つた。わずかの思考の混乱がまづかった。身体が硬直、防御に移れない。次の瞬間、器用に横振りされた食腕が胸に直撃した・・・

そして、そのままエリスに向けて弾き飛ばされた。エリスも緩衝魔法を使い、受け止めたが、背後の壁を一枚貫通するハメに。

「・・・つづ

「お姉さま、大丈夫ですか！？」

少しほんやりする意識で、身体の状態を確認する。痛みはあるものの、幸い以上はないようだ。直撃の瞬間、オートでプロテクションが発動していて身体への直撃は避けられた。

「あのイカ・・・絶対に潰す！――！」

最近の恨みを晴らすとばかりに私は激情していた。本当なら切り刻みたいのだが、この状況では殴り、蹴り倒すことに専念する。身体の感じが元に戻つたのを確認すると、すぐさま突撃をかける・・・が、あのイカは食腕を挙げて何かしている。不審に思った矢先、エリスの叫び声が地下に木霊する。

「お姉さま、下がつてください……魔力反応、かなり大きいです！……！」

その言葉を聞くと突撃を止め、防御に。イカの足元を見ると、徐々に水が溢れだしている。

「イカのくせに魔法まで使うのか？」

吐き捨てる言葉をイカには届くわけもなく、魔力で作られた水が徐々に高くなつていいく。

「こんなところで、流されることになりそんなんて、冗談じゃないね」

魔力なら魔力でなんとか防ぐことはできる。集中して気功をプロテクションに練り込む。だが、イカの目がこちらを馬鹿にしたように笑っていた。そこで冷静さを完全に吹き飛ばされた。

「あまり調子に乗つてると痛い目にあつぞ……！」

ブーストを使うわけにもいかないのだが、感情が逆なでされており、いつ使つてもおかしくない状態だ。が、折しも先ほど発言は当たる事になる。

「ええ、私も同感です」

突如、イカの側壁が吹き飛んだ。そして現れた影が、イカに渾身の左ストレートをぶちます。

## ボコッソツ

なんとも表現しがたい音と共に瓦礫を飛ばしながら、イカは反対の壁を突き破り吹き飛んだ。

イカを殴り飛ばした影の正体は・・・命流すべき人物。スバルとよく似たデバイスを左手に装着した紫髪の女性。

ギンガ・ナカジマ陸曹だった。スバル・ナカジマの姉で、S.Aの先生で階級も歳も2つ上とかなんとか。

「アセルス准陸尉ですね。ギンガ・ナカジマ陸曹、現在よりナイト01の指揮下になります。よろしくね、エリス」

急な展開だが、事前に確認はされてあったことであり、今はあの憎たらしいイカを潰すことが先決だ。

「私のことはアセルスでいいよ。それよりあつちは少し広いみたい。いくよ」

イカを追って穴を進む。後ろでは、エリスとギンガが少し話ていたがすぐに緊張した面持ちになつた。そして、イカが吹っ飛んできた場所と思われるところに着いたが肝心のイカの姿が見当たらない。少し開けているが天井が低すぎるため、デバイスは振りませず、状

況は変わらない。周囲を見渡していると、少し奥に貯水用の窪みを見つけたが、イカはそこまで飛んでいた。そしてそれはイカにとっては最大の幸運。食腕を挙げ、準備は整っていた。

地下水道に響き渡る轟音。そして巨大な波が押し寄せてきた。イカが狙っていたのはこれだったのだ。

## メールショトローム

よくよく見てみるとガジェットやらが一緒に流されており故障している。だが下水も流れていることで、これを直撃するのは正直嫌なのだ。なので私も対抗することに。

魔方陣を展開、詠唱に入る。同時にエリスとギンガは後ろに下がった。

「眼前に躰す全てを飲み込む天より流れるは光の波」

## フラッシュフラッシュ

詠唱が終わると、私の前から光の波が押し寄せる。これまたガジェットが巻き込まれ故障、爆発していたが。

お互いの波がぶつかり合い、波は天井を勢いよく貫き消滅。地上まで広々とした穴が出来上がった。これにはイカも目を見開きびっくりしていたようだが、私はすでに間合いを詰めていた。

「ほら、おとなしくしててよ」

## サミング

簡単にいうと眼つぶしだ。デカイ目に目がけて拳を一発叩きこむ。潰れるのはいやだつたので軽くだつたがダメージはあつたようだ。これでイカの動きが完全に止まつた。この機を逃すことなく、三人がイカをトライアングルに囲む。

「エリス、格闘いくよね？」

「もちろんです、お姉さま」

レグナを収納すると、軽くステップを踏みを準備をしていた。ギンガは言うまでもない。

「ギンガ、エリス、私に合わせて！！」

「了解！！！」

三人の身体が光る。そしてアセルスから仕掛ける。三角形の一辺を描くように、鋭く蹴り込む。続けてエリスも一辺を描くように蹴り込む。最期にギンガが一辺を蹴り書きトライアングルが完成する。

三人は合わせたかのよにイカに接近、そして拳を突き上げる。

「昇龍・・・ぶちぬけ！－！－！」

### 秘技 三龍旋

それぞれの魔力光、深紅、銀、群青の龍が螺旋を描き、イカを飲み込んでいく。昇龍により地上まで飛ばされたイカは・・・そのまま光となつた。

「すうい・・・アセルス、今のつて？」

「ああ・・・詳しく述べは良くわかんないけど、とにかく凄かつたってことだ」

「二人とも、先を急ぎましょ。ガジェットの反応はこれからにはあります。先の戦いでほとんど落としました」

エリスの説明に首を縦に振り、直ぐにティアナ達に合流するために駆けだした。

「ところでその人造魔導師つて？」

私は疑問に思つたことをギンガに尋ねた。先ほどの会話に再々できているこの言葉。今回の任務にも関わつてゐることはよくわかつ

た。

「優秀な遺伝子を使って人工的に産まれた子達に投薬、または機械部品を埋め込むことで後天的に魔力を強化したり、能力を持たせる。それが人造魔導師」

「もつとも倫理的な問題や技術、コストといった問題が生じるからよっぽどな連中じゃない限り手は出さないはずだ」

ギンガの説明に加え、エリスも説明をしてくれた。なるほど・・・そんな技術使つて何をしようっていうのか。だが、確証は持てないが、その技術を成すことが可能な人物が裏にいることだ。

移動中ながら思考に耽っていた私の後ろで、ギンガが連絡を取つていた。どうやらティアナと連絡が付いたらしく、すぐに合流できそうだったので。

そしてすぐに目的の場所に到達。がそこは行き止まり。さて、道を間違つたかと思ったが、ギンガは迷うことなく壁を破壊した。

「姉妹つて似るもんだね」

聞こえないように囁くとギンガを追つて壁の向こうへ。そこで、身構えていた4人と合流できた。

「ギン姉！それにアセルスにエリスも」

ここにFWの合流がなった。そのじゅくはなのはさんとフェイトさんが頑張ってくれているようだ。

「みんな、再会したばかりだけど、お敵さんみたいよ」

ティアナの声で全員が戦闘体勢に切り替わる。現れたのはガジェット？型？型の混成小隊、そして刺又を持つた魚人。魔物だ。

動いたのはティアナ。多重弾核射撃を使いながら、ガジェットのロースを読んで無駄なく落としていく。エリオは狭い中で高機動戦闘をやつてのけ次々に三枚におろしていく。キヤロはフリードを使役し、次々と燃やし、破壊していく。背後の？型はナガジマ姉妹が当たつていた。

「トライシールド」

?型の放ったエネルギー弾を最低限のシールドで弾くと、アームを拳で受け、均衡状態を作り出す。

「一発で決めるんでしょ？」

「もちろんー、ディバイーン」

思いつきり踏み切り、ギンガの上を越えていく。？型はこれに気付きバリアを展開するが振り下ろされた右腕に簡単に突破され装甲は貫通。

「バスターーー！」

止めどばかりに内部に打ち込まれ爆散した。

そして、のこつた魚人は・・・残らず壁にめり込んでいました。

戦闘後、レリックがあるであろう場所に到着。すぐに捜索が始まつたがそうそうに、キヤロがケースを発見した。キヤロがケースを抱えているのを見てこれからどうやって地上に戻るか考えていた時だつた。

何かが柱を蹴つているような音が聞こえた。そしてその音はキヤロへと近づいている。正体はすぐに分かつた。イルドゥンから報告を受けていたあいつだ。

キヤロの前に割つて入り、すぐさまプロテクションで受け止める。受け止めた相手は・・・その通りだった。

「ぐッ！？重い……」

じりじりと押しこまれるが、この広さなら問題はないと判断した私は、首に下げているデバイスを起動。すぐにジャケットは深紅のものに変わり、腰にはデバイスが備わっていた。

「はあああーー！」

居合の要領で、斬りかかりつた。さらにエリオがこれに合わせてサイドからの攻撃となつたが、キヤロが魔法により吹き飛ばされた。それに気付いたエリオがかばう形で受け止め、柱へとぶつかる。キヤロは完全に不意を突かれたので意識を失っているが、エリオはなんとか大丈夫のようだ。だがキヤロをかばうことには変わりなく、その場に固定となってしまった。そして、私は奴と鍔迫り合いになり今度は押し込めている。ケースを持って逃げようとした時、押し

込められていく光景が目に入ったためか、はたまたスバルの「その女の子、それ危ない物なんだよ。こっちに渡して！」といったことが効いたのか、歩みをとめた。その隙を狙つてオブティックハイドを使っていたティアナがダガーモードを起動しており、その刃は首筋にあてられていた。

「『めんね、乱暴で。でもこれ本当に危ないものなんだよ』

ルーテシアは表情こそ変えないも内心、ビビりようか考えているところだ。そこに念話が。

ルールー、1・2・3で田をつぶれ

1・2・スター・レンジホイル

爆音と光がこの空間を支配した。視力に感覚を一時的に奪われ、ティアナは拘束していたルーテシアを逃がしてしまった。なんとか視力を取り戻し、ルーテシアに銃口を向けるが、何者かに蹴り飛ばされた。

アセルスは相変わらず斬りあっている。エリスはすぐにその影を追いかける。そして見つけた。

「レグナ、やつと出番だ。遠慮はいらん。斬り伏せろ！」

「上官、了解です」

豪快に振り下ろすと、そこで何がが避けるのが確認できた。だが肩には出血があることから、避けきれなかつたようだ。

「サンダー、ガリュー。無理しないで」

ルーテシアが呟いた先にはサンダーと呼ばれるオーガがいた。

すぐに引くと、アセルスと斬りあつっていたガリューと呼ばれる生物も引いた。

「たくもー、本当に心配したんだからな。でも、この烈火の剣精アギト様が来たからにはもう大丈夫だ」

リインと同じくらいの大きさの赤髪の女の子がいた。どうやらさつきのは彼女の仕業らしい。相手のデータがない以上は迂闊に手を出せず、みんなは一か所に集まっている。

「おひおらおら、お前らまとめてかかつてこいやー」

「遠慮なく」

アギトはえつ！？といった顔をしている。それはそうだ。眼前ですでにレグナを振り下ろしたエリスが居たからだ。

「うおっ！？危ねえじやねえか！…！」

間一髪かわしたようだが、エリスは舌打ちをしていた。

「貴様がかかつてこいといったのだろう?」

「それにしたって汚いだろ?...」

「汚いのはそつちも同じだらうが」

言ごくるめられたアギトは空中で地団駄とうなんとも奇妙な光景を演出してくれている。そして彼女もまた短氣らしい。

「絶対ゆるさねえからなーー!」

戦いは続くのだった。

side out

## 激戦地下（後書き）

感想やアドバイスがあればお願ひいたします。

サンダーまさかの登場 www

遅くなりました（――）

「うーーーりあ ああ！」

アギトと呼ばれる女の子が火炎球を4発作りだすと、こちらに攻撃を仕掛けてきた。ただこちらには届いておらず、手前で爆発し粉塵を巻き上げた。だがアギトの狙いは攻撃ではなく視界を奪うこと…」」」にガリューが合わせるよう煙を裂き突っ込んできた。

「つぐーーー！」

エリスの奇襲を不発に終わると、全員が退路に用意している通路の前に集まっていた。だが7人と多く少し窮屈なこの状態を狙われた感じとなつた。

「私が！…はあ ああ・・・・！」

ギンガがいち早く動き始めると、ガリューの拳と相対する。ローラーで滑りながら素早く腰を回転させると、左手のブリッヂキャリバーを前に振り抜いた。右手と左手…ぶつかり合つた拳は均衡を崩すことなく、その衝突によつて生まれたエネルギーはやがて爆発…お互いは後方へ吹き飛んだ。

お互いが体勢を立て直した矢先、一人飛び出しているギンガに攻撃が繰り出されていた。アギトがすでに火炎球の形成を完了していたため隙を窺つていたようだ。

「ギンガさん、動かないで」

何も動いていたのはアギトだけではない。ティアナとスバルがギンガのフォローの為に打つて出ていた。壁から少し身を晒すと即座に2発。放たれた火炎に吸い込まれるように命中した。スバルはギンガの前に仁王立ち、シールドを開け攻撃からギンガを防ぐとすぐに後退した。ティアナの射撃の援護もありアギトも攻撃を中断するしかなかつた。

一連の攻防の後、アセルスとスバル、ティアナが状況の確認をしていた。

「ティアナ、人数的には有利だけど、あのルールーって呼ばれてる女の子…かなりの魔力持つてるし、あのガリューとかいう虫とサンダートっていうオーガ。かなりできると思う。ただ私は残つて捕まえる選択もありだと思つけど」

「アセルスの言つことも一理あるけど、私達の任務はケースの保護よ。後退しながら敵を引きつける」

「今こっちに向かつてゐるヴィータ副隊長とリイン曹長と合流できればあの子達を止められるかもしねれない」

「私もスバルとティアナの意見には賛成だ。相手の力が未知数な以上、無理はできない」

キヤロを支えているエリオも賛成の意味を込め首を縦に。新人達の意見がまとまつたところにこの会話を聞いていた待ち人から連絡が届く。

いい判断だ、スバルにティアナ。今そちに向かつてゐる

ヴィータ副隊長！？

リインも一緒にですよ

どうやら、こちらに一人が近いところまで来てくれている。後は、どのくらい後退するかだが……。

「ルールー、こっち何か近づいてくる……魔力反応……でけえ！」  
？」

ルーテシア、アギトが頭上に視線を向けたその時を同じくして、鉄槌の騎士は得物を振り下ろしていた。我が道を遮る壁を容赦なく破壊するために……。

「アイゼン！！」

「Giant form」

「行くぞリイン！！！おりやああああああ！！！！！」

轟音と共に天井が砕け、大量の粉塵がまた巻き起こる。相対していた双方が突然の状況を飲み込んでおらず、固まっているなか突撃してきた二人は行動を起こしている。先に仕掛けるのはリイン。フリーレンフェッセルンでアギトとルーテシアの拘束に掛かる。一瞬で二人のいた場所が凍りついた事にたじろぐガリューをさらにヴィータが狙い撃つ。

「吹き飛べ！！！」

無防備な側面にグラーフアイゼンが叩きこまれたかに見えたが、左

手で寸でのところでガードしていた。ギリギリと押し込み耐えきるかと思えたが気合い一喝、振り切つて壁へと吹き飛ばした。

「おう、待たせたな」

「みんな無事ですか？」

目の前で起きていたことをただ見ていたスバルやティアナからは「隊長達つてやつぱす」「」との声が・・・「ヴィータ副隊長！？」後ろ

ヴィータの頭を目がけ大きく腕を振りかぶるサンダーの姿がそこにはあった。が、狙われている本人は特に慌ててはいない。

「一応、隊長は私だけじゃないんだぜ」

その言葉を言い終える前に鈍い音が一回聞こえたと思うと、壁にまた一つ穴が増えていた。

「アセルスも結構無茶苦茶よね……居合が防がれたら、鞘で殴り飛ばすなんて」

デバイスを納刀しているアセルスを見ながらティアナはボヤいていた。

「でも局員が公共施設壊していいのかな・・・」

「[ ]は廃棄区画だからいいのよ」

こんな戦いがあつてか、気を失っていたキャロが気が付いた。心配

そうにフリードとヒリオがキャラを見つめている。ビリヤーの心配は無さそうだ。

「ちつ・・・逃がしたか」

「ヒツヒツも逃げられたみたい」

「ヒツヒツも逃げられた・・・ですね」

ヴィータ、アセルス、リンがそれぞれ確認をしているが一人と二体に逃げられたようだ。なら、これからすることはただ一つ。直ぐに追いかけることだ。追いかけるだけなのだが、相手も簡単ではない。次なる一手をすでに発動させている。

「なんだ・・・この揺れは」

地下に突如揺れが襲い、大量の召喚魔法陣が展開される。

「！」の上で大型の召喚の気配があります。それにこの召喚陣も多分

…

「とにかく脱出だ！スバル！！」

「はい、ウイングロード！」

地上に水色のウイングロードが螺旋を描き形成される。

「スバル、ギンガ先に行け！！私は後で飛んでいく

「エリスも一緒に上がって！私も直ぐに追いかけるから

先頭をスバル、ギンガの二人が務め、殿はエリスが務め、すぐに地上へとFWは脱出した。地下に残っているのはアセルスとヴィータトリイン。各々が視線を合わせるとお互い領き、魔方陣から現れたガジェットや魚人へと向かっていった。

それは一瞬だった……

ガジェット？型、？型、魚人の魔物。総数30は居たのだろうか…だがそれは無残にも斬り、潰され、凍結。全ては爆散、昇滅していった。

「つし。」JACKもやべえ、すぐに上がるぞアセルス！！

「了解です、ヴィータ副隊長」

スバルが残してくれた、ウイングロードもそう長くは残らない。地下には用はないのだから先に地上に上がっているFWと合流するだけだ。

・・・ゾクッ

背中に走る嫌な悪寒……何だか……何か圧倒的な恐怖といったところか。何かがすぐそこまでやつてきている……ただそれだけは分かっている。

私の中に芽生えているのは純粹な恐怖。初めてかもしないこの感覚に私は飲まれかけている……そして……

そいつは現れた

視界に移る影…。甲冑に全身を覆われた操り人形といったところか。ただ不気味な存在がそこには立っていた。

地上に上がろうとしていたヴィータ、リインも気付いたようだ。

「待て！リイン、この反応は…かなりヤバいぞ…」

「はい、ヴィータちゃん…この魔力、とてもなく大きいです」

「…」

身体が竦む…足が前に出ない…動けない…恐い…怖い…

見えてはいない…だが分かつた…眼が合つたことを

「きやああああああああああああ」

恐慌状態に陥る私…そして誘発されるようにブーストを発動していった。

「あああああ…ああああああああああああ…」

声にならない言葉をあげながら、その場に倒れ込む。意識が錯乱してでもではないが、眼前の相手に太刀打ちなどは到底できる状態ではなくなった。

奴は一步ずつ、ゆっくりと音を立て近づいている。アセルスの元に一步、また一步。金属の音が恐怖心を煽る…アセルスの心は完全に支配されている。

「コニゾンイン」

激しい轟音が地下に響き渡つたと同時に土煙が舞いあがる。全体的に白を基調としたバリアジャケット、そして髪。リインとコニゾンをしたヴィータが奴を吹き飛ばしていた。

「アセルス！？大丈夫か！？」

が、いまだに声をあげながら震えている状況のままで復調の兆しは見えてはいない。ヴィータも現在の状況を軽んじてはいない。最悪といつても過言ではない。謎の相手は、魔力は推定でもSSSに近い。さらにアセルスを恐慌状態に陥れるなど、不明な点が多くすぎる。

「敵であることは間違いないのは確かだ。ただ私も怖いんだけど」

「…」

ぎいこいいしいい

グラーフアイゼンと小手がぶつかり火花を散らす……吹き飛んだ場所から一瞬で詰めてきたのだから、ヴィータも驚愕している。

「くつ・・・こんの野郎！……」

ヨーヴンを使っているのだが完全に押されてしまっている。相性の問題もあるがそれでも、押し勝てない……ヴィータも焦っている。

「舐めんなーおらああああ

一瞬の脱力の後に身体を捻り、相手を前に出せるとすぐに蹴りを一発…またしても壁へと吹き飛ばした。

「アセルス！いい加減に目を覚ませ！…一人じゃ無理だ、アセルス

！」

言葉を同じく、またしてもヴィータは鍔迫り合いに縛れ込む

そして……

〔主、我的名前を〕

「・・・・・」

〔主、我の名前を呼ぶがいい〕

「・・・・・」

「主、叫ぶのだ…我の…我の名を」

名前……名前つてなんだっけ。何だろつ……

そういうや、今持つてゐるこの刀…すゞく綺麗。刃は月のようで、人で  
いうならば美人で…

名前……名前……

月の光の下で輝く美しき人の如く

そり、お前の名は……

「月下」

「主よ、真の姿を……。破魔の刀としての力を」

淡い光がアセルスを包み込む。それはアセルスの持つデバイスから発せられている。そしてその光はどこか懐かしく暖かい光だった。

「ありがとう……月下。お前のおかげで恐怖に食われる前に戻つてこれたよ」

「 我の持ちうる力で務めを果たしたまで。主」

「 分かってる。 いくよー。」

鞄に一度納めると、地面を踏み切り、奴のもとへ。ヴィータもアセルスが復活したこと気に付いたようで、距離を置くことに。

「 アセルス、無茶はするな！ 奴は相当手」わいわい

コクツと首を縦に振ると、居合で一撃。甲冑の胸に直撃を与えることができた。が傷一つ付けることができなかつた。予想外なことに少し驚いたが怯ませることには成功したようだ。

「 ヴィータ副隊長、天井がもう崩れそうです。一気に行きましょう！」

「 ああ！ 合わせろよ！ ……アセルス」

お互いの得物を握り直すと一呼吸のずれを持つて飛びだした二人。先手はヴィータ……奴目がけて頭上へ大きく振りかぶったアイゼンをぶちかます。

だがそれは易々と受け止められてしまった。が、それこそがヴィータの狙つところであった。

「 わざわざ受け止めてくれるなんてな。アイゼン、ぶち抜け！ ……」

## かめごひら割り

よほどの衝撃なのか、甲冑が震えている。ヴィータも手ごたえありといったところか。追撃せず、すぐさま距離を取った。そしてその背後からアセルスが踏み込んできた。

## 逆風の太刀

風を斬るように駆け抜け、すれ違いざまに神速の一太刀。ヴィータとアセルスの即興での連携

## かめごひらの太刀

ネーミングはあれだが、かなりのダメージはあったようだ。

ただ、月下が当たる寸前に手でガードされてしまったことが悔やま  
れるが…

ぱきつ・・・ガシャン・・・

手の部分が砕け、地面に落ちた…そこに現れたのは紛れもない人の  
手だった…そして白く…華奢な…

「・・・なつ！？」

消えた…

その場から奴は完全に消えた。気配もない。

忽然と、急に消えた。

そこには壊れた甲冑の一部分と、長い髪の毛が一本だけ残されていた……

「人だったの……あれは……。それに、あの手にこの髪……もしかして

……」

「アセルス、今は脱出だー早くいくぞーー！」

ぐしゃああああん

天井が限界を迎えた音だった。

side out

激戦地下2（後書き）

またまたおかしいところもありますが生あたたく見てやつてください。

デバイス名「地下」

F200先生からいただきました。

ありがとうございました。（^-^ゞ

「ああ～やつちやつたよ……」

ルーテシアに対して止めるように助言していたアギトだったが、ルーテシアの召喚した地雷王により、先ほどまで戦っていた地下が消滅した。

「ガリュー、サンダー……傷大丈夫…？」

ルーテシアの傍らにはガリューとサンダーが立っている。だが腕や胸からは、先ほどの戦闘の影響か赤い血が流れ出している。だが、主人を心配させまいと、気丈に振舞っているのが言葉を発せずとも分かる。

コアへと戻つて行く二人を眺めていると再び潰れた道路へと目を向けたその時だ。

地雷王が鎖に縛りあげられているのが視界に入ってきた。さらに何かに気付いたように顔をあげると蒼と水色の魔力の道がこちらへと向かってきているのが見えた。走るのはナカジマ姉妹……蒼水の道を駆け抜けるのはエリス。

一気に距離が詰まつてきているのが分かつた二人はすぐさま迎撃に移るが…

「させない！」

シルエットを解除したティアナによる牽制射撃が行われ、二人は攻撃を中断した……かに見えた。回避間に紫のクナイと火炎球がティアナ、そしてウイングロード上の三人に放たれていた。

ティアナはすぐに飛び退き回避、スバルとギンガはトライシールドを使ってそのまま進むことを止めはしない……その影に隠れるようにエリスとエリオが居た。エリオは完全に一人の視界にはまだ一度も映つておらず完全にノーマークの状況だ。

「エリオ」

「はい、エリスさん」

「ソニック」「

金と銀……一筋の閃光が駆け抜けた。

田ごろの訓練を通して息は合つてきたのは全員感じていること。全員が自分の役割をきっちり果たしている。まさに今がそうだった。カートリッジの薬莢が一発分落下。

「そこの……ディバイーンバスター」

なのはの代名詞といつても過言ではない砲撃。スバルも彼女を尊敬して使つてはいるが、なにも使えたのは彼女達だけではない。彼女から直接教えを乞うティアナもまたそうなのだ。

この勝負の分岐点を逃してはならないことはセンターのポジションを任されていいるからこそよく分かっている。彼女にはまさに今が分岐点であると判断した。切れる手札は切るべきだ。だからだれにも見せなかつたカードをここで切つたのだ。

「なつるつー！」

「・・・」

橙色の砲撃は一人を裂くように間を貫いた。直撃は元々狙つてはない。二人を別れさせることこそが彼女の狙い……

「いい判断ですよティアナ！」

アギトとの周りを囲むように水色のダガーが無数に現れる。そして喉元にはデバイスの切つ先が触れている。

ルーテシアは道路の淵に降り立つた。がそこを狙つていたかのように金銀の閃光が壁を蹴つて目前に迫つてきた。

ルーテシアの目に姿が映る……がこちらも喉元にデバイスが突き付けられていた。

「ここまでです」

言い放つとアギトとルーテシアにバインドで拘束。拘束を担当したのは地下に残っていたリインだ。そしてアギトにデバイスを突き付けていたのはアセルス。そして…

「おまえらよくやったな。さてと…子どもをいじめてるよつで嫌なんだが…市街地での危険魔法使用及び公務執行妨害で逮捕する」

アギトとルーテシアの前に降り立つたのは、紛れもなくヴィータだつた。

やつぱり……あれぐらいなら死はない……

潔く諦めているアギトの横で、素直な感想を心で述べていると、そこに少しお嬢様気味な口調の女性から通信が入ってきた。

近くのビルの屋上

「ティエチちゃん、ちゃんと見えてる?」

「ああ、クアットロ。遮蔽物もなし空氣も澄んでる……良く見える」

蒼いボディースーツの少女が二人。一人は眼鏡をかけたクアットロと呼ばれ、一人は何かを布で巻いた物を持っているディエチと呼ばれる少女達だ。

そのうちの一人…ディエチが遠くを見つめている。ここからでは特に何も見えてはいない…が彼女の眼にはしっかりと見えている。これから狙うべき獲物が。

「しかし、この身体つて便利だよね、色々と」

「まあ人であつて人ではないですしい」

人であり人ではない……彼女達は機械の身体を後天的に持つ者達…

「戦闘機人だからね…。それより撃つていいのか?ケースは残せると思うけど、マテリアルの方は壊れることになる」

「ドクターいわく、本物ならそれくらいでは死なないって。それよりも、敵さんの事、過小評価し過ぎたみたい。？型と幻影が全部落とされちゃった。だからディエチちゃん…今すぐ落としてあげて」

満面の笑顔を浮かべながら全く真逆のことを口にするクアットロにはついていけないと、ディエチは首を竦めている。だがドクターからの任務である以上、彼女に断る義務もない。

カノン砲が姿を現す……使用者は当然ティエチ。

これって目立つから使いにくいんだけど、まあドクターにも色々考えがあるんだろ?ナビ。ただ悪気はないけど……

「インヒューレントスキル  
IIS ヘヴィバ렐」

さて、チャージ完了まで30秒。まだ気付かれてもないし60%ぐらいで十分でしょう。・・・んっ?クラット口はウーノ姉さまと通信中か?何かあつたようだけど、私は私のやる事を全うするまでだ。

「チャージ完了。ヘヴィバ렐発射」

そして同じくして

ルーお譲様、手助けします。セインちゃん、手はず通りに

はいよ、クア姉

セインと呼ばれる少女もまたどうやら彼女達の仲間のようだ。そしてセインはというと、地面の中から通信しているといつ奇妙な光景である。これもまた彼女達の能力である。

クアットロ…

私の妹がルーお嬢様をお助けします。その前に一つ、その前にいる赤いチビ騎士に言つてしまいたいことがあるのですが

ルーテシアは黙つて頷き、クアットロからの言葉をリアルタイムで紡いでいく。

「逮捕はいいけど…貴女はまた守れないもね…」

その言葉にヴィータは形相を変え、ルーテシアへと詰め寄った。彼女の心に残る傷、後悔を的確に狙つた言葉だ。そして、この言葉のもう一つは…宣戦布告。

「気付いたようですが、もう遅いですわ。ち・ょ・く・げ・き」

その言葉がタイムリミットだった。

爆音とともにヘリは爆風に包まれた…

「ふつふふのふ〜ん。木端微塵つてやつね」

「黙つて。今、命中確認中」

異質な眼を使い命中を確認する……そして煙が晴れたそこには健在のヘリと一人……

side out

突然の砲撃に現場、ロングアーチともに慌てふためき管制などあつたものではなかつた。しかし全員の気持ちは同じ。ヘリは無事だということ。そして無事であることを信じて疑わない者がここに。

「大丈夫。ヘリは落ちてない。それだけは確實に言えることだよ」

「アセルス、その証拠はあるのか！？」

若干食い気味に詰め寄るヴィータをなだめるアセルス。彼女には確信があつた。何故なら……

「新モードのテストで何度もやられましたからね」

ヘリの方を見上げそう答える……そして煙が晴れたそこにはスター<sup>ズ</sup>分隊隊長。高町なのはの姿があつた。

「ぎりぎりで防御成功。ヘリも無事だよー！」

なのは専用の限定解除。レイジングハート・エクシードモード

これにより従来よりも魔力が単純に強化されることになり、全体的

なスペックが向上することになる。

「なのはさんとレイジングハートエクセリオン…共に無事です。へりも問題ありません」

なのはにより防御が成功したことが確認されると管制室がドッと沸きたつた。その報告を聞いていたはやても、ホッと胸を撫で下ろし、すぐに行動を開始した。

「あら～ディエチちゃんどうこいつ」と～」

「全力じゃないとはいって、あれを防ぐなんて」

ヘリを破壊しようとした一人は予想外の結果に少々戸惑っている。奇襲が失敗した以上は作戦を中断し、撤退することが鉄則だ。そのことは一人も重々理解はしている。

セインちゃん、後はお願いね。私達は撤退するから

はいよ～

すぐさまセインはルーテシアに連絡を取り、ISDディープダイバーを用いて救出を開始した。セインはルーテシア、ケース共に奪取することに成功していた。

しかし、この二人はそうはいかなかつた。

「ディエチちゃん、撤退するわよ」

「ああ、分かつてる」

クアットロは飛行可能だが、ディエチは飛行することができない。なので、ビルを飛び継いでいくことになる。

「見つけた……」

突如飛来する金色の閃光……なのはと共に空を抑えていたフェイトだ。

「市街地での危険魔法使用及び殺人未遂で逮捕します」

「遠慮しちゃます～」

踵を返し、すぐさま逃亡を図る一人。当然これを黙つて見逃すわけもなく追撃に出るフェイト。しかし敵も愚かではない。フェイトのスピードに勝てないとみるや、ディエチをクアットロが抱えこみ、彼女のISを発動させる。

「ISシルバーカーテン」

ISが発動……同時に一人の姿が景色に同化していく。どうやら光学迷彩の類のようだ。

「はやて……」

しかし一人の思惑とは違い、フェイトは離脱していく。ビルの影に

降り立つとすぐにシルバーカーテンを解除し、後方を振り返る。

「離れた…？」

「クアットロ、上！」

「ほんま、苦労させてくれたなあ…おかげで何発のフレーズヴェルグ撃つたと思つてんねん。しゃあないから、これで憂さ晴らしさせてもらうで」

はやての詠唱が完了すると、黒紫の球体が頭上に浮かぶ…だがこの球体の大きさは尋常ではない。

「遠き地にて、闇に沈め」

シユベルトクロイツを振りかざし、最期の詠唱を完了させる。

「デアボリック・エミッション」

見えないなら広域殲滅であぶりだすまで。フュイトもこの事を理解していたからこそ直ぐに退いたのだ。

「広域魔法…！」

広域魔法の拡大からデイエチを抱えなんとか範囲外に逃げることに成功し、何とか一息付こうとした矢先…一人を桜と金色が挟みこむ。同時にカートリッジが一発ロードされる。

「エクセリオン・バスター」

「トライデントスマッシュヤー」

桜色と金色の砲撃が一人を強襲する。逃げることもできずにただ、直撃コースなのだが、着弾際に何かが一人を連れ去った。そして一色の砲撃は相殺され爆ぜた。

「避けられた！？」

「なのは、何かが割つて入つたの見えた？ アルト、追つて！」

どうやら何者かが砲撃に割つて入り、一人を連れ去つて行つたようだ。間もなく反応をロストしたことが前線に伝えられた。

すまない、なのは…、それにはやて。こつちは完全に持つて行かれた… FWは悪くなかった。あたしのミスだ

私もです、はやて…ごめん

今回は敗北に近いものがある。敵の能力を知る事ができたことは大きいが、隊長3人の限定解除を使ってまで敵を逃してしまった。そして捕えていたアギト、ルーテシアに逃げられ、レリックも奪われてしまった。

今回は私達の負け… やな。ただ女の子とみんなが無事でなにより  
や

FW達もその言葉を受け少しあは氣分が楽になったようだ。ひとまず、現場での報告書をまとめる」とと、病院に女の子を搬送するため六課に戻る事を選択した。六課に到着したころシャッハと、シグナムも到着した。だが二人も戦闘後の様子だつた。

一方…

「全く、セインはケースにルー御讓共に助けたというのに、お前たちはなんてざまだ」

「『』みんなさ」「トーレお姉さま」

「感謝…」

トーレと呼ばれる長身の女性…彼女のヒラクライドインパルスによる高速移動で一人を救出したのだ。

「それよりセインちゃん、ケースを確認してちょうだいな」

はいはーいと答えるとケースを開封。中には9番のレリックが。

「これも違つ…」

自分の欲しい番号とは違つ為少しがつかりした様子のルーテシア。だが他人から見ればポーカーフェイスの為、普段となんら変わらぬ

いが。

「セインちゃん。このレリック、ドクターが実験に使うからって持つて行つてあげて」

「はいはーい

少女の代わりに奪われたレリック。

そして病院で眠る女の子。

物語は混迷を極めること……

**機人（後書き）**

レリック奪われました . . .  
さてこれからどうなるのか、しつかり書いていきたいです。

遅くなりました m ( ) m

人造魔導師素体の少女。そしてレリック。

彼女とレリックを巡る戦いの後、六課は少しの休息を迎えていた。たび重なる実戦に加えて、今回保護した少女「ヴィヴィオ」と少しでも触れ合いたいとのことから、多忙な業務から時間をつくりこうしてピクニックに来ているわけだ。

とはいっても、六課を留守にするわけにもいかず、敷地内の森でゆっくりと行っているのだ。

「う～ん。いい天気。ピクニック日和だね」

「なのはさん、ちょっとのんびりし過ぎじゃあ…痛つ！？」

なのはの膝の上にちよこんと座るのはヴィヴィオ。一輪のタンポポのようすに可愛くもどこか凛とした印象を受ける彼女の髪をなのはは優しく撫でている。事情を知らない他人が見れば普通の母娘だが、正しくはまだそうではない。「仮」という言葉が正しいだろうか。彼女を幸せにできる家庭が見つかるまでの…今はまだそんな思いの最中に彼女はいるのだ。

そして、思慮が一步足りなかつたスバルはといふと……頼もしい相棒に脳天に一撃を加えられていた。当然、ヴィヴィオには気がつかれないように。

広げられたシートの上には、スターズ、ライトニング、ナイトのメンバーが揃っている。部隊長から隊長達が勢ぞろいしていく問題ないのか。そこはバックヤード陣の多大なる協力というなの犠牲で成り立つてこるのはお約束だ。そしてレイジングハートのメンテナンスでなのはが前線に出られないところもあるのだが。

「こんな風にやつくりできるなんて思わんかったわ」

「主はやで、偶の休みも良いものでしょ。後でシャマルとザフィーラには感謝しておかないといけないな」

「どこかでクシャミが聞こえたのはさておき、田の前に広げられたオーバーギリやサンドwich、フルーツタルトなどが用意されている。これはなのはやアイナさん、はやで、フェイトが協力して準備したものだ。この4人が調理したとなれば味も保証済みである。

眼の前の料理に瞳を輝かせ、我慢できなくなつたヴィヴィオが取り皿に分けられたサンドwichを一つ、口に運ぶ。トマト、ハム、レタス……なじみ深い素材で作られたシンプルながらも味の歴史を感じられる一品を少女は初めて口に運ぶ。

トマトの酸味、ハムの微妙な塩加減、レタスの食感、それら具材をふんわり包むパン。口の中に広がる様々な味が少女に様々な喜び、感想をもたらす。頬を深紅に染め、口いっぱいに頬張るその表情はどうにか至福に満ちているようだった。

ほんとにこの子が人造魔導師素体なんて…信じられない。こうして見るとホントに可愛い女の子なのに……あつー？喉詰まつてる…！

膝の上のヴィヴィオがサンドウイッチを喉に詰まらせていてここに気付くとフェイトちゃんがコップに入ったオレンジジュースをヴィヴィオに渡してくれていた。流石フェイトちゃん、私の自慢だよ…

／＼＼

コクコクと喉を鳴らしながらオレンジジュースを飲み干し一息付くと振りかえり満面の笑みを浮かべて感想を述べてくれた。

「なのはママ、すついへおいしいよ

「うん。ありがとヴィヴィオ／＼／＼

周囲のみんなも微笑ましいこの光景を見つめている。はやてちゃんも、うんうんと頷いているようでとても嬉しそう。エリスは、はやてちゃんの方を見つめて何か企んでいるようだけど、感づかれたみたいで頃垂れてる。うんー見なかつたことにしよう。

その横ではスバルとエリオが大食い勝負してたけど。ホントに食べざかりだね、二人とも。

食事も一段落して、各々が思い思いの時を過ごしている。アセルスとエリスがヴィヴィオと遊びたいと言つてくれたのだが、何故だかヴィヴィオが怖がつてしまい、代わりにフェイトちゃんがヴィヴィ

オとボール遊びをしている。クールなタイプが駄目なのかと思ったけど、シグナムさんは大丈夫だったし……なにが原因なんだろう。

リズムよく跳ねるボールをキャッチしようと手を伸ばしたその時、運悪くバウンドが変わってしまい、吸い込まれるように顔へと跳ねる。絵に描いたような展開に思わずフェイトちゃんも駆けだしていった。

ゴムボールといえど顔に当たれば痛いものである。幼ければ尚更だ。瞳には涙が溜まっているのが分かりフェイトちゃんが側に寄ると堰を切つたように涙があふれ出した。

「ヴィヴィオ、大丈夫だよ。痛くない、痛くない」

「ふえええええ」

少し赤くなつたところをフェイトちゃんが優しく撫でてくれている御蔭か、ヴィヴィオもすぐに泣き止んだようだ。私が側に来たのが分かると直ぐに飛びついてきたあたり大丈夫みたい。

「ヴィヴィオ、えらいよ。すぐに泣き止んだもんね。よしよし」

ヴィヴィオの目線まで顔を下ろし頬笑み頭を撫でてあげる。私に抱きつきギュッと力を込めていたヴィヴィオは声を上げ泣き出してしまった。

「どうして泣くの、ヴィヴィオ？」

困つた私にフェイトちゃんは優しく声をかけてくれる。

「安心したからまた泣こむやつたんだよ」

ヒリオやキャロの小切手を知っているフロイトちゃんが言つて  
だからさつとそつなんだよね。まだ泣き続けるヴィヴィオをそつと  
抱きあげて耳元でそつと呟く。腕の中の少女を心配せないがため  
に。

ママは元気いるからね

うそ……

「どもは感情の起伏が激しい。喜怒哀楽を全身で表現するのだ。そ  
して一寸に全力を費やし・・・静かに眠る。

先ほどまで泣いていた少女は何処へやら。今はなのは腕の中で静  
かに眠っている。

「なのは、ヴィヴィオの事、まだ考へてるの?」

「まだ、自分じゃ分からなことよ」

フヨイトちゃんの言いたいことは分かってる。でも私にはまだ……わからぬ。

一  
方

和やかなこの場から森の奥で周囲の警戒をしていた人物がいる。彼の世界で見覚えのある生物から報告を受けるとすぐに血相を変え移動を始めた。

普段は冷静沈着だが、此度はそうではない。まだ信用していないといつた表情を浮かべすぐさま全体に合流すべく森を駆けていた。

眠っていたはずの、ヴィヴィオの悲鳴が和やかな空気を切り裂く。突然の出来事にはやフェイトも慌てている。

「痛つ……」

次の瞬間、右足と左足の痛みが走った。

この感覚はいつ以来だろうか……自分では見ずとも理解できていた。負傷したこと。そして血が流れていること。

両足に矢が2本ずつ刺さっている。

「ママー!?

事態に気付いたヴィヴィオはパニック起こし泣き叫び、私に抱きついてくる。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

心配させまいと、優しく抱きしめヴィヴィオをかばう体勢を取っている。フェイトちゃんも警戒体制に入つており、次の矢を全て撃墜してくれていた。

「こんな時に襲撃だなんて、一体誰が……」

矢の軌道から襲撃者の位置を把握しようとするが、前方には森が広がつており目安も儘ならない状態だ。

「なのは、足は大丈夫?」

反射的にかばいながら防御を試みたものの、デバイスの補助なしでは咄嗟に魔法を発動させることもできなければ、強度もまた然りだ。  
「なんとか。レイジングハートがないから、防御も全然通用しないみたい」

苦痛の表情を浮かべ矢を引き抜く。抜き終わると血が鮮やかに吹きしぶる。止血程度ならば補助無しでも行えるため、なんとか出血は止めることができたのだが……

泣きつ面に蜂

悪いことは続けて起るものの。

見覚えのある異質な空間がなのはを中心に展開され始めた。

「これは……妖魔！？」

本格的にマズイ状況だ。このままだとフェイトちゃん一人で戦うことになる。はやてちゃんや、みんなも気付いてるみたいだけど距離があり過ぎる。

一人して覚悟を決めかけた矢先だ。

「高町、テスタロッサ！！」

空間が完成する一歩手前、風を切り、異質な空間に割つて入るのは烈火の将「シグナム」だ。

「これは余計な邪魔者が入つてしまつた」

重苦しい空間が完成を迎えると現れたのは白髪の男。そして例にもれずこの男もまた妖魔だ。

「セアト……！」

叫びと共に空間に飛び込んできたのは緑髪に宵闇の霸者「イルドゥン」だ。

妖艶に輝く剣を振り抜くもセアトは後退し回避すると、姿を眩ます。

虚無の空間に声は木霊する。

「ラスター・バンの力を吸収した後だ。お前など敵ではない」

「やはり、お前だったか…セアト…！」

次に姿を現した時、それは今まで見聞きした妖魔そのものだった。だが今回は今までとのタイプが異なる。右手には弓が装着されている。どうやら私もそれで射られたみたい。

「許せない……こんな小さな子を狙うなんて」

「動けない女が何を喚くか。目的はあくまでもイルドウンとそここの幼子だけだ」

「尚更…許せないよ…」

「なのは、私達が何とかするから。ヴィヴィオのこと、お願いね」

「悔しいナビ……お願い」

分かつてはいるものの、状況はかなりシビアだ。防衛戦となれば尚

更当然だ。なのはは魔法が使えないうえに動けない。さらにヴィヴィオを守らなければいけない。護衛対象が増えることはそれだけ不利になる事は間違いない。

「必要なものだが今回は使ってやるとしよう」 - - -

空間の外には、5人を除いたFWが取り残されており、この空間を直接突破できるのはアセルス、白薔薇姫だけに限定される。はやてとしてはすぐにアセルスを送り込みたかった。だが状況が許してはくれない。

「ここにつらぬ！？」

なのは達が飲まれた空間の前に3つの影が出現した。見覚えのあるものは身構え、額に汗を搔いている。

倒したはずの妖魔達

炎の従騎士 水の従騎士 森の従騎士

エリオ、キャロからすれば因縁の相手も存在している。ましてや、

スバル、ティアナ、ヴィータ、はやはては妖魔との戦闘経験は無い。

「！」つい倒したはずやなかつたんか！？

「ええ、倒したはずなんですが」

はやてとエリオのやりとりを遮るように、空闇を声が支配する。

「私の土産だ。妖魔のクローンを存分に味わってくれた  
まえ」 - - - -

妖魔がクローン……機械などを嫌う妖魔がそのようなこと独自に製作することなど到底不可能だ。

アセルスが思考に耽り、そして一つの答えにたどり着く。だがそれはここではまだ言つべきではない。そう判断するとすぐに行動に移る。

「八神部隊長、グループによる各個撃破が最適だと判断します」

「私とエリスがあの森の従騎士を。スターズ、ライトニングは水の従騎士を。アセルス、ヴィータ、白薔薇姫は炎の従騎士を。いけるな！？」

「「「了解」」」

グループに分かれるとすぐに対象に走り出す。従騎士は空間を作り出し、それぞれが空間に飲まれていく。

「ヒューマンとは本当に脆いものだ。では大人しく死んでいただこう」――

セアトの完全に見下した言葉に内心怒りを燃やしていくフロイト。だが、それを戯言と嘲笑う者がいる。

「セアト。貴様はヒューマンというものを甘く見ていいよ! だな。それでは貴様は我に勝てん。ましては我らにもだ」

どうこうことだと言わんばかりに顔を齧めるセアト。そして堂々と宣言する。

「そんなものに屈しないことだ。そつだろ?……はやて――」

聞こえなくとも気持ちは通ずる。思いが同じだからこそ分かるのだ。

「私達はいとこに困りはしない……」

「己が相棒を掲げ全てが光に包まれた……」

「セットアップ」

イルダウンのキャラが少々壊れぎみかも（（（・・・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7590q/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紺碧の姫

2012年1月10日20時53分発行